

---

# 魔王の娘と異世界拉致された俺

きしかわ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王の娘と異世界拉致された俺

### 【コード】

N1801U

### 【作者名】

きしかわ

### 【あらすじ】

家に帰るとドアから手が生えていました。その手に引きずり込まれ、俺は異世界に拉致されてしまいました。「さあ往け下僕！」下僕ってどういうことでしょうか。しかも俺を呼び出した少女（凄く可愛いが胸がない）が魔王の娘っていったい何から突っ込んだらいいんでしょうか。異世界に召喚された主人公の、ナイチチ娘に振り回される日々が始まる。

ポロリは（でき）ないよ。

ベタな異世界召喚モノです。主人公TUEEEEをお楽しみ頂ければ幸いです。

## 1話 家に帰るとドアから手が生えていました。

家に帰るとドアから手が生えていました。

唐突ですが自己紹介をしようと思います。

俺は天原冬弥<sup>あまはらひつと</sup>。18歳です。

身長は170センチとちょっと。体型は太りすぎず痩せすぎず。まあ普通。

家族構成は両親と俺、それと4つ下の妹の4人。

俺自身のイケメン度は妹に言わせると「アニキの顔？黙っているとそれなり。喋っていると馬鹿」だそうです。

それって面の良さ関係なくね……？と思わなくもありません。

そんな俺はこの春、特にめでたくもなく浪人となった健全な男子です。

浪人になった原因は、持ち前の方向音痴が遺憾なく発揮された結果、試験会場に辿りつけなかったというステキな理由です。

この受験生なら一度は危惧するものの絶対に嵌らない罫っぽい何かにかかってしまったが為、

妹からはニート呼ばわりされるようになりました。

過ぎた事は仕方ないので、今はコンビニのアルバイトをしています。ニート呼ばわりされるのも嫌だったことですし。

以上、簡単にですが自己紹介でした。

……いやすみません。ちょっと状況把握する必要があっただんです。何せ意味が分からないことが起こってるんです。

時は10秒くらい前まで遡る……。

「あー、今日も疲れた……。適当に勉強して寝よっかなあ……。」「コンビニのバイトを終え、帰宅した俺は重い足を引きずり階段を登っていく。

早朝から昼までのシフトだったので、眠気が今になって襲いかかってくる。

2階に位置する自室まで辿り着くまでが非常にだるい。

「よし寝よう。うん寝ましよう」

浪人生と言う立場は家庭内でも微妙なもの、この時間の自宅には俺以外だれもない。

両親は共働きだし、妹は今頃学校だ。

ここで寝ても誰に咎められるわけでもない。

決意した俺はベッドに飛び込むべく自室のドアを開こうと。

むにゅ。

ドアノブに手をかけたはずの左手が、何か暖かくて柔らかい感覚に包まれる。

かすかに湿った感覚もある。

「えっ……?」

びっくりして手元を見やる。

ドアノブをひねるべき場所には確かに俺の左手があった。

ただし、握っているのはドアノブでなく、ほっそりとした女性のものと思われる白い手だったが。

ドアノブが有るべき場所から、手首より先と思われる誰かの手が生えていた。

そして俺はその手とがっちり握手をしていた。

「……………!?……………!!?」

人間、驚き過ぎると声も出さず、むしろ現実逃避を始めるのだと初めて知った。

そして現実逃避から帰ってくると必死になるということも合わせて知った。

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアス!! 離せえええええええええええ!!」

自分でもビビるような悲鳴を上げつつ手を離そうとしたのだが、ドアノブ手（仮）はガツシと俺の手を握って離さない。

全力で後ろに体重を掛け、倒れこむようにして逃げようとするも、ドアノブ手（仮）はその細指からは想像の出来ない握力で以て俺の手をロックしている。

なにこれ超怖い、ホラーですか! なんかの妖怪ですか! どうなるの俺!

ズ……………ズズ……………。

妙な音までしてきた。

半ば恐慌に陥りつつ、ドアノブ手（仮）を見ると、変な擬音を伴いつつドアに沈み込んでいく最中だった。

勿論、俺の手を掴んだまま。

「何処に連れてく気ですかああああああああ!!」

言う間にもドアノブ手（仮）はどんどんドアへと潜っていこうとする。

ガチ心霊体験だコレ、などと思う無駄に冷静な部分を意識的に思考の隅に追いやり、俺は全力で抵抗を試みる。

壁に足を掛け、空いていた右手で連れ去られつつある我が左手を握り締め、飲み込まれまいと懸命に堪える。

しかしドアノブ手（仮）も諦めずにこちらを引きこみ続ける。

「ぐぬおー!ぐぬおおおー!」

力と力が拮抗する。

どうやらドアノブ手（仮）もそれ以上強い力で引き込むことは出来

無いらしく、膠着状態になった。

しかし依然として油断は出来ない。

このホラーな状況から逃れる術を考えねばなるまい。

こういつたときの対処法と焦る頭で考え、咄嗟に俺は思いついた。

「観自在菩薩……！色即是空空即是色……！」

お経。確か般若心経だったとは思うが、なんとなく覚えていた部分だけを何度も唱える。

古今東西、化物の類は有難いお経に弱い、はず。っていつか弱点であつてくださいお願いします。

「ぎゃーていぎゃーてい……はら？ぎゃーてー……！」

藁にも縋る思いでお経を唱え続ける。

永遠にも思える時間が流れる。実際には数十秒の出来事なのだろうが。

と。

パツ、とドアノブ手（仮）が唐突に俺の手を離した。

「うおっ！ツ！？」

突然離されたため、俺は強く尻餅をつく格好で転んでしまった。

臀部が凄く痛い、俺としてはそれどころではなかった。

「ハ……ハハ……助かった……！」

全身から力が抜ける。一刻はドアに引きずり込まれるかと思つたが、俺は助かった。助かつたんだ！

ここに至つて初めて気づいたが、ドアノブ手（仮）とドアの境には黒い靄のような物が立ち込めている。

どうやらあの黒い靄から生えていたようだ。

ドアノブ手（仮）を伺うと、何処か諦めた（ように見える）雰囲気纏つてズブズブとドアに消えていく。

どうやら俺はドアノブ手（仮）との戦いに勝利したらしい。

やがてドアノブ手（仮）が殆どドアに沈み、見えなくなるのを俺は  
転んだまま見つめていた。  
腰が抜けて動けなかったというほうが正確なのだが。

この時、這ってでもこの場から逃げ出していれば、俺の人生は  
狂わなかっただろうに。

ドアノブ手（仮）があと爪ひとつ分で完全に消える、というところ  
まで来たところで、沈むのをやめた。  
なんか無性に嫌な予感がする。

俺とドアノブ手（仮）の間に沈黙が下りる。ドアノブ手（仮）は最  
初から喋っていないが。

そして。

無闇に動く相手刺激してしまう、とか野生動物に対する心得み  
たいなモノを思い出していた俺は、反応が遅れた。

ドアノブ手（仮）が急激に成長したように見えた。此方に向かって  
ぐんぐんと。

「何ですとおおおお!?!」

ドアノブ手（仮）がドアノブ腕（両腕）に進化して俺の足を掴んで  
きたのだ。

先程は手首の先程度だったというのに、今度は肘上程度までがドア  
から生えてきた。

それも両手だ。

「ちょ、それ、卑怯ー!!!」

本気過ぎるでしょうドアノブ腕（両腕）さん!

しかもどうやら先ほどより力が込められているらしく、爪が食い込  
む勢いで握られている。



今度こそ抵抗できずに俺はドアへと飲み込まれていく。

「ぐおおー!!」

つま先が黒い霧に触れる。

特に痛みなどは感じなかったが、ぬるま湯に使ったかのような温い感覚があった。

ぐにより。

足首までが霧に飲み込まれた。

お湯に浸した食パンを踏んづけた感覚といえはいいのだろうか、不快な感触がする。

そこでドアノブ腕（両腕）の引っ張り込もうとする力が一気に強くなった。

見る見るうちに俺の体が侵食されていく。

もう顎下までがドアに沈んでいる。

「誰か、誰か助け……」

こうして、抵抗虚しく、容赦のないドアノブ腕（両腕）によって俺はドアの中へと引きずり込まれたのだった。

意識はここで一旦途切れている。

1話 家に帰るとドアから手が生えていました。(後書き)

読んでいただきありがとうございます。

こちらの小説は不定期更新です。

作者のゆるいペースで更新されていきます。

どうぞよろしくお願いします。

2話 「私がおぬしの主じゃ!」「チェンジ!チェンジでお願いします!」。

気づくと俺は、あたり一面が真っ黒な空間に居た。

真っ暗でなく真っ黒なのは、少なくとも自分自身の体が見えるからだ。

けれど肝心の光源が見当たらない。太陽もなければライトもない。そんな状況で何故俺の体が見えているか不思議でならない。

「どういふ事なんだろ……っーか此処どこ……」

とりあえずドアノブ腕(両腕)に黒い靄に引きずり込まれたところまでは覚えてる。

とすると、この黒い空間はあの靄が立ち込めている場所なのだろうか。

試しにふうー、と息を吐いてみるが、目の前の真っ黒い空間に変わった様子はない。

「マジモノの心霊体験に巻き込まれたっばいからなあ……。すると此処はあの世?」

うわあ最悪だ、と頭を抱えなくなる。

まだやりたいことは山ほどあるというのに。

例えば……えーと、うーんと……。

……………。

進学、は別にやりたいことじゃなくて皆がそうしてるから流れに乗っただけだし……。

強いて言えば彼女が欲しかったくらいかなあ……。出来れば小動物系の守ってあげたくないタイプの。

更に要望を言わせてもらえれば、胸は大きいほうが好みだ。

いや控えめなのがダメだとかいうワケじゃないですよ?

ただ単に大きな胸には夢とか希望とか青少年の憧れとかが詰まってるというだけの話で。

やっぱり夢は大きいほうが良いと思います！

我が……呼び……よ……。

「……ん？」

声が聞こえてくる。

見回すが、真っ黒な空間が有るだけで、誰かが居るわけでもない。

「空耳かな……？」

我が……呼び掛け……よ……。

「あ、やっぱり聞こえる」

何処からだろうと意識を澄ます。

我が呼び掛けに応えよ。

高く澄んだ少女の声だ。

そう認識するやいなや、真っ黒だった空間にぽつんと光が灯る。突如として現れたそれは、人魂とでも言えばいいのだろうか。

ほんのりと赤く染まっているそれに、俺は何故か強く惹かれる。俺の手前に現れた人魂に近づきたくなる衝動に駆られていく。

我が呼び掛けに応えよ！！

一際強く声が響く。

次の瞬間、人魂は大きく燃え上がり、一時の間に真っ黒い空間を紅蓮に焼き尽くしていく。

「ギャアアア！焼け死ぬーっ！？……ってあれ、熱くないな、これ」  
唐突に燃え盛る炎に包まれ、ここで丸焼きになる未来を一瞬想像したが、この炎からは熱さを感じなかった。  
いや、確かに温度は感じるのだが、なんとというか凄く優しい温かさなのだ。

興味が湧き、恐る恐る炎に触れてみる。

ぐにより。

炎にあるまじき感触がした。それもつい最近、体験したばかりの感触が。

背中に冷たい汗が流れる。

「このお湯に浸した食パンのような、生温かく人肌的な感触は……まさか……」

思わぬ感触に、俺は炎に触れたまま硬直してしまふ。

すると、俺が触った部分の炎が、途端に姿を変えていく。火の粉をくるくると舞わせつつ、何かの形を成していく。最初に5本の指が見えた。次に手の甲が見えた。

白魚のような手とは正にこのことを況やとばかりの、炎から生まれたとは思えないほど白く華奢な手だった。次に腕が見えた。

そこで触りっぱなしだった俺の手は、ガツシと掴まれた。感触は完全に人の手のモノになっていた。

強烈な既視感に襲われる。

ここまで俺は理解した。これは、

「ドアノブ腕（今は片腕）さんじゃないですかアアアア！」

我が呼び掛けに応えよ！！さっさと姿を顕せ！！

すっごい命令口調の声が大音量で発せられた。  
しかもちよつと罵倒入ってる……！

周囲の炎が勢いをます。

轟々と音を上げてうねるそれらは、太陽のプロミネンスを彷彿とさせた。

「って冷静に状況描写してる場合じゃねえよ！離してよドアノブ腕（今は片腕さん）！」

「ーかあつつい！？突然熱くなったよこの炎！どうということなんです！？」

焦げ臭い臭いがしてくる。

見るとTシャツから微かに煙が上がっていた。

紛れもなく小火<sup>ホヤ</sup>である。

「ギヤース！焼け死ぬ！焼け死にますってこれ！」

我が呼び掛けに応えよ！！おぬしも焼け死にたくないじゃろう  
て！クククハハハハ！！

少女の声が哄笑になっている。

何この性格悪そうなセリフ。

そうかこの天原冬弥さんを焼き殺そうとしているのはコイツのせい  
か！

そう思うと、心の中に強い感情が生まれた。

俺はギリ、と奥歯を噛み締める。

状況から見て、俺の手を握っている あ、恋人握りになってる…

… ドアノブ腕（今は片手）も、この声とは無関係ではあるまい。

俺はこのドアノブから生えた手に黒い霧の中に引きずり込まれ、

今度は訳も分からないままに炎に巻かれている。  
それがこの声の仕業で有るのならば。  
どうして。

俺がコイツの声になど隸わなければならぬ理屈があるだろうか。  
確かに死にたくはない。  
けれど。

俺にも守るべき矜持というものが有る以上、唯々諾々この状況に  
流される訳には行かない。

だから。

だから俺は忌々しいこの少女の声に対し、大きく声を張り上げた。

「呼び掛けでもなんでも応えますから助けてくださいーいー！」

俺はまだ此処で死ぬわけには行かないんだ！

何故なら小動物系できよぬーの彼女を手に入れてないから！

夢も希望も手に入れないまま死んでたまるか。それが俺のプライド！

次の瞬間。

カッと辺りが眩い光に包まれる。

俺は思わず目を瞑った。ドアノブ腕が、俺の手をキュッと握っていた。

意識はここで再び落ちる。

頬を風が撫でていく。

その感覚に意識は浮上していく。

チリチリ、と聞こえるのは近くで何か燃えている音だろうか。  
遠くからは何か金属を打ちつける音がする。

耳障りだな、と考え　俺の手を握っていた誰かが、その手を離したのを感じた。

俺はゆっくりと目を開ける。

最初に目に写ったのは、深い赤に染まった双眸。

覗き込めば何処までも吸い込まれていきそうな、赤い瞳だった。  
それが今は、マジマジと俺を見ている。

風に吹かれ、彼女の前髪が一房、ふわりと揺れる。

流れるような金色の髪の毛。

一本一本が驚くほど滑らかに輝き、月のない夜空の下でさえどことなく淡い光を放っているように感じた。

鼻梁は驚くほど整い、肌は白く透き通っている　。

俺は衝撃に目を見張った。

いま目の前にいる少女は、今まで見たどの女性よりも……美しい。  
年の頃は16、7と言ったところであろうか。

身長は低いが、それは可憐さを増す要素でしかなく。

やや切れ長の目は、それでいて眼自体の大きさを損なわず。

薄いながらも確かな肉付きを感じさせる唇は、妖しい色香を放ち。



触らずとも分かる柔らかい髪の毛には、恍惚さえ覚え。

白い肌は、決して不健康なそれではなく、瑞々しい麗しさを備えている。

精緻なまでに完成されたそれは、アンティークドールを思わせるような美しさ。

確かに人でありながら、畏怖の感情さえ覚えずにはいられない、完成された作品。

これを単純に美しいと表現してしまつては、世の美しいという語彙を真つ向から意味のないものに塗りつぶしてしまつだろう。

見惚れてしまつ、とはこのことが。

思わず呆然と眺めていると、彼女の唇が微かに持ち上がる。

その些細な動作にさえ、視線を注いでしまつ。

ああ、彼女の声が聞きたい。一体どのような声音をしているのだろう。

「さあ往け下僕！あやつらを煮るなり焼くなり、二度とこのアルンシア様に刃向かおうなどと思わぬよう、骨の髄まで恐怖を刻みこんでやるのじゃ！」

悪役丸出しの表情で、彼女はそうのたま言った。

聞き間違ひではない。

だって俺、超集中して聞いてましたもの、いま。

しかもこの声。

こいつ、さっきの俺を焼き殺そうとしてたヤツだ……。

彼女は俺の後ろを指さしていた。そちらからは数人の狼狽えた気配があつた。

「クク……！この際、殺しても構わぬ。むしろそうしたほうが見せしめには丁度いいかも知れぬし！」

活き活きと不吉な笑みを浮かべ、心底楽しそうだ。

俺は一瞬前までの美しさとか何とか言っていた自分を、もう思い出せない。

落胆度メーターがひどい数値まで落ち込んでいくのが分かる。

何この言動、完全に電波じゃないか……。

そしてこの表情に確信する。絶対口クな性格してないですねこの人本当にありがとうございます。

嗚呼、現実とはかくも儂く、残酷なものか。

「おぬしの力も見たいところじゃしろう！はてさて、見るにも稀なヒトガタの精霊、どのような権能を奮うか楽しみじゃ」

俺は彼女に応えず、改めて彼女を見る。小さい。

一歩下がる。

そこで初めて彼女の全身を見た。

何処のお嬢様だと言いたくなるダークレッドのシックなドレス。

人外じみた美しさであることは認めよう。

しかし、俺は彼女の美しさに欠点を発見した。

はあ、とため息を漏らす。

そんな俺に焦れた様子で、彼女は俺に更に強い口調で命令してくる。

「どうした下僕！おぬしの主はこの私じゃ！命令をきかんか！」

「……主い？」

「そうじゃ！魔族を統べる王の娘にして精霊術の繰り手たる、このアルンシア・ドミトリス・メイロウこそ、おぬしの主よ！」

彼女は自慢気に胸に手を当て、ふんぞり返った。

その手の置き場を見て悲しい気持ちになり、俺は叫んだ。

「黙れナイチチ！お前なんてチエンジ！チエンジでお願いします！」

そう。アルンシア云々と名乗った彼女は奇跡の貧乳の持ち主だった。



### 3話 えーと英語だとジャパン。

「ちえ、ちえんじ……?」

「ナイチチが悪いとは言わない。ナイチチに罪はないんだ。でも、君は残念さが際立つよ。」

すっごく可愛い……ううん、美しいなんて表現が陳腐になるくらい素敵なのに！

それが何?その言動!下僕だとか主だとか精霊術だとか!

厨二病 ううん、電波なのも程々にしろよ!」

俺からの突然の反論に、びっくりした様子の彼女 アルンシアに向かい、俺は言う。

言わずにはいらなかった。

「人をローストにしようと言った上で、僕の主だつて?

あのドアから生えてた手は君の仕業だったんですか!」

最後にちよつと敬語になったのは、丸焼きにされかけたことを自分で言うから思い出してビビったわけではない。

ビビったわけではないんです。

「ド、ドアから手……?精霊側から見るとそんな風に見えるのかのう……」

「しっかりドアから生えてたよ!両腕がこう、ガチホラーな感じで精霊とかいう単語は無視して続ける。厨二病患者や電波ちゃんの単語一つ一つに構っていてもどうしようもない。」

俺は単純に状況把握に努めたかった。こうして彼女から一歩離れてみると同時、周囲の景色の違和感に気づいたのだ。

夜、しかも結構な深夜なのだろう。空には闇の帳が落ちている。

彼女の胸元に輝くネックレスに嵌った大きな赤い宝石が光を放っており、辺りを淡く照らしている。

これが唯一の光源だ。

何だろうこの寶石。中にライトの類でも仕込まれているのだろうかともあれ、寶石が照らす周囲を見てみると、どうやら此処はどこかの田舎道らしい。

路面は舗装されておらず、小さな石がゴロゴロと転がっている。

畦道には草が鬱蒼と茂り、草刈りなどの整備が成されている気配もない。

道から逸れるとすぐに林が続いており、虫が鳴く声が反響こたましている。当然のごとく車も走っていないければ、街頭すらない。

少なくとも俺は、自分が住んでいた町の中でこんな場所を知らない。俺の住んでいる町は都会ではないにしろ、それなりに発展した市街ではあったので、恐らく此処は俺の地元からは離れた場所だと思いつつ、いつの間にかそんな場所まで連れてこられたのかは分からないが、きつと俺が意識を失っている間に運びだされたのだろう。

「どうやって？と考えると、ドアノブ腕（両手）がずると俺を引きずっているブ　データしみた光景が浮かんできたので思考を中断する。」

「で、アルンシアさんだっけ。此処は何処、俺は何でここに連れてこられたの？」

「此処か？此処はドミトリス王国と商業国家コトナシの国境付近じや。して、お主を喚んだのはホレ」

アルンシアが俺の後ろを改めて指差す。俺は振り返り、そちらを見た。

そこには先程から気配を感じていた数人の男達が立っていた。

数にして10人前後だろうか。いずれも薄汚れた革鎧のようなものに身を包んだがそこには居り　革鎧？

何かのコスプレだろうかとも思ったが、俺はそれよりもビビるべき要素に気づいた。

彼らは誰もが日本人ではないとひと目で分かった。

彫りが深く西洋系の顔立ちをしており、髪の色もブラウンや赤毛、

金髪など様々だった。

何より彼らは一様にナイフや西洋のものと思しき剣を握っており、中にはやたら刺々しい突起を備えた棍棒や明らかに伐採用でない斧を担いでいる者もいる。

物語でありがちな山賊ないし盗賊然としたその姿をいざ認めてみると、中々に威圧感がある。

ただ、彼女に指差された彼らは目に見えて狼狽えているので、滑稽さが際立っているが。

「我らが魔族の領地、わが友の暮らす『ササキの森』に踏み込んだ拳句、『血の石』を盗み出した浅ましき盗賊ども　つまり、そやつらをサクつと殺つてもらおうとおぬしを喚んだのじゃ」

殺つてもらおう、の部分で男達　アルンシア曰く盗賊達から怯えた呻き声が上がった。

何この人達、電波ちゃんの言う事本気にしちゃってんのは思わずに居られなかったが、一番近くにいた男の表情は真剣味を帯びすぎている。

「……ドミトリスでどこら辺にある国だい？聞いたこともないんだけど。ヨーロッパあたり？」

アルンシアや盗賊さん方の容姿からして如何にも西洋系だったので、そう問いかけた。

この外人らは日本くんたりまで何しに来てるんだろうか。

「よろっぱ？なんじゃそれは、それこそ聞いたこともない国だのう。」

ドミトリスはクルニア大陸の西方にある国じゃよ。クルニア大陸の三強国の一つに数えられておる。そして私はそのの姫じゃ」

「姫とかは別にどうでもいいんだけど……クルニア大陸？なにそれ君の妄想？」

「妄想ではないわ！あと姫を軽く無視するでない！」

「じゃあ空想。だって地球にそんな国ないでしょ。空想本当にお疲れ様です」

「じゃから空想でもないわ！……ん？チキュウ……？もしかしておぬし……」

アルンシアは引きつった笑みを浮かべ、胸元にぶら下がっている宝石を手にとった。

そして何事かボソボソと小声で呟き、宝石の表面を撫でるようにして指を滑らせていく。

するとこれまで淡く光っていた宝石が明滅を始め、一際強く光ったかと思うと、宝石から一条の光が漏れ出し、俺の方向へ伸びてくる。「うわっ！？」

まるで一本の紐のようになった光は、俺の胸に当たると火花を散らしたように消えてしまった。

それを苦々しい表情で見届けたアルンシアは、ずいと俺に近寄ってくる。

俺を下から上まで目をこらすように観察して、彼女がますます顔を引きつらせた。

一抹の不安がよぎる。

どう見ても今のアルンシアの顔は『やつちまった感』でいっぱいだ。俺は何か、彼女の手違いで酷く面倒なことに巻き込まれたのではないかと思わずに居られない。

「……すまぬが、いくつか質問をするぞ」

「へ？あ、はい。どうぞどうぞ」

アルンシアが重々しく口を開く。質問したいのはこっちなのだが、彼女の雰囲気それが許さなかった。

「おぬしが住んでいたのは何という国じゃ？」

「日本。えーと英語だとジャパン」

「そうか。おぬしは精霊か？」

「精霊って……俺は真正正銘の人間だよ。職業はコンビニの店員」

「クルニア、カーバン、フェアリア。これらに聞き覚えはあるか？」

「全くない」

「……そうか、もうよい」

既に彼女の顔はもうどうしようもないほど強ばっていた。美しさも何処へやらといった風情のシユールな顔ですらある。今の質問で完全に何かに思い至ったらしい。

暗くてよく分からないが、心なし顔色も悪くなっている気がする。その尋常でない様子に、俺は恐る恐る声をかけた。

「あ、あのさ。どうかしたのかな……？」

アルンシアは口を閉ざしたまま微動だにしない。

俺は質問されて終えた途端に黙ってしまったアルンシアの態度に困惑してしまふ。

30秒もそうしていただろうか。

俺も後ろの盗賊風の方々も妙な雰囲気飲まれて動けなかったが、その沈黙をアルンシアが破った。

「……おぬしに良い事を教えてやろうと思うのじゃが」  
目が据わっていた。

「は、ハイ」

そのあまりの迫力に、反射的に返事をしてしまう。殊勝な感じで。

「ここはおぬしが暮らしていた世界ではない。おぬしから見ればいわゆる『異世界』というヤツじゃ」

「……はあ？」

うわーやっぱ電波ちゃんだこの子。

そう思い、呆れが混じった俺を見、アルンシアは重ねるようにして言う。

「信じられんのも無理はないかのう。じゃが真実じゃよ。……まあ、見ておれ」

脇にどいておるのじゃ、とアルンシアは俺を横へと押し、前へ出る。自然、アルンシアと盗賊風の男達が向きあう形になった。

男達が化物を前にしたかのような動揺に包まれる。

それを半ば無視して、アルンシアは先程と同じように小さく聞きなれない言葉を呟いた。

同時、右手を前へ伸ばし、手のひらを男たちへ向けた。



「 サラマンドラ。『集める』」

最後にはつきりと彼女がそう口にしたと。

彼女の伸ばした手に、ギユルギユルと集約されるようにして光の粒が集まり、数秒も経たずにバスケツトボール大の大きさの火の玉が生み出された。

男達が悲鳴を上げ、慌てて逃げ出そうとしている音が聞こえる。

そうしている間にも次々とそれは生み出され、8個ほどの火の玉が俺の視界を埋めた。

その様をポカーンと眺めている俺。なにこのファンタジー。

「な、なんだこれ!?」

「これが精霊術じゃ。世界に存在する四元素を司る精霊達に語りかけ、力を借りる術。

そしてこれは、こうする」

アルンシアが腕を振り上げ、高らかに叫ぶ。

「 『飛ばせ』!」

彼女の声に呼応するように、宙に浮いていた火の玉が男たちへ向かって飛んでいく。

此方に背を向けて走っていた男達を追っていった火の玉は、意志があるかのように自在に軌道を変え、狙いを過たず男達へと着弾した。

「ぐああああああああ!」 「体が、体が燃える!!」 「熱い、熱い!!!」

絶叫が上がる。

それを啞然として見ていた俺に、恐怖の感情はなかった。

単純に、目の前で起こっている出来事に頭が付いて行かなかった。

火の玉が浮いて、それが盗賊っぽい人たちを燃やして、精霊術が、どうこう。

混乱の極地である。

「次に魔術を見せてやるのかの」

アルンシアが虚空に指を滑らせ 指先は赤く輝いている 幾何

学的な文様を描いていく。

先程の宝石と同じように明滅する文様が、如何なる理屈によつてか宙に刻まれる。

それに指を当て、アルンシアは火の玉から逃げ延びていた数人に視線を向けた。

「よく見ておれよ。……『シャイン・アロー光の矢』！」

文様が輝き、その中心から光で編まれた矢が現れ、目にも留まらぬ速度で逃げ続ける男たちへ殺到していく。

革鎧ごと光の矢に貫かれた男達は短く声を上げ、地面へと倒れ伏した。

俺はもう、何も言えずに口を開けたまま、非常識な光景をただ見ているしかなかった。

やがて火が収まり、焦げ臭い匂いが周囲にたちこめてきた頃。

未だに呆けていた俺に向かって、アルンシアはがばつと頭を下げた。何事かと（一瞬、今度は燃やされるかと思った）身構えた俺に、アルンシアは真摯な声でこう言った。

「すまぬ。手違いでおぬしを『召喚』してしもつた。えへっ」

真摯なのは声だけじゃないですかこのアマ……！  
舌をぺろりと出して頭を小突く仕草が、凄く、寒々しかった。

### 3話 エーと英語だとジャパン。(後書き)

読んでいただきありがとうございます。

週に2、3のペースで更新しようかなーと思っています。

どうぞよろしくお願いします。

#### 4話 びしょうじよに あたまを ぶたれた。

俺とアルンシアは暗い夜半の道を歩いていた。

いや表現を間違えました。

アルンシアが「ともあれ此処を離れるぞ。血や肉の臭いに釣られて何が来るか分からんし」とスタスタと歩き出したので、やむを得ず彼女の後ろについて歩いていた。

やむを得ず、というのが重要だと思えます。

訳の分からないモノを見せられた拳句、訳知り顔の彼女とはぐれるのはどう考えても得策ではない。

彼女には先程の「手違いで俺召喚」発言について追求しなければならぬし、こんな見も知らぬところに一人取り残されてはたまったものではない。

アルンシアが盗賊を殺した たぶん。近づいて確認するのも嫌だったので生きていた可能性もあるが、肉の焼ける臭いがしていた以上は確実だろう 事実として目を背けることの出来ない事態を見てはいたが、それとこれとは話が別である。

今の俺にとつて、知らない人の死を間近に見たことよりも、理解出来ない『魔術』やら『精霊術』を目の当たりにしたほうがインパクトが強かった。

魔術に精霊術。

完全にお伽話だ。

お伽話ではあるんだろうが、アルンシアは実際にそれを使っていたリアルにそれを見てしまつては、トリックだなんだと文句をつける気にもなりはしない。

それは実際に、人の命を奪っているのだから。

「ふむ、苦々しい顔をしておるの。さては、あの盗賊どもを殺した

私が怖いのか？」

「……人を殺すつてのは悪いことだよ」

いつの間にかアルンシアが俺を振り返っていた。

「じゃが、あ奴らは我が友からこの『血の石』を盗み出した。それだけでも度し難いが、その際に我が領地への侵入を許してある。血の石、領地への侵入方法。いずれも他国へ漏れれば厄介なことになるのは間違いない。殺すのはやむを得なかったのじゃ」

ま、適度にいたぶってあやつらの雇い主に警告してやろうとも始めは思っておつたのじゃが、とアルンシアは小さく笑った。

手元で首から下げた宝石を弄っている。どうやらアレが彼女の言う血の石らしかった。

「それにほれ、おぬしにとってはこの世界は異世界じゃろう。思いつめる必要があるかのう」

アルンシアが軽い口調で俺に問いかけてくる。

その質問に、俺は思わず食いついた。

「そうそれ！ここが異世界とかどうということなのか教えて教えてもらえな」「ガツ」「ホギヤー！」

ガツは勢いこんで喋ったせいで俺が舌を噛んだ音。

ホギヤーは言うまでもなく悲鳴です。

もらえな”い”のイの発音時に思い切り舌を噛んでしまい、口の中に血の味が広がってゆく。

うわあこれやべえつてすっげー深く噛んだよこれ絶対。

鉄の味がドバドバするもの……！

口を押さえてもがき始めた俺を、アルンシアが呆れた表情で眺めている。

眼差しが哀れな生き物を見るソレだ。

「何やつとるんじゃないやおぬし。ほれ、ちと傷口を見せてみる」

「ンー！ンー！（いま手を離せば痛みがやばいと拒絶する俺）

「さっさとその手をどけぬか。それでは傷が見えんだろうに」

「ンンー！（やめてあげて！俺のライフは大体ゼロよ！）」

アルンシアに手首を捕まれ、無理矢理に手をどかされそうになる。何気にアルンシアの力は強いらしく、懸命に抗わないとあっさりと負けてしまいそうだ。

そういえばこいつドアノブ腕（両手）みたいだし、それを考えれば力があるのは経験済みだが。

そして勝敗に関しても経験済みである。

けれどあの時以上に事態は逼迫ひっぱくしている。

アルンシアが俺の手首を掴んでいる　　凄く彼女が近くに寄ってきている　　なんかいい匂いがする

言動とナイチチに残念感は覚えたとはいえ、アルンシアの容姿が超可愛いのは変わりがない。

俺だって健全な青少年ですよ！ピュアなオトコノコですよ！

こんな可愛い子に密着されて平然としていられる訳がないじゃないですか！

そこに加えて女の子特有の甘い香りだ。

なんですかこのコンボ。

「何故全力で抵抗しとんじゃおぬしは！いいから、手を、どけるのじゃ！治療して、やろうという、のに！」

一言一言を区切っているのは力が入っているからだろう。

女の子にあるまじき力み方でフン！フン！と鼻息荒くアルンシアが力をかけてくる。

意地になっっているらしく、自らの形相に気を払っていないに違いない。ついでに俺との距離感とかにも。

「ンゴー！（ああやめて何か鼻息すら甘い匂いする気が！新しい世界に目覚めちゃいそうだから！）」

ここで負ければ男としての沽券に関わる。

というか新しい世界に目覚めるのも実に勘弁。俺はまだノーマルでありたい！





大半は意味のわからない言語で、僅かに聴き慣れた言語で　言語  
なのだろうか。

言葉というよりはそれ自体が力を持つ文字のようだ、と俺は感じた。  
知識の奔流は止まらない。

俺の脳のシナプス一つ一つを神速で駆け抜け、意味のわからない言  
語もそうでない言語も、脳髄に染み渡っていく。

文字がすべからく俺という個体に溶け合い融合していく。

馴染む、馴染む。馴染む馴染む馴染む。

同時に沸き上がってくる妙な充足感がある。

俺は、この精霊術を、理解した。

「どっじゃ、噛んだ舌も治っておろう？」

「へっ！？あ、ホントだ……」

アルンシアの呼びかけと共に知識の流入が終わる。

どうやら彼女が精霊術の行使を終えたらしい。

俺が流れこんでくる知識の数々に翻弄されている間に、鉄味フィー  
バーしていた舌は完全に傷が塞がっており、ついでに体も心なしか  
軽くなっている。

普通であればこんなに早く傷口が塞がるわけもない。体力が回復す  
るはずもない。

常識外の出来事すぎる。

我が身に起こった現象を鑑みると、もう精霊術とかいう魔法のよう  
なお話を信じざるを得なかった。

心の中でアルンシアに謝る。

電波ちゃんとか言ってますませんでした。

「話を続けるぞ。繰り返すようになるが、ここはおぬしにとって異  
世界というヤツじゃ。おぬしが元々居た世界では精霊術なんぞなか  
ったじゃろっ」

「そりゃそうだ。そんなものが有るのは物語の中だけだよ」

「それがこの世界では存在するのじゃ。精霊術は生まれつきの才能によつて練れるかどうか決まるが……魔術は学びさえすれば誰でも扱えるようになる。当然そこにも才能の差は出てくるのが」

まだ信じられないか？との質問に、俺は首を振った。流石に自分自身の体のケガの回復を体験している以上、否定出来ない。

いやまあ流石に生まれて以来、心魂に染み付いた常識つてやつは未だに認め難いと騒いでいるけど。

「……俺を手違いで召喚したと言つてたのはどういふことでしょうか」

質問を返す。

アルンシアは僅かに言葉に詰まつたが、渋々応えてくれる。

「……おぬしが異世界から来たのはさっきの質問でわかつたのじゃ。おぬしと同じ境遇の者を知っておるからの」

「それって……!？」

「うむ。そやつもチキユウがどうか、ニホンがどうか言つておつたしのう。それでピンと来たわけじゃ。そやつ　カナも出会つた当時は訳の分からん単語をわめいておつたし、中々魔術や精霊術を信じようともせんかつたが」

くるり、とアルンシアが指先を光らせ、宙に魔方陣を描いていく。

「このように実際に魔術などを見せ、体験させることでようやく納得しての。おぬしにも同じことをしたわけじゃよ。とはいえ、カナが異世界から来たと私が信じるまでに要した時間のほうが随分かつたかの」

それは俺以外にもこの世界へ連れてこられた人物がいるということだ。

その情報に俺は希望と怒りを覚えた。

希望とは、俺と同じ境遇の人がいて、その人から色々聞けるかも知れないという期待。

怒りとは、俺だけでなく、俺の世界から強制的に人間がこの世界へ引きずり込まれているという事実に対してだ。

「君らは、君らの勝手に異世界に人を放り込むのか！」  
希望より怒りのほうが得てして強い。

頭に血が昇り、アルンシアに怒鳴りつける。

「だから手違いだったと」

「手違いで済むか！この、この……！」

「そこを説明してやろうとしておるのじゃー！」  
パカン。

俺は熱くなつて詰め寄り　アルンシアに頭をぶたれた。

びしょうじょに　あたまを　ぶたれた。

何か危ない快感が微かに脳裏を過ぎり、慌てて冷静になろうと心がけた。

どうやら俺は相当に参っているらしい。

精神が高揚しており、激昂しやすくなっている。あと同じく変な精神状態に陥りやすくなっているっぽい。

「……大きい声出してごめんなさい」

幼児みたいな謝り方になった。

「人の話は最後まで聞くのじゃ。少なくとも私はカナやおぬしのよ  
うな異世界から来た者を他には知らぬよ。そういう話も聞いたこと  
がなかったしのう」

俺や件のカナさんみたいな例は特異なケースだということだった。  
それに巻き込まれた身としては特異でも一般的でも関係ないんです  
が。

「カナはおぬしのように私に召喚されたわけではなくての。カミカ  
クシというヤツに遭ったらしい。気づいたらこの世界に居たと。詳  
しいことは聞いたが分からなかった。そのあたりはカナ本人に聞く  
と良いじゃろう。この血の石もカナに渡さんといかんしの……気が  
重いが」

「その血の石とかって、カナさんのだったの？」

「そうじゃ。カナはいま『ササキの森』で魔術の研究をしておつての。血の石はカナの作品じゃ。これを家に置いたまま外出していたところを盗賊に奪われてしまったのじゃ」  
俺と同じ世界から来た人が魔術の研究をしている。  
それにはかなり意表をつかれた。  
だってそうだろう。

魔術なんか信じるのもどうかという世界から来た人間が、魔術の研究をしているというのだ。

これに驚かずにいられようか。

あとカナさんのフルネームが恐らく分かった。

ササキ カナと言っただろう。住んでいる森とやらの名前に。やたら脱力するが。

「で、ここからが本題なのじゃが」

「うん」

「私は別に、おぬしをこの世界へ召喚するつもりはなかったのじゃ。盗賊達から血の石を取り戻して首から掛けたとき今まで出会ってきたどの精霊とも違う濃厚な気配を感じて稀少種の精霊かと思ってクハハこれは嬉しい拾い物をしたものじゃと試しに喚んでみたらおぬしが現れた、と」

「……………オイコラ、早口で言っただけじゃねえよ！ちゃんと聞き取れたからね！」  
「パカーン。」

「痛い!？」

今度は俺がアルンシアを軽く殴った。  
ツッコミというやつだ。

かなり手加減して殴った（むしろ触るのが恥ずかしかった俺、ピュアボーイ）のだが、アルンシアは若干涙目になっていた。  
何この涙目上目遣いチヨウ可愛いんですけど。

うっかりゴメンと謝りたくなるが、ぐっと堪えてアルンシアに続きを促す。

ここはしっかり問い詰めておかないとコイツ二度と言わなさそうだし。

精霊術は本来、世界に漂う精霊たちに呼びかけ、その力を貸してもらう術だということ。

(精霊は霊体的なもので、生まれつき精霊達の声を聞ける人物でなければ呼びかけることが出来ない。)

一度力を貸してもらうこと 使役することが出来た精霊は、以後も継続的に精霊術の繰り手が使役出来る。

精霊は大きく分けて四属性。それぞれが火、水、風、土を司り、各々の司っている属性に準じた能力を行使出来る。

ただ、それにも例外があり、稀に四属性に分類出来ない精霊がいて稀少種と呼ばれる。

滅多に出会えない稀少種を使役出来れば、繰り手として泊が付くだけでなく、稀少種の持つ特殊な能力によって様々な恩恵を与えられる。

戦闘に役立つものであったり、中には限定的だが奇跡のような能力を持った稀少種が存在すること。

そんな稀少種っぽい雰囲気ワクワクして精霊を使役しようとしたところ、その稀少種っぽい精霊が全力で抵抗してきたらしい。

思わず意識の中でガツシと掴んで手繰り寄せ、自らの魔力で以て使役を無理矢理に行おうとし、それに屈した精霊がアルンシアの呼び声に応えた。

そして俺が現れ、今に至る。

つまりは稀少種っぽい雰囲気というのが俺の雰囲気、どうやら俺の気配を感じるきっかけになったのが血の石、らしい。

ここだけが推定なのは、アルンシア自身がいまいちこの宝石の効果を知らないためだった。

「カナはこれを『思い出貯蔵器』とか言っておったが……勝手にこれを媒体におぬしを喚んだと知ったら怒るじゃろつか……」

「それは知らんけども」

それよりも、俺には知りたいことがあった。

この手の状況にはお決まりの質問で、何よりも切実な問いかけだ。

「で、俺は元の世界に帰れるんですか？」

4話 びしょっじょに あたまを ぶたれた。(後書き)

ようやく主人公の能力が出てきました。  
チラッと。

この小説は軽いノリで書かれています。  
シリアスになりにくくなっております。

## 5話 株の行方はどちらですか。

「で、俺は元の世界に帰れるんですか？」

これを訊かずして何を訊くのかという、異世界モノの代名詞たる問  
いかけをアルンシアへ投げかける。

合わせて返答も半ばテンプレート化されているセリフでもあると思  
う。

質問をしつつ、俺は心の中でどこか諦めていた。

こういった状況、異世界に召喚されて云々というのは得てして召喚  
された人間にとって望まぬ展開が待ち受けているのが常だ。

簡単に言うくと、元の世界に戻れないというのがむしる普通だ。異世  
界召喚が普通かと言われると首をひねりはするが。

それはそうなのだ。

異世界から呼び出すほど必要としている存在を、その利用目的を達  
成しないまま帰らせてしまっただろうか。

答えは否だ。

俺の場合はなんか手違いで連れてこられたというふざけんなバツキ  
ヤローな理由ではあったが。

それに、アルンシアの言い分だと俺と同じ世界、それも同郷、日本  
からこちらの世界に来ている（と、思われる）カナさんも未だにこ  
の世界に居るらしいし。

事前に与えられた情報から推測するに、俺の行く末は真っ暗である。  
それでも訊かずにはいられなかったのは、淡い希望を捨てきれない  
からであった。

「ん？恐らく帰れるぞ」

「帰れんのかよ！！」



こちらの思惑とは正反対の答えで、軽く返答された。  
あまりの拍子抜け具合に、むしろ困惑の具合が高くなる。

「カナも週に5日くらいは帰っておるしろう。留守にしていたところを盗賊に押し入れられ、血の石を奪われたのじゃ」

「何ですかそれ！それでいいの？異世界！しかもカナさん通いで異世界に来てんのかよ！こういう異世界モノでは元の世界に帰れない主人公が葛藤しながらも成長していくのがセオリーじゃなかったんですか！」

コンビニのシフトだってもうちょっと入ってたよ！

週に5日帰ってるって、絶対土日しか来てないだろう。

名前しか知らないカナ氏に思わずツツコミを入れてしまった。

「帰れると言われて何故逆上するのじゃおぬし」

「そりゃそうだけど！でも何だろう、このモヤモヤ感……！」

いわば期待を裏切られた感だ。

それも楽しみにしていた映画がB級もいいとこだったような類のものではなく、不完全燃焼に限りなく近い何かだ。

言いようのないなもどかしさが胸に立ち込める。

まあ、とアルンシアは一呼吸置いて話を続けた。

「私ではおぬしを元の世界に戻すことが出来ないのは確かじゃがの。世界を渡る術はカナの専門じゃ。本当におぬしを送り返せるかどうかはカナに尋ねてみると分かん」

じゃから『恐らく』なのじゃ、とアルンシアは難しい顔をした。

「そうそう！そういうもしかすると帰れるかもしれないって展開が普通なんだよ！安心した！」

異世界はこうでなくっちゃ！

帰れるかどうか分からないと聞かされて、パツと表情を輝かせた俺をアルンシアが訝しげに見ている。

いやいや俺だつて帰りたくないわけじゃないですよ？

当然のごとく帰りたいですよ？

「おぬし、帰りたくなかったのか……？」

「いえ、帰りたいです」  
キツパリと言い、わだかまっていた不完全燃焼感を取り払って答えた。  
アルンシアが微妙にこちらに不信感を持ち始めていたのがありありと見て取れたし。

その後、小一時間ほど歩いただろうか。  
俺達はさほど大きくもない町に到着していた。  
夜ということもあり全体を把握できなかったが、どの建物もレンガや土壁と木材の組み合わせで出来ており、日本のように木材オンリーの建築物は見当たらなかった。  
街全体が中世ヨーロッパ風であるといえば分かりやすいだろうか。  
どうやらこの世界は建築技術や科学があまり発達していないらしい。  
これぞ異世界！と、町についての途端にテンションが上がったのは秘密です。

この町にアルンシアの宿があるということで、今夜はここで休み、明日から俺が元の世界に帰る方法を訊くべくカナさんの元へ向かうこととなった。  
こんな夜中に歩いている俺たちの他には人影はまばらで、居たとしても大抵がボロ布を申し訳程度に羽織った浮浪者だった。  
老人もいれば子供の姿もある。

聞けば、こうした浮浪者はこの世界では珍しくもないという。  
「カナも驚いておったが、浮浪者というものはありふれたものじゃよ。大半は食うにも困るような生活を送っておった農民たちが大半じゃが。中には戦争によって寄る辺をなくした者たちも少なくない」  
「戦争か……。俺の世界ではあまり身近じゃなかったしな」

「らしいのう。聞いておるよ。私としては戦争も無しに暮らしている世界というものが今ひとつピンとこないのじゃが」

「俺らの世界だと、大きい国同士が戦争しちゃうと、国単位でなくそれこそ世界の滅亡に繋がりがかねないからね。国が武力を持って相手を威嚇するのは、どちらかと言えば相手を交渉のテーブルに座らせるための一手段だよ」

「そこは同じかのう。どうあっても自国より強大な国には従うしかないのが小国の悲しいところよ。決定的に違うのは魔術の存在と力ナは言っておったの。魔術は学ぶための金さえあれば誰でも覚えることが出来るしのう」

「なるほどなあ……」

魔術とは簡単に人を殺す手段足り得る。

盗賊たちに向かってアルンシアが放った魔術　光の矢はいとも簡単に人の命を奪っていた。

アルンシアの言が正しければ、魔術は適正さえあれど誰でも使えるようになる技術だ。

そんなモノが存在していれば、誰だって人を殺してしまえる。

拳銃だって同じだが、あちらの世界でそれを手に入れるには、そういう国に行くか、それこそ戦場に出向くしかない。

それに比べ魔術は敷居が低い。

金がかかるという点はともかく、一般的に広がっているものであるという部分で大きな差がある。

「それでもドミトリスは浮浪者は少ないのじゃ。国によっては奴隷を認めておるから、浮浪者なんぞ奴隷商の格好の餌食になるしのへえ、と素直に感心した。

こうした中世じみたファンタジー世界では奴隷がいて、手酷い扱いを受けているのが異世界モノに描かれる一般的な光景だっただけに意外だった。

そんな俺の心境を読み取ったのだらう、アルンシアは小さく笑った。「ドミトリスは元々、人間から化物と呼ばれ疎まれた者たちが集ま

って出来た国じゃからの。自分以外の誰かを奴隷の身分に貶めるような気風はないのじゃよ」

「そういえば魔族の姫とかどうとか言ってたね」

「そうじゃ！我こそは魔族を統べる王の娘にして」

「いや名乗りは上げんでいいから。その魔族つてのは何なの？」

意気揚々と名乗りを上げようとして中断されたことに不満をあらわにしたアルンシアだったが、質問にはきちんと反応してくれた。

「魔族とは人間ではないモノの血をその身に持ち、人間よりも遙かに強大な力を持つ種族の総称じゃよ。例外もあるが、大抵は人間に近い姿をしておる」

「人間ではない……？」

告げられた事実にも、流石異世界だなーとのんきな感想を抱く。

「様々な種族がおるがな。魔族の中で最も数が多いのは獣人かの。

獣人はその多くが人間と姿形はあまり変わらないが、鋭い爪や牙を持っておる。圧巻なのはその脅力の凄まじさじゃ。彼らは外的魔法がいてき

敵に向けて放つ光の矢シャイン・アローなどの魔術は得意とせんが、逆に自らの体を強化する内的魔法ないてきには総じて高い適正を有しておる。人間程度ならば片手でグシャリじゃ」

「ほ、ほーう？」

自らが呆気無くひねり潰されるところを想像して身震いする。

もし獣人さんに会っても粗相はしないようにしないといけない。

怒らせたならミンチへと強制ジョブチェンジさせられてしまつかもしれない。

「次に多いのはエルフなんじゃろうが……実際のところは良く解らん。エルフの多くはクルニア大陸の北にあるエルフの領地からあまり外に出てこぬからの。種族主義を重視する傾向が強く、排他的な面がある。ドミトリスに暮らすエルフも居るには居るが、数は少ない。エルフはその容姿の美しさから人間共からいかがわしい目で見られることが多いからの。領地から出てくるのを渋るのも分らない話ではない。エルフの奴隷なぞはかなりの高値で取引されている

らしいしの」

「美しいのか……帰る前にいつペン見てみたいな」

「……おぬしみたいな奴がいる間はエルフも表に出てこんと思うがの」

すっげえ冷たい見る目で見られてるんですが。

口が滑ったと思ったが、もう遅い。

これは話題のベクトルを変えないと俺の評価がマツハで急降下だ！

「じゃ、じゃあアルンシアもエルフなの？俺、アルンシアみたいな美少女に会ったことってなかったし！」

「話を逸らそうとしておらんか」

はい撃墜されました！。

おためごかしはアルンシアには通用しないと記憶の隅にメモしておく。何が起るかわからないので今後のために。

いやアルンシアを美少女だっと思うのは本音なんですけどね。

電波発言だと思っていたものが電波じゃなかった時点でアルンシア株は上昇してるし。

手違いで俺を異世界拉致してきたという点で下落も甚だしいので結果的にイーブン、ナイチチで僅かにマイナス。

けれど俺の質問には真面目に答えてくれるので緩やかに上昇傾向。

俺内アルンシア株の今後の成長に期待である。

「まあよい。私はエルフではない。私を始め、ドミトリスの王族はみな魔族じゃよ」

「魔族？」

「魔族は数ある魔族の中でも、外的魔術に対してのずば抜けた適正を持っておるのじゃ。人間の一流の魔術師が扱う魔術を何の気なしに発動することすら可能じゃ。人間と容姿に然程違いはないが、魔族は小さいツノを持っておる」

これじゃ、とアルンシアが髪を掻き上げる。

暗くてよく見えないが、確かに額と前髪の付け根の中間……おでこのあたりに白い突起が生えていた。

触つてみたい欲求に駆られ、手を伸ばし「何をするか馬鹿者！」鬼の形相になったアルンシアに腹を殴られた。

握りこんだ拳をレバーに叩き込まれ、内蔵が鈍痛を訴える。メチャクチャ早かったよ今の。

それに拳に体重かかってたもん絶対。

「い、痛い……！」

「フン、人のツノを触ろうとするからじゃ」

どうやら魔族の方々にとってツノはあまり他人に触らせるものではないらしい。

無防備に見せてきたのそつぢじゃないかと反論しようかと思つたが、断らずに女性の体に触れるのはそもそも元の世界でもタブーでしたねそうでしたね。

合意の元、という単語への道程は割と遠い。

「いてて……しかし俺にツノ見せてくれるとか、良かったの？」

「ん？別に見せるくらい構わんが」

いやそうじゃなくて、と俺。

「話を聞く限り、魔族って人間から嫌な目に遭わせられてるんですよ？ここまで説明されといて何だけど、人間の俺に良い感情とか持てないんじゃないのかなって思いました」

「なんじゃ、そんなことが」

ふうとため息をついて、アルンシアがまっすぐに俺と視線を合わせた。

真正面から美少女に見つめられて、気後れしたが、

(ナイチチナイチチナイチチナイチチ)

脳内で唱えて心拍数の上昇に鎮静剤をぶち込んだ。

「魔族にも人間にも良い者と悪い者がある。そんなのは当たり前じゃ。種族の違いだけで争いを起こすのは愚か者のすることじゃ」

「  
」

何も言い返せなかった。

だって、そう言ったアルンシアは今までで一番、美しく見えたから。  
魔族の姫　それも信じられる。俺はそう思った。

ナイチチナイチチナイチチナイチチ。脳内が五月蠅かった。

5話 株の行方はどちらですか。(後書き)

読んでいただきありがとうございます。

PVの伸びに若干ビビっております。

これを励みに頑張らせていただきたいと思います。

6/26 表現を修正しました。



## 6話 そういつフリかと思って。

会話を続けているうちに、宿らしきところに辿り着いた。

外壁に蔦がつつたつた石造りの建物だ。高級宿という表現がしっくりとくる造りをしている。

洒落た彫刻が外壁の随所に施されており、周りの家屋と比べて結構大きく小綺麗こきれいに見える。

入り口にはランタンが宿の看板と思われるプレートの下にぶら下がっていた。

ランタンの中には炎でなく白い球体がぶかぶかと浮遊しており、それが宿の入口付近を照らしている。

ランタンを指差し、尋ねる。

「この白いのも魔術なの？」

「うむ。それは『輝き』シャインじゃの。基礎中の基礎の魔術じゃが、その分魔力の消費は有って無い様なものじゃよ。こうして灯りに使う分には便利な魔術じゃ」

「攻撃する手段に使うばかりが魔術じゃないってことか」

「魔術は精霊術より一般的な分、様々な使い方がなされておる。魔術なくして生活は成り立たぬよ」

とりあえず宿に入るぞ、とアルンシアは木製のドアを押し開き、建物の中に入った。

そついやアルンシアはともかく俺は部屋どうするんだらう。

部屋を取るにしてもこの世界の通貨なんて持ってないしなあ。

当然そのへんは分かっているだろうし、アルンシアが宿代出してくれるんだらうか。

ていうか出してくれなきゃ困る。超困る。

などと考えつつ俺も彼女の後に続き宿に入る。

広めのロビーの奥にあるカウンターの奥に従業員らしき初老の男性

が居り、俺達が入ってきたのを確認してキビキビとした動作で頭を下げた。

「いらつしゃいませ。ご宿泊でしょうか？」

如何にも仕事の出来る素敵なシルバー世代といった風情の男性は、控えめながらも営業スマイルまで完備している。

それに軽く頷き、アルンシアが応える。

「日中に予約を取っておいたアーシアじゃ。部屋の鍵を貰いたい」

（アーシア？君、アルンシアって名前じゃなかったっけ）

小声で疑問に思ったことを尋ねる。

（偽名じゃよ。ドミトリスの姫アルンシアと知られても面倒事が起きるだけじゃしの）

（あー、そうか）

やはり此方の世界でも王族というやつは特別な存在らしい。

なまじ最初に電波ちゃんだと思っってしまったために、俺がアルンシアに今更畏れを抱くことはないが、此方の世界の住民がたにとってはそのうではないのだろう。

余計な混乱を避けるために偽名を使う姫……。

聡明な気もするのだが、そもそも姫自身が盗賊の討伐に出張って来ているあたりどうなのだろうか。

「少々お待ち下さい。……はい、確認しました」

カウンターの下から出した台帳をぱらぱらと捲っていた男性が、にこやかに話しかけてくる。

「ご予約を見るに」

そこで一旦、素敵シルバー（素敵な老人の意。俺命名）は言葉を切り、俺たちを交互に見た。

「お一人様でのご予約を頂いておりますが、お二人様でのご利用ですか？今でしたらお連れ様のお部屋もご用意出来ませんが」

「いや、一緒の部屋で構わんよ」

「承知致しました。では、これを。お部屋は2階の南側の一番奥になります」

「うむ。ありがとう。ほれ、行くぞ」

最低限の会話だけをし、鍵を受け取り、アルンシアがさっさと歩き出す。

礼をしながら微笑ましげに俺たちを見送る素敵シルバーは絶対に勘違いしている。

え？ちょっと待ってください何かおかしくないですか。

俺は慌てて付いて行きながらも、状況を整理する。

アルンシアと俺、2人連れ。

アルンシア超可愛い。

美少女と俺、同じ部屋。

美少女と俺、同じ部屋。

大事なことなので2回言いました！

「え？アルンシア、俺と君が同じ部屋でいいの？年頃の若い男女が同じ部屋ってどうなの？」

「なんじゃおぬし、私を襲うつもりなのか？」

俺の言葉に、アルンシアはクククと低く笑う。

「おぬしが私を襲う仕草を欠片でも見せたら精霊術でもって焼き殺せばいいだけよ」

「……あ、ハイ。勿論襲いません」

そうでした。このひと、単に美少女なだけじゃありませんでした。

召喚されたとき、このナイチチは俺を燃やそうとかしてました。

それを失念してエロスの進り 否、若さ故の過ちを犯そうとすれば、途端に俺の丸焼きが完成するのは想像に難くない。

あ、でも寝顔見るくらいなら別にいいよね大丈夫ですよね。

不可抗力だもん同じ部屋だもん。

経緯はどうあれ美少女の寝姿を見れる機会を逃してたまるか！

アルンシアはナイチチに目を瞑ればその他は完璧な外見をしている。ついでに俺をこっちの世界に拉致してくれやがりました事故にも目を瞑れば完璧だ。

そうさ、こっぴつ役得も無しに異世界拉致なんてやってられるか！

「ちなみに私が眠っていても、おぬしから不埒な視線を感じれば精霊が自動で攻撃するからの」

「……ハイ、ワカリマシタ」

しつかり釘を刺されたのであった。俺の声が無駄に片言になっていたのを報告しておく。

部屋はしつかりとした内装で、大きなベッドが一つ、部屋居座っていた。

キングサイズのベッドである。

立派でも中世ヨーロッパな世界だしなーと侮っていた。

間違いなくこれはこの宿で最上級の部屋だ。元の世界でも洋風宿として十二分に通用する。

なんかやたら豪華なバスルームすら付いている。

上下水道もいまいち発展していなさそうな世界では水は貴重だろうに、浴室付きとはこれ如何に。

こういうところに金を惜しみなく使える辺りが王族なんだろうなーと思う。

偽名使っておいてこれか、なんて気もするが、まあ本名バレして大騒ぎになるよりはいいんだらうと思う。

むしろ豪華な部屋でよかった。

十分に広いのでアルンシアを視界に収めずに俺も寝れそうだし。

当然、アルンシアの寝姿が見たくないわけではなく、突発的衝動によって考えるよりも先に体が動いた結果、精霊様によるフルオート視線ガードに迎撃される可能性を少しでも無くしたいがためである。青少年のリビドーとはいえ命有つての物種ですよな。

「ちと話そうか」

部屋の中央に置かれた木目の美しいテーブルに歩み寄り、アルンシアが声を駆けてくる。

アルンシアがこれもまた高そうな椅子を引き、腰掛ける。

俺もそれに倣い、彼女の対面に座った。

こほん、と軽く咳払いをしてアルンシアが切り出した。

「さて、ではひと心地ついたところで改めて自己紹介といこうかう。これから少なくともカナに会うまでは一緒に旅するのじゃからおぬしの名前も知っておかねば不便じゃしの」

「あ、そういえば俺、まだ名乗りもしてなかったな。俺は天原冬弥<sup>あまはら としむせ</sup>。18歳。職業はコンビニのアルバイト……つっても分からないか。商店の店番をやってるよ」

「なんじゃ、同い年じゃったか。見た目からしてもっと若いのかと思っただが」

意外そうな顔でアルンシアが驚いている。

外人から見ると日本人を始めとするアジア系の人種が若く見える法則は異世界でも適用されていたみたいだ。

俺からすればこのちまっこいアルンシアが同じ年だということが意外なんです。

だってこの人、頭二つ分くらい俺より小さいもの。

なまじ容姿が整っているせいでお人形さんみたいな印象になるのが歳若く見える秘密なんでしょうか。

「アマハラトウヤ、アマハラトウヤ。よし、覚えたのじゃ」

微妙に怪しい発音でアルンシアが俺の名前を繰り返す。

なにこれ萌える。

「あー、天原は苗字で冬弥が名前な。俺を呼ぶときは冬弥でいいよ。美少女に名前を呼んでもらえるチャンスを見逃す俺ではない。折角だから苗字でなく名前でもらいたい男心である。

ここでアマハラを押ししては損した気分になるだろう。インプリンティングは重要である。

「トウヤ、トウヤ。こうかう」

発音を確かめるようにアルンシアが言う。

「もうちよっつと舌足らずな感じで呼んでみてくれるかな！」

「ぬっ……？……と、とうや……？」

ぐああなんですかコレ悶え死ねるレベルですよ！  
ちよつと難しそうに、けれども懸命に俺の要望に応えてくれるアル  
ンシア。

この子が性格悪そうとか言ってたのは何処の俺ですか！ちよつと出  
てこい俺、その勘違いを拳で是正してやる。

だがこの程度で満足してはいられない。もうちよつと俺テイストに  
染め上げる努力をしてこそ遥かな高みに登れるというものだ！

「とーやって伸ばすのが俺好みかな！」

「とーや。……これでいいんじゃないろうか」

「はい満足です。本当にありがとうございました」

勝因：アルンシアさんがあんまりにも素直でした。

とりあえずとーやと呼ぶようにと頼んでおいた。

普段からとーやとか囁かれたら俺の理性がクライマックスシーズン  
に突入してしまうだろうし。

何のシーズンなのかは自分でもよく分かりません。

「では私の番だの。私は魔族を統べ」

「いやうん分かったからもういいよ」

「なぜとーやは毎度、私の名乗りを邪魔するのじゃ！」

「そういうフリかと思って……」

「おぬし、さては私を馬鹿にしておるじゃろ！？」

魔族を統べ以下略のアルンシア姫は大層憤慨した様子でご立腹であ  
らせられる。

とはいえ俺としてはアルンシアのことは既に色々聞いたわけだし、  
これこそ本当に今更の自己紹介なのだ。

「君はアルンシア・ドミトリス・メイロウ。魔族を統べる王の娘に  
して精霊術の繰り手。魔族でドミトリスの姫。これで会ってるよ  
ね？」

確認の意味でアルンシアの名乗りを述べてやる。あまりにもスラス  
ラと口にしたせいか、アルンシアは興奮を鎮めた。

「ぬ……そ、そうじゃ。よく覚えておったの」

「そりゃあ多少ムネは残念とはいえ美少女の発言だったし」

「やっぱり馬鹿にしておるよな!？」

訂正します。興奮未だ冷めやらずでした。なお、この用法は間違っています。

「ごめん、間違えた。残念な美少女の発言だったし」

「酷くなっておるじゃろうが!」

「残念女の」

「 サラマンドラ。『集めろ』」

アルンシアの声に呼応し、ぎゅいんぎゅいんと光の粒が彼女の周りに

見間違えるはずもない、盗賊さん達を香ばしい焼肉にした精霊術だが、あの時よりも光の粒の収束速度が速い!速いですよこれ!

「ギャース!すんません調子に乗りましたごめんなさいごめんなさい!」

椅子から飛び退き、地面に額を擦り付ける勢いで謝り倒す。

これぞ日本文化の誇る最強の技、THE・土下座。

相手が許してくれるまでは決してその場を動かぬという意味表明。

ていつかマジ勘弁して下さいという意味表示です。

その後、アルンシアが怒りを収めるのには数分を要したことを、追加の報告としておく。

「アルンシアと呼ぶのでは長かるう。シアでよい」と彼女が言ってくれたときには、許されたという思いと、命が助かったという事実  
に心底安堵したのだった。

6話 そういつフリかと思って。(後書き)

読んでいただきありがとうございます。

前回ちよろつとシリアス入った分を取り戻すべく会話パートです。  
ようやく主人公が名乗りました。遠かったです。

いつのまにやら日間ランキングにランクインしておりました。  
皆様に心よりの感謝を。

作者のテンションがクライマックスです。



## 7話 見つめ合う一人と一匹。

さて、時間は更に進みまして。

シアは風呂から上がると、でかいベッドに潜り込み、すぐにスヤスヤと寝息を立て始めた。

彼女は寝る前に、「サラマンドラ。『姿を顕せ』。『守護を』」とか唱えて小さなトカゲみたいな生物を召喚し、枕元に這わせている。

よく見ると赤い陽炎みたいなオーラを身に帯びている赤いトカゲが、彼女の使役するサラマンドラ氏らしかった。

こうして実際に受肉させ、身边警護に利用出来るとか精霊様なんでもありですね。

『こいつが私の精霊、サラマンドラじゃ。いいか、私の寝込みを襲おうとすると、こいつがおぬしを火だるまにするからの』

『シャー』

『いやー、シアさんに手を出すわけないじゃないですかハハハ。恐れ多いですよハハハ』

『先にも言ったがいやらしい視線にも反応するからの』

『シャー』

『俺の目を見てくれ！こんなに透き通った目をしている俺が、そんな視線を君に送るとでも！？』

『気持ち悪いくらい真っ直ぐに私を見ておるの。心なしか血走っておるし』

『湯上りで上気した頬とか、湿った髪とかに興奮してます』

『シャーアアア！』

『さては話に通じておらんか……？』

『ごめんなさい命は惜しいから大人しくしてます』

『シャー』

以上が彼女が寝る前に交わした会話である。

ちなみにシャーシャー言ってるのがサラマンドラ氏。

言葉も理解しているようで、俺の本音には激しく反応していた。

どうでもいいけどシャーって蛇じゃないんですかね。

サラマンドラ氏はまるっきりトカゲなんです。

いま、俺はシアに背を向けるように壁際に毛布にくるまって横になり寝たフリをしているが、アルンシアの方を見るまでもなくサラマンドラ氏からの熱い視線を感じる。

熱い視線とはいえ恋焦がれるなんとやらではない。

サラマンドラ氏の俺を監視する視線をピンピン感じているのだ。

試しに寝返りを装って身を振り、シアの方へ向き直ろうとする。

「シャーアア！」

シュボツとライターに点火したような音が聞こえ、灯りの落とされた部屋が僅かに明るくなった。

ゆらり、ゆらりと部屋の家具が作り出す影が揺れる。

俺は身動きを中止し、薄目を開けてそちらを伺う。

「シャー！」

スイカ大の火の玉が4つほど宙に浮いていた。

うわー命令に忠実だよサラマンドラ氏……。

そのまま俺は狸寝入りを続行。

俺が動かないことに警戒を解き、サラマンドラ氏が火の玉を消し去った。

部屋が再び暗闇に包まれる。

これ、今でこそ寝たフリだからいいけど、普通に眠って寝返りうったら火の玉飛んで来るんじゃないでしょうか。

すげー理不尽なんです。

いやまあうつかり漏らした本音でサラマンドラ氏の心象悪くしたせいでもあるんだろうけども。

同じ部屋で寝ることを許してくれた辺りシアには感謝しているが、このデスゲームっぽい空間は果たして良かったと言えるのだろうか。これならまだしも宿の廊下とかの方が環境としては恵まれている気がする。

とはいえ今更部屋をあてがってくれとはとてもじゃないが言えないし、そもそも寝ている彼女に近づけばサラマンドラ氏から熱い歓迎を受ける。

手厚いではなくて熱いなのがポイントです。

さて、前置きはこのくらいにして。

現状、俺には3つの選択肢がある。

1つ目はこのまま大人しく眠ることだ。

これはサラマンドラ氏が威嚇のみで、悪意ゼロの俺に対しては攻撃してこないという理想的な予想に基づく行動となる。

サラマンドラ氏の良心頼りな方法ではあるが、流石にシア自身も朝起きたら部屋に焼死体が転がっていました的な展開は望んではないだろうし、サラマンドラ氏も召喚主の意向には極力沿うものだと思う。思いたい。

2つ目は朝まで寝ずに起きているという選択肢。

この場合のメリットは少なくとも燃やされる心配がないということ。眠りさえしなければ命の保証はされる。

デメリットとしては明日からのカナさんのところへ向かう旅路に、初っ端から疲労マックスで臨むこととなるということだ。

シアが言うにはササキの森まではこの町から少なくとも2日はかかり、その間は野宿ということだったし、正直なところ今日は眠っておきたい。

こちらの世界に来てからの出来事でいっぱいだったせいで、体は疲れを訴えている。

そして最も選びたいランキングナンバー1の選択肢が3つ目だ。

サラマンドラ氏をどうにか無力化して、シアの寝顔を拝む。

こんな状況で何をとか言われるかもしれない。自分でもやめておいたほうがいいと分かっている。

だけど、だけれども。

美少女と同じ部屋で寝ているというシチュエーションで動かなくて何が男か……！

これは浪漫だ。浪漫を追い求めずにして過ごすような平々凡々な生活より、些かスリリングな人生を送りたいのが男ってもんだらう。異世界拉致はちょっと想定外だったか。

ポジティブに行こう。サラマンドラ氏は確かに脅威だが、乗り越える壁は大きいほうが達成感はある。

……壁の乗り越えに失敗したときにはお陀仏なのが致命的ですが。読んで字の如くの致命的です。火の玉に耐え切る自信はありません。

俺はこの中からどの選択肢を選ぶべきか。それが目下の問題だ。結論が出ないまま、時間だけが過ぎてゆく。

「んう……」

シアが寝返りをうったようで、シーツの擦れる音と寝言が聞こえた。静まり帰った部屋では小さな音でもよく聞こえる。

ぐおおお！「んう……」とかあどけなさ過ぎるでしょう！何、誘ってんの！？誘ってんですか！

リスキーなのは承知の上だが、ここはやはり3つ目の選択肢を選ぶべきか……。

勿論、3つ目の選択肢を選んだとしても、別に彼女に襲いかかるつもりはない。

あくまでも寝顔を見るだけだ。だってほら俺って紳士ですし。

と、そんなことを考えていると、俺の鼻先にヒタヒタと何かが触れ

る感触がする。  
凄く温かく、所々が妙にザラザラとした感触。  
なんだ？と目を開く。

俺の鼻に触れているサラマンドラ氏と目があった。

「……………」

「シャー」

思わぬ急接近に言葉すら出ない。

見つめ合う一人と一匹の図がここに完成した。

緊張して動けない俺を他所に、そのままサラマンドラ氏は俺の顔を伝い頭の上へと移動してゆく。

サラマンドラ氏が肌を横切る得も言われぬ感覚が俺を襲う。

なんですかコレ、俺が妙な選択肢選ぶとしたのを見破って直接こちらに来たんですかサラマンドラ氏。

この状況で3つ目の選択肢選ぶものなら即座に火だるまじゃないですか……………！

「シャー」

俺の頭の上でボウ、とサラマンドラ氏が発光し始めた。

光の粒がチラチラと視界をよぎる。

「ギヤアアア！まだなにもしてません！まだ！考えてただけでし……………」

《うるせエ、黙れ。お嬢が起きちまうだろうが》

頭の中に聞いたことのない声が響いた。

「！？」

慌てて上半身を起こし、部屋を見回す。

しかしこの部屋には相変わらず、俺と眠っているシア、それと器用にも俺の頭にしがみついているサラマンドラ氏以外に人影（と、ト

カゲ影)はない。

《こつちだ。お前の頭の上に居る俺だよ》  
再び声がする。

ひよい、とサラマンドラ氏が身を起こした俺の膝下に飛び降り、俺を見上げてきた。

同時に、頭の中へ怒涛の勢いで何かが刻み込まれていく。

>>精霊交信

精霊と会話することが可能

交信のための構成式

S 9 ; A 、 ^ N / (

& a m p ; ? , i ……

知識が俺の血となり肉となる。

刷り込まれていく知り得なかった知識を、俺の脳ではなく、もっと深くにある魂で認識し理解する。

二度目のこの感覚に、翻弄されつつも流されてゆく。

一度目に蓄えていた知識『精霊術』とそれは強く結びつき、関連した情報同士が相互のリンクを始める。

混ざり合う融合する溶け合う。

俺は、この精霊術を、もう一段階理解した。  
ファンタジー

《お前、さつきから寝たフリしてんのバレバレだぜエ?》

頭の中に直接届けられた声に我を取り戻す。

膝の上ではサラマンドラ氏が無表情なトカゲ顔で俺を見ていた。  
まあトカゲに無表情も何も有ったもんじゃないでしょうが。

《……この声は、君なのかな?サラマンドラ氏》

無意識に、サラマンドラ氏と同じように精霊交信を返す。

何故か同じことが出来るように思ったからだ。

やり方としては心の中で描いた単語を相手に向かって放り投げるような感覚。

すると、サラマンドラ氏が驚きに目を見張った、ように感じた。

だってこのトカゲ表情作る顔面筋肉皆無っぱいので雰囲気だけなんです。

《こりゃあビックリだぜエ。お前、精霊交信出来るのかよ》

《あ？いやいやいや、何となくやってみたら出来ただけですよハハハ》

スゲー俺いまトカゲと会話してる！サラマンドラ氏はトカゲ精霊だけど！

《何となくで出来やしねエよ。俺ら精霊と精霊交信で会話出来るってのはお嬢みてえな精霊術師だけだぜ。普通は俺らから一方的に話すだけだ。それも精霊側から話しかけたときだけな。お前、精霊術師だったのか》

《それこそ在り得ないよ。俺って今日こっちの世界に来たばかりの異世界人デスヨ？》

《まあ、精霊交信に必要なのは才能だからなア。お前にも才能があったんだろつよ。……それはそれとしてだ。お前、お嬢に手エ出したら容赦しねエからな。大人しく寝とけや》

《最初から手を出すつもりはないよ。シアは超可愛いけど、流石に寝てるよと襲うような真似はしないって》

《はアン？あんだだけ機会伺っというて信じらんねエな》  
うわあ物凄く疑われてる。

このトカゲちゃんと俺のこと観察していやがった。

恐らく俺が動き出すのも時間の問題と見て警告に来たんだなこのトカゲ。

《俺がシアの機嫌損ねても何の得もないしね。俺は元の世界に帰りたいんだ。その方法を失いかねないことしたってしょうがないだろ

う》

《……そりゃあ、そうか。分かった。だが忘れんなよ、お嬢は疲れてんだ。起こしたら焼き殺してやる。血の石取り返すのどこ何日かずつと動き回ってたんだからよ》

どうにか納得してくれたらしく、サラマンドラ氏が追求をやめてくれた。

しかしこのサラマンドラ氏、シアのことを随分気遣っているようだ。口調はヤンキーっぽいが、身根は真っ直ぐらしい。少なくともシアへの忠義心はある。

《分かっているよ。俺はシアくらい（ムネ以外の容姿が）可愛い女の子を見たことないし。美少女は大切にするものだよね！》

《……ははッ！お前、面白れエ奴だな。気に入ったぜ。明日からお嬢と一緒にササキの森まで行くんだろ？ お嬢を守りてエときは俺を呼びな。助けてやんよ》

サラマンドラ氏が笑い声を上げ、またうつすらと光る。

知識が流れこんでくる。

>> 精霊・サラマンドラ

四属性のうち火を司るサラマンドラ

喚起の為の構成式

高位火属性精霊

実体化可能、炎により様々な……

>> 爬虫類とかそういうモノの加護

おめでとう！

きみは はちゆうるい とかに すかれた ぞ！

理解理解理解理解理解理解。

一気に流れこむ2つの項目をジャンル毎整理する。



精霊術の項目から派生する情報とは別に、加護の項目を新たに作成。この不思議な感覚は、激しい水流の中に身を浮かべているようだ。だが、苦痛を感じる類のものではない。

理解は幸せ。知識は甘美。嗚呼、この満ち足りた、未知なるものを網羅するこの快感。

俺は、この火精霊を、理解した。

サラマンドラ

爬虫類系とかの方々

俺は、この火精霊に、気に入られた。……あ？ああ？

この世界に来てから何回か経験した不思議な知識の流入に、テキストなものが混じっていた。

未だにこれが何なのかは分からないが、明らかにおかしいのが混じってたよ今！

っーかサラマンドラ氏やっぱりトカゲなんじゃねーか！

精霊とか言ってるけどあんたトカゲじゃん！と精霊交信でツッコもうとしたときには、既にサラマンドラ氏はシアの枕元に戻っていた。視線を向けたら火の玉を浮かべられた。

《こっち見てんじゃねエよ》

《え、気に入ったとか言っつてその態度ですか！扱いチグハグじゃないですか！》

《それとこれとは話が別だぜエ。俺のいまの仕事はお嬢を守ることだ。安心しろ、素直に眠りゃあ燃やしはしねエよ》

《ああ、うん、そうですね……》

最後の会話に酷く疲れを感じた俺はツッコミを諦め、1つ目の選択肢を選んで眠ることにした。

サラマンドラ氏、マジ職務熱心……。



## 7話 見つめ合う一人と一匹。(後書き)

読んで下さりありがとうございます。

主人公が初めて能力を使いました。T U E E Eへの第一歩となります。

次回から冬弥とアルンシアの旅路が始まります。

やっとこさ冒険へ出発出来そうです。

追記。

感想ありがとうございます。

そして誤字報告ありがとうございます……！！

疲労マックスが披露マックスになってました。何を披露するつもりだったんでしょうか。

露出狂でもあるまいに……。謎は深まるばかりです。

## 8話 俺のニヤけ顔を返して！返してよ！

「ご利用ありがとうございました。またお越しくださいます」

「うむ。世話になったの」「ありがとうございました」

翌朝、宿で出された朝食　鶏肉っぽい味のする肉とかパンとか  
を終えた後、深々と頭を下げる素敵シルバーに見送られ、俺とシ  
アは宿屋を後にした。

昨夜はお楽しみでしたね、とは言ってくれなかった。当たり前だ。  
これから俺達はカナさんの住むササキの森へと向かうことになる。

「おー、結構人いるんだね」

外に出ると意外にも人通りが多い。旅の準備を整えるために食料な  
どの買出しをしつつ町中を歩くと、人の途切れる瞬間というものが  
全くない。

どころか店を構える商店主の客寄せや、それに応える客の声などが  
絶えず聞こえてくる。

昨夜到着したときには静まり返っていた町とは思えない活気だ。

町自体があまり大きくないようだったから、これはとても意外だ。  
辺りを見回せば商人らしき衣服に身を包んだ者や（というよりは売  
り物らしき物品を積み込んだ荷馬車を引き連れているのでそれで判  
断した）、革鎧や金属鎧を着込んだ冒険者ちつくな者（大半が武器  
を携えているので、そうと分かる）、簡素な布服の町民など（要す  
るに職種の判明しない方々）、様々な人々が居る。

人種も多種多様……間違えました。

種族も多岐に渡っているようで、普通の人間も居れば、明らかに人  
間ではない者もいる。

具体的には、ネコミミを頭にくつつけた巨漢だとか、鳥みたいな羽  
を背中から生やした巨漢だとか、やたら扇情的な衣装の筋骨隆々の  
巨漢だとか。

いやごめんなさい、何かインパクト強いばかりに目が行っただけです。

だって彼ら滅茶苦茶イイ笑顔浮かべながら歩いてたんだもの。身長も視界を占める面積も大きかったから否応なく脳裏に焼き付いたんですもの！

ともあれ、実際にこうして元の世界では有り得ない種族さん方を目にして、改めてここが異世界なんだと思い知った。

巨漢Aのネコミミは作り物ではない感じでピクピクしていたし、巨漢Bの羽も風に揺られている訳でもないのにピクピク動かし、筋骨隆々の巨漢Cの乳首もピクピク……うげえええ。

気を取り直して。

彼らの人外的特徴は、間違いなくコスプレではない。

シアのツノとかはむしろ可愛い部類だったのだと思い知る。

ブチ未知との初遭遇に驚愕するかと思いきや、自分でも意外なことに「スゲー、異世界だー」程度で済んでいる。

たぶん昨晚サラマンドラ氏と会話したことで常識回線が何本か焼き切れたに違いない。

火精霊だけに。トカゲと話す機会なんて普通に生きてたら絶対に訪れないと思うよ……。

ちなみにサラマンドラ氏は大人しく寝れば燃やさない宣言をきちんとして守ってくれ、俺は五体満足で朝日を拝むことが出来ました。ありがとうトカゲ。

サラマンドラ氏は、シアが目覚めたのを見届けたら光の粒になって虚空へと消えていきました。それまで隙を全く見せなかったあたりトカゲガードは鉄壁っばいです。

「このサンボの町は商業国家コトナシとの国境にあるからの。商人を中心にして人の行き来は割かし盛んじゃよ。この町はこれからどんどん栄えるじゃろうな」

「へえ……。人間と魔族の間でいがみ合いとか起こったりしないの？ 国外から人間が来るわけだし、ドミトリス国民の思惑がどこにあ

れ……問題が起こりかねないような気がするんだけど」

「確かに多少はあるがの。それでも商人という者はたくましくてのう、商売のためにならないことはせんよ。そもそも魔族の暮らす地であるドミトリスに入国するような者共じゃ、商人ではなくとも魔族から疎まれるような真似はすまいよ」

ドミトリスに工作を仕掛けようとする者なら別じゃろうがな、とシアはクククと笑った。

笑ってていいんですかそれ。色々対策打つべきじゃないんでしょうか。

俺のそんな疑問を読み取ったようで、シアが説明をしてくれた。

「クルニア大陸の3強国の1つにドミトリスが数えられておると昨日言っただじやる?」

「あー、そんなこと言ってたね」

確かに言ってた気がしますが。あの時はシアを電波ちゃんだと思っただので、まともに取り合ってませんでした。とは口が裂けても言えない。

「ドミトリスが強国足り得る理由の1つとして、魔族自体の戦闘能力の他に大きな要素があるのじゃよ」

「へ? てつきり魔族さんが武力無双するもんだから強国になったものとはばかり」

それと魔族さん方の結束力が云々ってのもあるんだろうなとは考えていたが。

「それはの……」

そこでシアは声をやや潜めた。

「我が妹、オリカレットの風精霊によってドミトリスの治安は保たれておるのじゃよ。オリカは私と違って複数種類の属性の精霊を使役出来ぬが、風精霊の使役に関しては史上最高と言っても差支えない精霊術師じゃ。この国の都市で何かを企めば、途端にオリカの風精霊がそれを感知してたちまちの内に陰謀は明るみになるのじゃ」

「なにそれ怖い」

風精霊とか、その運用方法とかはよく分からないが、スケールがやたら大きいことは伝わってくる。

ドミトリスの領土がどれだけ広いかも知らないが、強国と言われるのならば小さいということはあるまい。

それを単身の力で可能とするオリカレットさんも凄いが、精霊術というファンタジー技能の常識外の威力には脱帽するしかない。

「とはいえ、ある一定の単語だけを拾い出して反応する仕組みなんじゃがな。具体的な単語は国家機密じゃから言わぬがの。完璧ではないが、十全にほぼ近いレベルで国を守ることが出来る。国を落とすならまずは都市から落とす必要があるからの、そこに精霊を配置するだけで事足りはするのじゃ。……この仕組みのせいでササキの森に押し入るような企みは分からぬのじゃが」

「……精霊術、半端ないなあ」

強大な力を持つ精霊術という能力をぼんやりと考え、サラマンドラ氏が浮かんできたので考えるのをやめた。

爬虫類に守られている国って何か嫌でした。

それから何件かの店を周り（ちょっととしたデート気分でした。俺だけが）、旅支度を終えると、俺とシアはサンボの町を出た。

ここからササキの森までは徒歩で行くこととなる。

ついでに、俺達の他に旅路に一匹が加わっている。

町から出る前に、シアが馬のような生き物を調達していた。

馬と簡単に言い切れないのは、見た目は馬なのだが、この生き物の皮膚は真っ黒く目が煌々と赤く輝いているからだ。

ブルヒヒーンと馬じみた鳴き声をあげるものの、吐息が明らかに毒霧っぽい色をしている。

なんでしょうねこのヤバ気な生き物。

トーヤは馬に乗れるか？とコイツを前にして訊かれたものの、俺は首がもげる勢いで横に振った。

俺に乗馬経験なんて無いですし、コイツ真つ当な馬ですら無いですもん。

シアが言うにはコイツはシャドウホースと呼ばれる種族のモンスターらしい。

あ、魔族とモンスターは決定的に違うらしいです。

知性があり文明を築くことが出来るのが魔族で、獣の強化版みたいなのがモンスターとのことでした。

シアさん談。

シャドウホースはモンスターの中でも人（魔族も含まれますが、いちいち使い分けると面倒なので人と表現することにしました！）に懐き易く普通の馬より体力もあるため、ドミトリスでは重宝されているとか。

そんなシャドウホースはいま、背中に買いだした荷物を載せられ、俺に手綱を引かれて後ろを付いてくる。

後頭部に毒霧が噴きかけられぬように注意しつつ、風向きにも気を払って俺は歩く。

俺が風下になつたら最後、あの毒霧が俺の後頭部に襲いかかる事件が発生することは想像に難くない。

「トーヤが馬に乗ればもっと早く着けたのにのう。馬車が調達出来なかったのも運が悪かったの」

「ちなみにコイツの吐く息って毒あるの？ちょっと風向き変わってきた気がするんだけど。俺が風下方向に」

「シャドウホースは速いぞ。私の見立てたコイツは特にも速そうじや。サンボの町で一番の名馬を選んだと自負しておる」

「ねえ息に毒あんの？首の後がピリピリしてきた気がするんだけど」



「馬に乗って街道を駆け抜けるのは気持ちがいいのじゃぞ」

「な、なあ毒……」

「そういえばサラマンドラから聞いたぞ。おぬし、精霊術の素養があるそうじゃな」

「トカゲじゃなくて俺の話を聞けよ!!」

俺の発言はトカゲ以下の優先度ですか!ぐぎぎサラマンドラ氏……!人間としての尊厳が問われている!

うるさいのう、とシアはジト目で俺を睨んでくる。

だが負けません!ここで折れたらトカゲに負けた俺とかいう不名誉な立場に陥る気がする!

「……安心せい。シャドウホースの息は無害じゃ。毒霧吐くようなモンスターが馬替わりに使われるわけないじゃろくに」

「あー……それもそうですか……」  
ほっと一安心だ。

「して、トーヤ。おぬしは知らぬじやろが、精霊術の素養があるというのはこの世界でも珍しいことなのじゃぞ?」

「ほ、ほう……。そうなんですか……?」

思わぬ『あなたは特別』的な情報に、意図せず口元がにやける。

そうですよ!異世界召喚された主人公が特別な力に目覚めるってのはテンプレートですよね!

お約束がしっかり守られててお兄さん嬉しいです!

「前にも説明した気はするが、魔術と違って精霊術というのは生まれつきの才能によるものじゃからの。使えんやつは絶対に使えぬし、後天的に精霊術に目覚めるといったこともない。そうじゃの、何万人かに一人だけが精霊術を使えるといった割合じゃろが」  
そう言っつて、シアは腕組をして首を傾げた。

「しかし、精霊術は精霊が好むような魂の清らかさを持った者だけが使えるというのが定説なのじゃがなあ。おかしいのう。召喚されたときにパスでも繋がったか……?」

あつれ、これっつて言外に俺がそんなに綺麗な魂を持つてる訳ねーだ

るとか言われてますか。言われてるんでしょうね。

失礼千万である。酷い言い草にも程がある。

「俺ほど純真で紳士精神溢れた若者を捕まえておいて何を言いますか！シアが可愛いからってお兄さん許しませんからね！」

「え、なに？トーヤほど露骨で情欲塗れまみの馬鹿者じゃと？」

「この世界は悪意に満ちている！！」

「だとしたら、おぬしの居た世界はよほど混沌としておるのじゃろうな」

ブルヒヒン。

シャドウホースが絶妙なタイミングで黒々とした吐息を吐き出す。

おいこらシャドウホース、お前も相槌うってんじゃねーよ！

「ともあれトーヤ。知識もないままに精霊術を使わんことじゃ。精霊術は強大だが、その分、使役する精霊の機嫌を損ねた時には手痛いしつぺ返しを食らうことになるからの」

「なん……だと……」

「これが魔術であれば魔術構成をしくじらなければいいだけの話なんじゃがな。精霊術は精霊から『力を借りる』方法じゃからの。術者が気に入らなければ精霊は言うことを聞かぬし、悪ければ精霊が術者自身を殺そうとする」

「わ、分かったよ。迂闊にサラマンドラ氏とか喚んだりしないようにするよ……」

俺の異世界召喚補正、終了のお知らせです。

いくら凄い力を振るえるとしても、それに多大なリスクが付きまとうとなれば話は別だ。

俺の目的は元の世界に帰ることで、その前に死ぬようなりスキーな行動は慎むのが賢いだろう。

異世界に来て、特別な力を手に入れた！と思ったらこれである。

俺のニヤけ顔を返して！返してよ！

俺は得も言われぬ脱力感に激しく肩を落とした。

落ち込む俺を見て、クスリと声を漏らしたシアが、さも仕方なさそ

うに言った。

「ま、カナのところまでの道中に危険なところはないの。道中の退屈凌ぎに簡単な魔術でも教えてやるうかの。せっかく異世界に来たんじゃ、トーヤも魔術など覚えたいじゃろうし」

「シア……！君って奴は……！」

感動した！シアの俺を気遣ってくれるその優しさに俺は感動を禁じ得ない！

なんか含み笑いしてるけど美少女だから許す！

「いいのじゃいいのじゃ。トーヤは異世界からのお客人じゃしの。」

それに精霊術を使えるほどの才能もあるのじゃし、魔術師としても凄まじい適正を持っておるじゃろうて」

「そ、そうかな？照れるなあ……」

これが落としておいて拾い上げる詐欺まがいの話術だったと気づくのはしばらく後である。

ついでに異世界に拉致された事実がお客様扱いに摩り替えられていた。

精霊術師のご機嫌取りスキル、侮るなかれである。

8話 俺のニヤケ顔を返して！返してよ！（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

感想やご指摘をいただきまして本当に感謝感激でございます。

お気に入りや評価も多数の方からいただき、作者はビクンビクンしております。

これを励みに頑張りたいと思います。今後もどうぞお付き合いくださいませ。

## 9話 この世界における分からない事々。

「『<sup>シャイン</sup>輝き』 『<sup>シャイン</sup>輝き』 『<sup>シャイン</sup>輝き！』 シャイン！シャイン！シャイン！シャイン……  
シャイン……シャ……ヒヒーん」

「どうして最後が馬になったのじゃ」  
街道を歩いてしばらく。

俺はシアに魔術を教わりながら、シャドウホースもとい黒霧号の手綱を引いて歩いていた。黒霧号と名前を付けたのは当然俺です。黒くて毒霧吐くので黒霧号です。

俺とシア、黒霧号の旅路はすこぶる順調で、盗賊やらモンスターとエンカウントすることも無い。

いやまあ、町から続く道にそんなもんがいちいち出現してたら商人の皆さんが来るわけないんですが。

ときどきすれ違う商人は、必ず護衛を引き連れていたが、それだつて物々しく大人数を連れて歩いている様子はなかった。必要最低限の数と言ったところがせいぜいだろう。魔族の国という字面だけは危険地域なドミトリスだが、治安が良い事は疑いようがない。

なので俺達も特に辺りに警戒を払うこともなく、シアからご教示いただいている魔術を試し試し旅路を往くことが出来る、のだが。

「単に呪文を唱えるのではなく、指先に集中した魔力で陣を描き、そこに魔力を注ぎこみながら魔力を解放するのじゃ」

「魔力を指先に集中つて時点で無理だよ！なんですか魔力つて！」  
残念ながら今のところ、一向に俺が魔術を使える気配はなかった。

「そう言われてものう。魔力は魔力じゃ。体内に流れる自身の魔力に、大気中に存在する魔素<sup>マナ</sup>を反応させ、様々な結果を生み出すのが魔術じゃ」

「魔力なんて俺にあるんですか……？」

「生物は皆、大なり小なり魔力を持つておる。おぬしは異世界人じやが、私が精霊と間違えるような気配はしておったのじゃし、魔力はあると思うのだがのう……。魔方陣が間違つておるのではないか？ ころじゃぞ、ころ」

シアは指先を赤く光らせ、宙に凶形を描いていく。丸書いてちよん丸書いてちよん。

「<sup>シャイン</sup>「<sup>シャイン</sup>輝き」」

シアが唱えると、光の玉が生まれ、ジジジと燻りすぐに消え去った。事もなげにシャインの魔術を発動してみせたシアの姿に、ブルーな気持ち加速する。

年季は違つとはいえ、ころも簡単にやつてのけられると自分がどんだけ可哀想な出来をしているのか嘆きたくもなるというものだ。

異世界人と比べるのは間違いですか、そうですね。

「魔力……魔力ねえ。さっぱり見当もつかないよ」

「こればかりは何とも説明し辛いのう。魔力は誰もが意識せずとも感覚として知つておるものじゃしな」

魔力を感じると言われましても、というのが本音だ。

生まれてこのかた魔力なんてモノと触れ合う機会のない人生を送つてきた一般ピーポーたる自分にそんなことを言われても、正直なところ無理である、

魔力つて何だ。気功か。オーラですか。

よく漫画とかで気を操るためだとかで、臍下丹田に気を集中して云々つていうのを良く見かけるが、それに近い何かなのだろうか。

臍下。へその下にある部分、丹田に集中して……丹田つて何だ。そんな臓器でもあるんですか。聞いたことないんですが。

とりあえず下腹部に力を込めて、それを徐々に指先へと移動するイメージ。

力の入れ過ぎで顔面は紅潮し、指先はプルプルと震える。

指先に名状しがたいワンダフルパワーを集約するイメージのもと、呪文を唱える。

「シャアアア、イイイイ、ンンン〜！」

「力んでおるだけじゃからな、それ」

そのままフンヌヌと数秒気張ってはみたものの、息苦しくなってきたのでやめた。

シアのように指先が光ったりすらしらない。基礎中の基礎と呼ばれる要するにすつごく簡単な魔術すら使える様子のない俺に、シアは既に諦めた顔をしている。

なまじ期待されるよりは余程いいが、そういう諦めフェイスも人の心をえぐるのには十分だと思えますよ俺は！

「おそらく、根本的にトーヤは魔力というものを知覚出来ておらぬのじゃろうな。意識して息を吸い込む。魔術師であればこの動作1つで体にマナが取り込まれたことを感じる事が可能なのじゃが」  
言われて、俺は大きく息を吸い込む。うん、空気が美味しい。排気ガス無い世界ってうめえ。

深呼吸を数回繰り返し、満足したところで口を開く。

「美味だ……」

「何がじゃ」

「清浄なるザ・空気が」

「……これじゃしのう。おぬしはまず、魔力を感じられるようになることから始めるしかなさそうじゃの」

「だってさ、俺が住んでた国じゃ、基本的に空気は汚染……汚染は言い過ぎだけど、ここよりは物凄く汚れてたんだ。空気自体にガスの匂いがくつついてるのは普通。そうじゃない場所もあるんだけどね。そんなトコに住んでると、こういう自然の中で吸う空気ってのは凄く美味しいんだ」

俺がそう言くと、シアは嫌そうに表情を顰めた。

多少の誇張混じりとはいえ日本の都市部の空気が排気ガス臭いのは嘘ではない。

だからハイキングなどと称して緑の多い地域への行楽があるのだし、山々の空気はとても澄んでいるように人は感じるのだ。

こちらの世界では科学技術がいまいち発展していないので、車や工場が排出するガスによる空気汚染はないだろう。空気が臭いと聞かされたシアの表情も納得出来る。

「……そんなところには住みたくないのう」

「ですよー」

至極尤もである。

「でもさ、そんなところでも俺の故郷なんだ。割と色々楽しい場所とかもあるしね」

苦笑いをしつつ、我が国ニッポンに微妙なフォローを入れる。

観光名所とかこの場で伝えても仕方ないですし。

そんなことを考えていると、シアが前を向いて歩きつつ、何ともなさげに言う。

「ふむ、ならばおぬしをきちんと送り返してやらねばのう。故郷は誰にとってもかけがえのないものじゃ」

「……あ、うん」

「では此方の世界からの土産代わりにでも魔術を覚えねばな。ほれ、もう一度魔力を感じるところからじゃ。息を吸って、体内にマナを取り込む感覚で」

俺はふと、不思議に思った。

何故、シアは俺を元の世界に返そうとしてくれるのだろう。

考えてもみれば、シアが俺を元の世界に戻す手間を掛けるメリットなんて彼女には無いのだ。

手違いで俺を召喚したのはシアなのだが、俺を送還する義務なんてありゃしない。

俺が一方的に帰りたいと願っているだけで、別に俺を放置しようと



シアにとっては構わないだろうに。

彼女は どうして俺に帰れる方法知っている人物を教え、どうしてそこまで俺を連れていってくれ、どうして俺に魔術まで教えようとしてくれているのだろう。

どうして、だけが止めどなくポップアップしてくる。

俺を連れてきたという罪悪感から？俺を放置しては人道に悖る行為になるから？何かそうしなければならぬ理由があったから？

分からない、分からない。

理解が及ばない。俺はシアを理解出来ていないから。

にアクセス。 検索を開始。

>>当該の疑問に関する知識に関する回答は保有せず。

無意識化で思考が蠢く感覚。それに大して俺は何とも思わない否、気付けない。

ただ漠然と、いつもより頭の回転がいいとは感じる程度の。

回答なんぞないのは当たり前だ。人の思惑に解答、回答の類を求めるのは誤りだ。

けれど、シアに尋ねようとは、なんとなく思わない。

俺は、滔々と魔術の何たるかを説明するシアを横目に、そんな考えに囚われたのだった。

ああ、当然のごとく魔術の説明は聴き逃しました。シアに「聞いておるか聞いてないじゃろ聞け馬鹿者！」と殴られるまでボーっとしてました。

殴られたときちょっと気持よかったですビクンビクン。

ブルハァー……。と後ろで黒霧号がため息じみた黒霧を吐いていた。

街を出た頃にはまだ高かった日も徐々に落ち始め、空が夕焼けに染まりつつある。

俺とシア、黒霧号の旅路は（俺の魔術がさっぱり進展しないのを除けば）大変順調に進んでいた。

眼前に大きな湖が見えるほど高い丘の上に到着したところで、完全に暗くなる前に野営の準備をしようとしてシアが提案し、俺はシアの指示に従い黒霧号から荷物を下ろしていった。

野営用とは言うものの、食料やその他諸々のお泊りセット程度のものしかシアはサンボの町で買い求めず、テントのような宿泊機材もその中には含まれていない。

かさばる物が余り無いおかげで、黒霧号が背負う荷物は全体としても然程多くない。

これで何日もの旅路を往くのかと、異世界での道行きもよく分からないながらも首を捻ったものだ。

あ、ちなみにサンボの町で俺は服を買ってもらいました。買出しのついでに。

おぬしのその服装は目立つしのか言いつつシアが俺に見繕ってくれたのは、よく物語で魔術師が着ているようなローブだ。

色は全体的に暗めの灰色で、部分部分に白と黒の刺繍が施してある。フードを被れば怪しさ満点のグレーの不審者の出来上がりだ。通報されませんかこれ。

とはいえ元の世界から来たままのTシャツとジーンズ姿じゃあまりに悪目立ちし過ぎるし、上からローブを羽織っただけでも周囲から奇異の視線に晒されることが無くなる。

結構重宝しそうなローブを買ってもらった俺は、シアに対する好感度が上がっていた。

頑張つてシアさん！あとフラグ何本か回収すると俺ルートに突入しますよ！

閑話休題。

「さて、寝床を準備するかの。ちと離れておれ」

シアは街道から少し離れた拓けた場所へ移動すると、俺と黒霧号から距離をとった。

寝床の準備つて何を準備するつもりなんだろうと考える俺の前で、シアがすつと手を虚空に伸ばした。

「ノーム。『樹木を育てろ』『家を』」

ズゴゴゴゴと音を上げて、シアがかざした手の方向の地面が盛り上がりつついく。

茂っていた背の低い雑草さんたちを巻き込みつつ、地面がその土色もあらわにうねっている。

なんか自動で耕されてませんかあの辺の地面。そこからニョロリと植物の芽が顔を出した。

それは瞬く間に苗、幼木、樹木と成長を遂げ、最終的には幹の直径が2メートルはあろうかという巨木へと変貌を遂げた。

土の中を太い根が這い回ることによって地鳴りが起き、近くの木々からは驚いた小鳥たちが空に飛び立った。

この巨木、高さはそれほどないが、横には結構な範囲に渡って枝を広げている。

え、何ですかこの即席巨木育成術みたいなの……。

火の玉飛ばしたりトカゲが喋ったりとファンタジー要素に触れ、若

干ではあるが慣れ始めていたのだが、こうも大きなモノが突然現れれば啞然となる。

しかもこの巨木、幹の上にはログハウスみたいな家に乗っけている。まんま一昔前の魔女の家の佇まいである。

俺は言葉も出せずに呆け、黒霧号の手綱を握ったまま立ち尽くしていた。

黒霧号などは怯えることも忘れ、アゴが外れる勢いであんぐりと口を開けている。黒霧もダダ漏れだ。

どうでもいいですがこの馬モドキ、ときどき妙に人間じみたリアクションするんだよな……。

「ほれ、馬をそこらにつないでさっさと家に入るぞ。荷物はちゃんと運び入れるのじゃからの」

家を生み出したと思われる本人はツカツカと木に歩み寄り、幹から生えていた梯子に手をかけた。……梯子生えてた。木から。家のドア下の踊り場みたいなスペースまでしつかり続いていやがる……。

「シ、シア。これは一体……？」

もうこの世界に来てから何度驚いているのかさっぱりだが、俺は恐る恐るシアに尋ねる。

ん？と何を訊かれているのか分からなかった様子のシアだが、俺の視線の先にある巨木を見て得心した感じでポン、と手を打つ。なにその日本人的納得しましたアピール。文化差は何処へ行きましたか。「これか。精霊術じゃよ。地の精霊、ノームの力を借りて植物を成長させ、即席の家を作り出したのじゃ」

「なんでもありか！やりたい放題ですか精霊術！」

便利過ぎるでしょうこのファンタジー世界！

「中位詠唱での使役じゃからの。心置きなく休める家を提供してもらう程度のごとは可能じゃよ」

「中位詠唱……？」

初めて聞いた単語に首をひねる。

シアはうむ、と頷き、お馴染みとなってきた講釈を垂れる。

「精霊術を使うときにの、精霊への呼びかけを1つ行うのが下位詠唱じゃ。それに1つ加え、2つの指示を同時に与えることを中位詠唱と言うのじゃ。例えば、ウンディネに『癒せ』と指示してトーヤの傷を治したのが下位詠唱。サラマンドラに『姿を顕せ』『守護を』と指示し、寝ている私を守らせたのが中位詠唱じゃ。体を持たねば、精霊は術者の呼びかけ無しに動くことはないからの」

……。分かりにくい……！

話からすると下位詠唱ってやつが精霊に単純な命令を下すだけの方法で、何々をしてからソレをやれ、と条件付けするのが中位詠唱ということなのだろうか。

あれ？じゃあ同じ内容のことを二回頼んだ場合はどうなんだろう。

サラマンドラ氏にひたすら『燃やせ』『燃やせ』と命令したときとか。

「えっと……多くのことを頼むと中位詠唱になるの？同じ命令繰り返した時とかも」

「最初の指示自体が、次の指示に影響を与えるものが中位詠唱なんじゃよ。『癒せ』『癒せ』とウンディネに指示したところで下位詠唱の重ね掛けにしかならぬ。これをもし中位詠唱としたいのであれば『力を込めよ』『癒せ』などと呼びかけるのじゃ。この時、精霊術の癒しの効果は倍増する。こうして加速度的に効果を増やせる中位詠唱じゃが、指示が多くなる分、精霊の機嫌を損ねやすいのが難点じゃの」

「ぐおおおお！分かった！この世界はファンタジーだってことがよく分かった！」

とどのつまり理解がすつげえ面倒だっということが分かりました！今日の旅路だけで知識ガッツガツ詰め込まれて俺の脳味噌はフルファイアよ！

オーバーヒートって言いたかったんです。察してください。

シアの言っていた中位詠唱とやらのニュアンスは、なんとなく分かったからまあ良しとしておこう。

アレしてコレしてと一度に頼まれれば精霊だつてウンザリする。それが大して好きでもないヤツからなら不機嫌にもなるさ。

そういうことだ！

そういうことなんだよ、きつと！

いっばいいっばいになってきた俺を見てこれ以上の知識の詰め込みは無理だと悟ったシアが、先に入るぞと梯子を昇ってゆく。

相変わらず出会った当初から変わらないドレスを来たままで、スカートが絡まないのか不安にも思ったが、本人は慣れた様子でスイスイと梯子を昇り終えてしまった。

なお、スカートを下から覗くという非紳士的行為には手を出さなかった俺だった。

何故か？ 夜は始まったばかり、焦ることはない。

警戒されて今夜もまたサラマンドラ氏ガードを出されても困るし。

「…………今夜こそは、寝顔を…………」

未だにアゴを落とし微動だにしない黒霧号に正気を取り戻させ、巨木の根元に手綱を結んでから、含み笑いを浮かべつつ俺も梯子を昇って行くのであった。

## 9話 この世界における分からない事々。(後書き)

読んでいただきありがとうございます。

主人公も基礎っぽい流れを学んだところで、次回から主人公が動き出します。

説明回は終わり、実践回にシフトが始まる予定です。

追伸

評価、お気に入り登録ありがとうございます。期待に添えるよう、頑張ります。

## 10話 疾走するインテリジェンスのカタルシス。

「どうしてこうなった!！」

結論から言うと、シアさんの寝顔を拝むミッションは今晚も失敗いたしました。

厳密には途中までは上手い具合にコトが進んでたんです。

ログハウスの意外と広いリビングで調達してきたパンやらスープやらを食べ、和やかにお互いの世界のことを話してたあたりまでは順調だったんです。

で、シアが疲れたから寝ると言い出して、部屋に入っていったわけですよ。

俺も自分に充てがわれた部屋に一旦入って、シアが寝静まるのを待ち、十分に時間が経ったのちに行動を始めたんです。

部屋の中からは物音ひとつしませんでしたし、念のためにとそこから更に時間を掛けて本当に寝ているかどうか慎重に確認したんです。いや本当にシアを襲って性的にどうこう、ってのは考えてないんですよ？

昨日サラマンドラ氏に邪魔された分、今夜こそ寝顔見てやるぞってちよっと熱くなっただけでしたが。

やってることは完全に性犯罪者の拳動ではあるのは承知の上です。けれど諦めたらそこで試合は終了だと思えます!思っただ、です…

…。  
ドアノブに手をかける。

音がしないように少しずつ、少しづつノブを回していく。

カチャ……リ。

次にドアをゆっくりと開けていく。焦らずに、あくまでも静かに。じりじりと牛歩な感じでドアを僅かずつ開けていく。

まずシアの部屋の床が見え、次に向こう側の壁が見え、ベッドの端



が見えました。  
もうちょっとで俺がギリギリ入れる程度の隙間が開く……！  
そして最後の一押しとゆっくりとドアを押す。  
押ししたところで。

ドアの向こう側に立っていた、満面の笑みのシアと、目があった。

「ホギヤアアアアアアアアアアアアアアア！！」  
「サラマンドラが言っておった通りじゃったの」

曰く、サラマンドラ氏がどうせ俺が今晚も来るだろうと言っていた  
とのこと。

あんのトカゲ野郎、アフターケアも万全ですか……！

結果、サラマンドラ氏の忠言を聞き入れたシアはこうして俺を待ち  
伏せしていたらしい。

凄みのある笑顔のシアは俺に毛布を持たせ、ログハウスの外へ放り  
出すと、

「 ノーム。『私以外のモノに』『拒絶を』」  
と家を指差し精霊術を行使した。家全体を光の粒が覆い、吸い込ま  
れるようにして消えていく。

「これでこの家には私以外誰も入れぬ様になった。音も衝撃も伝わ  
らん。何、朝まで外で過ごしておれば頭も冷えるじゃろう？」

「え、あ、ちよつと！」  
「おやすみ」

ボタン。無常にも扉が閉められた。  
慌ててドアを叩きつつシアに謝るが、本気で防音仕様になっている  
らしく、中からシアの応える声はない。

しばらくドアをドンドンと鳴らしてみたが、一向にシアがやってく  
る気配はなかった。これは本気で外で寝ろ、ということなんですよ

うか。

こうして俺の、異世界の夜空のもとでの就寝が決定したのでした。とはいえ眠れるわけないじゃないですか！毛布が一枚有るとはいえ夜風は流石に体に悪いですよ！

地面に寝転がるのも嫌だったので、仕方なく家の玄関前に毛布にくるまり横になる。

幸いにして玄関前は踊り場になっているから寝転がるスペースがあるし、落下防止のためか枝が密集して生えているので寝転がっても樹の下へズドンとなることはなさそうだ。

それに玄関前で寝ていれば、俺を哀れに思ったシアが家の中に招き入れてくれるかもしれないし。ぜひ招き入れてくださいお願いします。

ふと眼下を見下ろせば、黒霧号が草の上に足を折って就寝体制に入っていた。

動物って遅いと思いつつながら、やることもなくなった俺は静かに目を閉じたのだった。

ヒヒイイインー！

「……………んが？」

けたたましい鳴き声に、眠りの底から引き揚げられる。

いつの間にか寝ていたらしい。こんな環境で眠れるとか人間って結構しぶとい生き物なんじゃないでしょうか。

寝ぼけ眼をこすりこすり、声のした方に眼を向ける。

踊り場から身を乗り出し、下で寝ていた黒霧号を見ると、

「……………あ？……………あ？」

なんか大変な事になっていた。

暗くていまいちよく分からないのだが、黒霧号が体に何かをしがみつかせたままバタバタと激しく暴れていた。それだけではない。

黒霧号にくつついたもの他にも、周囲には蠢く影が大量に在った。それらが今、この巨木の下にわらわらと集結しつつある。

一つ一つの影は人間の子供程の大きさで、最初は盗賊か誰かが黒霧号を盗もうとしていたのかと思ったのだが　　違う。

暗闇に慣れてきた目を凝らせば、その影の表面がぬめぬめとした光沢としており、星の光に薄くてかっている。

形状も人間とは違っていた。

ヒレのような突起が頭から背中にかけて生えており、背骨がまっすぐではないのか、前傾姿勢になっている。

そのくせ二足歩行をするものだから、動きがいちいち滑稽に映る。

何より、魚としか言いようのないその頭部が、影が人間ではないことを示していた。

「半魚、人？」

思ったことが口を衝いて出る。

そう、半魚人だ。魚の頭部を持ち、体は鱗に包まれ、手足には水かきを持った　　他に形容のしようがない半魚人たちが、この巨木へ向かって群がってきていた。

黒霧号は3体ほどの半魚人にまとわりつかれ、悲痛な叫び声を上げている。

半魚人たちが友好的でないのは見るだに明らかだ。やつらは魔族ではなく、たぶんモンスターに分類される生き物だ。キュエエキュエエと奇声を上げる姿に知性なんて欠片も感じない。

「なっ、おい、やばいですってこれ！シア！起きろシア！」

動転してドアを殴りつけるようにして叩く。けれどもいくら叩こうとシアは出てこない。

……防音機能、ウルトラ完璧……！

シアの行使した精霊術によって守られた家は、外からの音を完全に

通していないようだ。

これでは俺がいくら呼びかけたところでシアが気づきそうにもない。そうしている間にも黒霧号の藻掻く音と、半魚人たちの上げる奇声はますます激しくなっていく。

なんでこんなところに半魚人がと思い、そういえばこの丘から見える場所に大きな湖が在ったことに思い至る。

あそこからやってきたんですか……！

この旅路に危険なところはないんじゃないですか！とこの場にはいないシアにツツコミを入れるが、当の本人はちゃっかり家内で静かにおやすみタイムなので確かに危険はない。シアだけは。

音も衝撃も伝わらんとか言ってたから、例え半魚人たちが樹上に辿り着いても平気だろうし。

今ここで危ないのは俺と、半魚人に襲われている黒霧号だけだ。

黒霧号は木に結ばれた手綱が邪魔をして、半魚人たちから逃げるこゝとが出来ないでいる。

後ろ足で蹴り上げたりして近づいてくる半魚人を追い払ってはいるものの、既に背中に飛びついていている一匹はどうしても振り切れないでいる。

半魚人にはどうやら牙があるようで、噛み付いたまま黒霧号からぶら下がっていた。

噛み付かれた部分からは少くない血が流れ出ており、その様はピラニアの群れに落ちた動物そのものだ。

端的に言うと、黒霧号の命がマジで危ない。

「黒霧号……！」

半魚人たちがこちらに昇ってくる様子はない。梯子を昇るという知恵がないのか、単に見つけていないだけなのかは知らないが、今のところ俺のいる場所は安全地帯だ。

だが下にいる黒霧号は違う。一体何匹いるんだと言いたくなる数の半魚人に囲まれ、いま正に殺されかけている。

必死に足掻く黒霧号。襲いかかる半魚人。

俺はどうすることもできず、その様を見ているしかなかったと。

ヒヒイ……ン！

黒霧号の足に数匹の半魚人が同時に跳びかかり、黒霧号が地面に引き倒された。

その上へ、好機とみた半魚人たちが次々に襲い掛かっていく。

必死に立ち上がるうとする黒霧号が、樹上に居る俺の方を向いた。

夜の中でも煌々と輝く双眸がこちらを懸命に見つめる。

たすけて

「…………ツ！」

言葉はない。黒霧号もモンスターだ。言葉を喋れるわけがない。けれど黒霧号は、確かに助けを求めている。

胸が詰まる。

誰に？ 俺だ。

どうして？ 今日、手綱を引いて歩いていたのは誰だ。

その手綱を、木に結びつけたのは、誰だ？ 言うまでもない、俺だ。

俺だって助けられるものなら助けてやりたい。だが、俺が出ていってどうなる。

ただ異世界から拉致されてきただけの俺が。

シアに世話になってばかりの俺が。

魔術も発動すらない俺が。

巻き込まれただけの、俺が。

無理だ、助けられない。

……ネガティブな思考に陥っていた俺は、ソレに気付くのが遅れた。  
ガシユウウウ！

「いてええええええ！？」

肩に信じられないほどの激痛が走る。

見ると俺の左肩に、忍び寄ってきていたのだろう半魚人が一匹、深く噛み付いている。

間近で見る半魚人は目が半ば鱗に埋もれるようにして存在しており、表面はぬめぬめ粘液で包まれている。

こちらは樹上だと思って、迂闊にもコイツの接近を知ることが出来なかったのだ。

血が流れだしてくる。

代わりに、知識が、流れこんでくる。

>> サハギン

水中を主な棲家とする。肉食。口内にある牙と、背部のヒレにある毒針によって獲物を仕留める。

集団での狩りを行い、気性は非常に獰猛。血の臭いにより興奮する

……

「以下は 知識に蓄積する」

>> 水生生物の生態について

この世界における水生生物は……

「以下は 知識に蓄積する」

俺は、このモンスター<sup>サハギン</sup>を、理解した。  
俺は、この世界における水生生物を、理解した。

いつも以上に膨大な量で。感じたことのない速さで。知識が加速し理解が白熱する。

激流を彷彿とさせる知識の波が、俺の中に押し寄せる。  
特にサハギンの生体に関しての知識量の取込み方は、それまでの知識の流入の比ではない。

まるでサハギンをこの身に取り込んだかのよう。  
サハギンのことであれば筋肉の動かし方一つ一つの動作さえ説明が可能。

ああ、知るということは素晴らしい。  
理解が及ぶ。道理が通る。全知の一端への精通、罷り成る<sup>まかり</sup>。  
俺は理解する。知識量が一定に達し、俺というものの一端をも理解する。

俺は。

俺は、この俺の身に宿った力を、理解した。  
<sup>ファンタジー</sup>

10話 疾走するインテリジェンスのカタルシス。(後書き)

読んで下さりありがとうございます。

補足ですが、主人公の能力発動時の文章の末尾に付く「……」は以下略という意味で使っております。



## 11話 そしてヤツは現れる。

この世界に来てから時たま感じていた異様な感覚への理解が及ぶ。始めに感じたのは、舌を噛んだ時にシアの精霊術での治療を受けたときだ。

次はサラマンドラと精霊交信をしたとき。

そして今回の半魚人に噛み付かれたとき。

いずれも俺自身が何かしらを身体に直接受けたときに、突然、知識が頭に流れこんできていた。

流れこんできたというのも生温い。その知識は濁流じみた速度で俺へ襲いかかってくる。

言い換えれば。

脳に叩き込まれるそれは、俺に入力される外部からの莫大なデータに近い。

そのデータには様々な種類の項目があり、全部を読み解くには俺自身の知識が足りない。

けれどその一端を知り得るだけでも異常なのだ。

俺は確かについ先日まで現代日本に暮らす一般人だった、筈だ。

それが何故、異世界の精霊術やらモンスターをこころも完全な形で理解し把握できるのだからか。

それ以前に、それ以前にだ。

ここは日本ではない。では、言葉が通じるのは、何故だ？

日本語がこの世界での共通語なんてことは有り得ない。

シアが俺と同じ世界から来た力ナさんに日本語を教わっていた？それでは俺が宿屋で従業員の言葉を理解出来た説明がつかない。

だとすれば、俺が知らず知らずのうちにこの世界の言葉を理解し、

喋っていたと考えるしか無い。

その、いつの間にか行使していた理解するという力に、俺はここでようやく気づいた。

……。

……………。

異世界テンプレ来ましたよこれ！

異世界にやってきた主人公がチートな能力を保有するのは一種のお決まりですよね！

テンションただ上がりですよこれは！

なんだこれ、とは思っ。

思いはするが、この能力はまるで元から俺に備わっていたもののようにしっくりと馴染む。

Q・なんですかこれ。

A・疑問に対しての回答を検索完了。

・当該能力は天原冬弥が を超えた際の精霊契約によって発生。

天原冬弥の座標を 固定する際に生じた欠落を（ ）・m i D

ノ\*ム「¥2……………

・当該能力は外部から入力された情報を知識として天原冬弥の知識へと蓄積する。格納された知識は検索、起動することにより使用が可能。ただし、天原冬弥が自身の能力内において使用可能な物のみを使用することが出来……………

俺の浮かべた疑問に対し、俺がこの世界に来てから蓄積した情報か

ら、適当な答えが帰ってくる。

この能力　現象を名付けるならば、『自問自答』といったところだろうか。

自分自身の身に起きている不可思議な事項にまでそれが及ぶのは、一定量まで知識を溜め込んだことで、溜め込むという行為を可能としている能力部分までを俺が理解出来たからだろう。

分かりやすくゲームで喻えるならば、ゲームに慣れてきて、自分のステータスがどの程度のものなのかを把握出来るようになったということだ。

ただ、完全に把握出来ているわけではなさそうだ。

完全に近い形で流れこんできた半魚人……サハギンの情報とは違い、漠然と理解しただけの自分自身の能力についての検索結果にはまだまだ綻びが多い。

書いている途中の記事といった感だ。

載っている内容にも空欄や文字化けしたかのように意味不明な情報の羅列が目立つ。

それでも何とか知り得た情報をまとめるならば、俺の現状はこんな感じである。

Q・俺の能力について分かりやすく3行で！

A・疑問に大しての回答を検索完了。回答を作成。蓄積された知識による回答を行う。

- ・天原冬弥は
- ・体に与えられたダメージの理屈を
- ・解析して自分の知識にできる

微妙に分かりにくい上に、一行をみつつに区切っただけじゃないですか！

バカにしてんのか！

A・疑問に対するの回答を検索完了。

・していない

ねえ俺遊ばれてる？自分の能力とかいうヤツに遊ばれてる？

「ギユ……ギユギユウウウウー!!」

「いつてえええええ!!」

噛み付ついた肩を食いちぎろうとサハギンが身を擦る。

その痛みが俺を現実に取り戻した。

俺は肩に噛み付いたままのサハギンを殴りつける。が、ぬめりのある粘液に包まれているサハギンには打撃が通用しているか定かではない。振るった拳がそのまま滑って逸らされてしまう。

このままではじきに肩が骨ごと持って行かれそうだ。

俺は今しがた理解した、自分の身に宿っている力とやらに呼びかける。

自分に向かって問いかけるイメージ。途端に脳内で知識が活発に躍動し始める。

Q・現状への対処方を教えてください！

A・疑問に対する回答を検索完了。

・サハギンの口内の両側面には牙が生えておらず、代わりに水中での活動のためエラが存在し、エラ部分に牙は生えていない

・サハギンの弱点として、表皮と違い鱗に包まれていないエラ部分が挙げられる。神経系もエラ近くに集中している。

Q・つまりはどういう事？

A・サハギンの口の中に指を挿し込み、そのまま押しこむことでサハギンを引き離す事が可能

よっしゃあ分かった！ありがとう俺の力！

「いい加減離れる！！」

俺は肩に噛み付いたままのサハギンの口に指をかけ、一度強く押しこんでから力を込めて引き剥がす。

「ググユウ!?」

弱点を押しこまれたサハギンは、堪らんといった格好で噛み付いていた顎にかける力を弱めた。

俺はチャンスと見て、開いた口の中へ腕ごと指を奥へ奥へと乱暴に差し込んでいく。

サハギンの口内で、気味の悪いヌルヌルとした唾液が絡んでくるが、この際関係ない。

そのうちエラらしきひだ部分に指がかかる。俺はこの野郎とばかりに、そこを思い切り指で突き刺す。

俺の指はサハギンの肌を内側から突き破り、体の外側までを一気に貫いた。

「グユエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！」

すると今度こそ断末魔じみた奇声を上げ、サハギンが俺の肩を噛むのをやめ、仰向けに倒れこんだ。

口からは緑がかかった体液が混じった泡をぶくぶくと噴いており、全身が痙攣している。

エラが弱点というのはどうやら本当だったらしい。

ぐちゅりと嫌な音を立てて肩から牙が抜ける。

血の流れを押しとどめていた物が無くなり、流血が激しくなる。

かなり深い怪我を負ってしまったようだ。絶え間なく激痛が体に走る。

俺は思考を走らせる。

Q・この怪我、どうにか出来ないかな。

A・疑問に対する回答を検索完了。

・ウンディネの癒し

構成式は把握済み。ただし水精霊との契約をしていないため使用不可。

「くっそ……水精霊との契約とか……」

確かにあの怪我を癒す精霊術があれば、この傷を治すことも可能だろう。

鋭い痛みには歯を食いしばって耐えつつ、考える。

『癒し』によつて治療可能

水精霊が居ない

怪我したまま

これを解決する手段を用意すればいいわけだ。

Q・どうすればいい？

A・疑問に対する回答を検索完了。

・精霊交信、この世界における水生生物の生態の情報とリンク。精霊術による精霊への呼びかけによつて水精霊を喚起することが可能  
構成式は……

そうか！水精霊がないなら呼んでしまえば良い。

幸いにして精霊と話すための精霊交信は俺の知識に蓄積済みなわけで、そいつを使って精霊に呼びかければ！

……呼びかけたら、来てくれるもんなんでしょうか。精霊さん。

俺の能力による検索結果とはいえ、実践出来るかどうかは非常に疑わしい。

確かにサハギンは一匹倒せたが、それはサハギンの弱点を物理的に潰したからであって、精霊術みたいにまんまファンタジー能力ではない。

確証が全然持てない。

「とはいえ、やってみるしかないか……！」

肩の痛みと出血はますます酷くなっている。ここで悩んでいても事態は一向に解決するまい。

やらずに後悔するよりは、やって後悔したほうが何倍もマシだ！

意識して水精霊の召喚をイメージする。

頭に浮かぶ構成式とやらをなぞっていく。思い描くのは電子回路を起動させる光景だ。

世界に語りかけるように、独白を聞かせるがごとく、シアのやっていたことを思い出し、真似つつ俺は言葉を紡ぐ。

「我が呼び掛けに応えよ」

脳内に走る知識の回路を走らせる。

思考が高速で回転し、チリチリと火花を散らす感覚がある。……ま

だだ、まだ足りない。

俺が召喚されたとき、炎に包まれていた。その勢いに比べて、俺の思考が放つ電流はあまりに小さい。

「……我が呼び掛けに、応えよ」

蓄積された情報を投下する。ウンディネの癒しを受けたときの、光の粒が身体に吸い込まれていく感覚を思い出し、俺は呼びかけを続ける。

構成式に走る電流がわずかに強さを増す。

だが一向に精霊が反応してくる気配はない。

（燃料が足りないのか………だったら！）

Q・精霊の召喚に使える知識を全て構成式の起動に利用したい！

A・以下についての蓄積された知識を開放。

>> 精霊術

>> ウンディネの癒し

>> 精霊交信

>> 精霊・サラマンドラ

>> 爬虫類とかそういうモノの加護

>> 水生生物の生態について

瞬間、項目分けされた知識が相互の情報を結びつける。

召喚のための構成式にそれらは複雑に絡み合い、混ざり合い、構成式を複雑怪奇なものへと変貌させていく。

迸る電流が雷光となり、知識のサーキットを駆け巡っていく。回る、廻る、ぐるぐると知識がまわる。

構成式が一つの完成形を目がけて一気に加速する。

それが形を成した刹那、俺は遠くへ、果てしなく深い意識の底に向かって呼びかける。

我が 呼び掛けに 応えよ

言葉と共に、俺の一部がもぎ取られた感覚がある。

それを核として、光の粒が集まっていくのを幻視する。

視界が明滅し、俺は思わずたたらを踏んで後ろに下がった。

「グエエエエエエ！？」

何事かを感じ取ったか、樹下にいたサハギンたちが一斉にこちらを見上げた。

その視線の先で、光の粒が凝結してゆく。



大気を巻き込み、星からの光さえも引きずり込み、俺がドアノブ手に拉致されたときに見たような、黒い靄がその場に生じる。風が逆巻く。

靄と光の粒が互いを浸食するようにぶつかり合い、衝突した傍から質量を生み出していく。

光の粒の一つ一つが黒い靄に包み込まれ、細胞核の様相を呈す。何千何万、何億と折り重なるそれらが収束する様は、世界にナニかを産み落とそうとしているかのようだ。

夜がざわめく。

黒い靄と光の奔流は留まることを知らない。何処からともなく現れる光の粒がますます数を多くし、俺の視界を埋める。

黒い靄は輪郭を歪めながらも、退席を着実に増してゆく。瞬きも忘れて魅入る俺を他所に、ソレは形作られる。

目の前に現れようとするソレから、俺は一步下がった。

ピチャ。

「……………え？」

足元を見ると、踊り場の床がいつの間にか水に濡れていた。

発生源を探すと、黒い靄の生み出されているところから水が沸いている。

俺はしげしげそこを眺めようとして

ソレは、この世界に、顕現した。

ピチャ……………ピチャ……………

まず、足が見えた。

皮膚は暗い緑色で、足の指先に薄い膜が張られていた。

ピチャ……

ピチャ……

次に、艶やかな白い皮膚に覆われた腹部が見えた。

ピチャ……

さらに腕が見えた。伸びた鋭い爪と、足と同じく指の間に張られた膜が特徴的だった。

ピチャリ

立ち止まったソレと、俺は目を合わせる。

クチバシがあった。爬虫類というよりは、両生類を思わせる作りの顔立ちの中で、妙にくりつとした眼が俺を見ていた。

何より、頭の上に、皿が、載っていた。

それは俺を見ると、クチバシを開いた。

「おう！相撲取るうぜ！」

「カッパだコレ      ツ！？」

俺は痛みも忘れて叫んだ。

11話 そしてヤツは現れる。(後書き)

読んで下さりありがとうございます。

飲酒量と筆の速さが比例するので困っています。

## 12話 彼の名は。

「カッパだコレ                      ツ!？」

激しく動揺して、俺は異世界に来て一番のポリウムで叫んだ。

俺の呼びかけに応えて目の前に現れた異形の存在は、どう見ても日本で有名な空想上のあの種族だ。

頭部に載っている白くて丸い皿。

皿のと頭部の境目から生えている髪の毛らしき体毛。

カエルのごとき雰囲気醸し出している頭部に、まだらに斑点の浮かぶ緑色の皮膚。

くすんだ黄色がかかったクチバシに、まばらに並ぶ小さい歯。

手足の指の間には水かき。

身長は人間の小学生と同じくらいで、背には亀の甲羅を背負っている。

ソイツはゆっくりとクチバシを開け、やたら綺麗な発音で尋ねてくる。

声は男性と思しきものだった。

「                      あんた名前は何というんだい、召喚主」

「あ、天原冬弥といいます」

突然のことに、俺は素で答え返した。

「天原冬弥か、わかったぜ。俺は                      」

ソイツが名乗ろうとして一步前に踏み出してくる。  
うん。大丈夫、名乗られなくても分かってますって。

「カッパだあああああああ!？」

思わず二度目のツツコミを入れましたよええ!

だってコイツどっからどう見てもカッパですもん。

水辺に現れる水童。イタズラ好きで、時には悪さをするが、何故か憎めないチャーミングな彼ら。

キユウリが好物、相撲も大好きな緑色の有名人。

人かどうかはこのさい別として 我が国ニッポンで怪異として語り継がれ、馬やらの家畜を水底へと引きずり込んで尻子玉という実在しない臓器を分捕って殺すと言われている生物だ。

頭の皿には水が貯めこまれているとされ、それが溢れるとカッパは力を失い死んでしまうとされている。

その転んだら終わりのなハイリスクな弱点を持ったカッパさんは、ニッポンの国技たる相撲が大好きとのことだ。

カッパさん方は子供たちと相撲をとって遊ぶこともあるらしい。

小柄な体躯からは想像もできない怪力の持ち主で相手を振り回すらしいですが。

でもやっぱり相撲で負けると、負け方にもよるが倒れることになるので皿から水が溢れて大惨事。なにこの決死の相撲。

話は逸れたが、重要なのはどうしてカッパがこの場に現れたかだ。いやうん分かっているんです。俺が水精霊を喚ぼうとしたからなんです。

恐らくだが、水精霊を呼ぼうとして投下した【自問自答】による蓄積された知識の中の『爬虫類とかそういうモノの加護』だとか『水生生物の生態について』なんかが強く作用した結果、該当する精霊

として眼前のコイツが呼び出されたんだと思う。

それにしたってカップ。精霊呼びだそうとしたらカップで。理解しても納得するかは別モノですよ。

水精霊っていったら液体の体を持った裸の女神様とか、美しい系の精霊を想像するじゃないですか！

それがクリーチャーですよクリーチャー。世界の悪意を感じますよ俺は！

軽くパニックに陥っている俺を見て、カップは嬉しそうにクチバシを歪めた。

頬に当たる部分の皮膚が引き攣れてて滅茶苦茶不気味だ。

「おう！召喚主、よくボクのことを知っていたな！何を隠そうこのボクこそ、水の大精霊にしてSUMOUの信奉者、カップのラファエロだ！」

「嘘つけお前！君は精霊じゃなくて妖怪でしょうが！どっちかって言ったらモンスター寄りのクリーチャーの類だからね！？それに何だラファエロって！洋風か、洋風なのか！？そして一人称ボクなんだ！？」

「ボク、ミュータント・タート　ズが好きなんだ」

「亀忍者のほうかよ！つーか君この世界の住人じゃないですよね！俺と同じ世界のイキモノですよね？隠す気もないよね！？」

「自分を偽りたくはない！」

「じゃあ何で精霊だと言ったんだお前！」

ゼエゼエと息を切らして怒涛のツッコミを入れる。

なにこのカツパ、ツッコミどころが多すぎるんですが。

対してこのカツパ、小気味のいい会話に機嫌よさげにウキウキしてるのが丸分かりだ。

表情筋少なさそうな割に無駄に表情豊かなんですがこの妖怪。

「妖怪も精霊もあんまり変わらない、とラファエロは思ったのであった……」

「ナレーション風味に仕立て上げて騙くらかそうとしてるだろ！」

そこでカツパは一瞬口を動かすのをやめ、少し考えた後、輝く笑顔を伴って片手を挙げた。

「……おう！相撲取るうぜ！」

「最初に戻るな！騙すことすら諦めやがったな！」

「ドスコイ！ドスコイ！ドスコイ！」

「相撲だけに掛け声で押しきれれると思うなよ！？」

「ド・ドドスコイ・ド・ドドスコイ・ス・ットコドッコイ」

「呪文のつもりか！」

「おや？怪我をしてるな。これでは相撲が取れないじゃないか」

「さもいま気づきましたみたいない言い方してんじゃねえですよ！」



もうコイツに関しては妖怪に対する畏れの感情など微塵も感じられない。

実在するカツパ（自称）と手の届く距離にあっても、最早なんの感慨もない。いや特に妖怪に心入れはなかったんですが。それでも普通ならカツパを始めとするUMAと遭遇すれば恐れ慄くのが人間だと思います。

ラファエロと名乗るカツパはピチャピチャと水の滴る床を歩き、俺の側まで寄ってきた。

やたら朗らかな顔していやがるので大層気味は悪いが、害意はなさそうなので逃げたりはしなかった。

彼（？）はしげしげと俺の傷口を眺めると、ふうむと考え込む素振りを取った。

「かなり深くまでやられてるな……少々痛むが、動かないでくれ。治してあげよう」

「え、治療とか出来るの君」

「水の大精霊だと言っただろう。ボクに任せておけ」

この口ぶりだとラファエロは紛いなりにも治療系統の術が使えるらしい。

そもそもが治療を受けるために呼び出した精霊だったんだから出来なかつたら困るんですが、なにぶん見た目がカツパなので全然期待していなかった。

言動も果てしなく怪しかったし。

ラファエロは俺の怪我をしていない方の肩を掴んで固定した。

そして空いている左腕を頭上に挙げ、頭の皿に手のひらを乗せると、強く押し込んだ。

何が何だか分からずも、ラファエロにされるがままになっていた俺の目の前で、カコツという安っぽい音がして、皿が引っ込む。それと同期して、窄められたラファエロのクチバシから一条の水が勢い良く噴出し、俺の傷口に注がれた。その姿、さながら給湯ポットのごとし。

「って何ですかそのギミック！いてててててて！」

傷口を洗い流すように水を浴びせられ、染み渡る激痛が負傷箇所にかかる。

抉れた肉を裏返す勢いで水が叩き付けられてくるせいで、俺は思わず痛みから逃れようと身体をひねるが、ラファエロにしっかりと抑えられているため動けやしない。

ギヤアアやめてやめてと騒いでみるも、ラファエロは一向に水の勢いを弱めてはくれない。

そうして痛みに悶えていると、知識が流れこんでくる気配があった。

【自問自答】 起動。

>> 河童の癒し

四属性のうち水を司る河童

喚起のための構成式

河童の持つ 満ちた水によって対象の外傷を回復させる

: H \* l p ] w [ ] - ^ # · 8 9 a ……

一度、この知識の流入が【自問自答】によるものだと認識してしまつと、不思議と冷静にこの現象を理解できた。

この能力のプロセスとしては、まず俺自身に対する「外部からの能力行使」を始動キーとして活動を始め、身に起こっている変化を解析し、その能力の全容を把握できるというものだ。

いま解析している情報を見れば、名前や能力の由来こそ違えど、ウンディネの癒しと効果に然程の違いはない。

要するに、見てくれがどうあれ治療術式がしっかりと組み立てられているということだ。

現実には、痛みも徐々に小さくなっていき、俺の傷口が治癒していく。水を掛けられ始めてから10秒と経たずに、肩の怪我は痛みを感じないレベルまで回復した。

それを見届けて、ラファエロは水を吐くの止め、満足気に頷いて俺から離れた。

「こんなもんか。だが無理は禁物だ。オメーさんとの相撲は次の機会にお預けだな」

「あー……ありがとうございます?」

一応礼を伝えておく。一応なのは口から吐き出した水で治癒するとかいう状況が微妙に気持ち悪かったからです。生理的な意味で。

口から溢れてくる液体を浴びせられるとか、それが治療のためだと分かってても嫌なもんは嫌でした。

俺のそんな葛藤する姿を何と勘違いしたのか、ラファエロはいいんだいいんだ、と大げさに頷く。

「俺のことはいいんだ。怪我人とやっても仕方がない。それに、幸いにして相撲の相手は他にも沢山いるようだしな。退屈はしないぜ！」

ラファエロは樹下に群がるサハギン共の方を振り返る。

サハギンたちは先程からこちらを警戒しているようだった。

黒霧号に襲いかかっていた連中も動きを止め、こちらを見ている。

仲間の断末魔聞いた上、正体不明な生き物がいきなり現れればそりやそりですよね……。

「召喚主。ここで待ってるといい。ボクはちよいと彼らと相撲を取ってくる」

「え？」

俺が疑問符を浮かべた次の瞬間、ラファエロはその場から飛び降り、サハギンたちのど真ん中へと降り立っていた。

## 12話 彼の名は。(後書き)

読んで下さりありがとうございます。

カッパが出てきたせいでコメデイ展開から抜けられません。

情景描写とかそんなもんも投げ捨ててますが、次回からは元通りになる予定です。

13話 俺とボクとサカナ面、そして違和感と。

「はっけよい、のこったアー！」

「ギユエエエ！！」

掛け声と共にラファエロが一番近くにいたサハギンに向かって腰を落として挑みかかっていく。

その体勢はまんま力士のそれであったが、如何なる歩法によるものか、その速度は尋常なものではない。

残像すら残す勢いでサハギンに接近したラファエロは、

「ドスコーイ！」

一声のもと広げた手のひらを下から押し上げるようにして一直線に突き出す。

相撲でいう突っ張りだ。

ドム、とおよそ肉を撃った時に出るとは到底思えない音がしてサハギンが地面へと倒れ伏した。

倒れたサハギンに目もくれず、ラファエロは次の獲物へと向かっていく。

「ドスコオオオオイ！」

サハギンに対しやや横側から攻める形となったラファエロが、手のひらを広げたまま、ビンタのような格好で腕を振り抜く。

襲われたサハギンも慌てて身構えたが、遅かった。

今度はバチンと弾けるような音が響き、サハギンを横薙ぎに吹き飛ばした。

ズササと音を立てて転がっていくサハギンは、数メートルも地面と擦れてようやく止まった。

……なんですかあのカツパパワー。俺がサハギンの弱点突いて倒したのとは大違いじゃないですか……。

力押しでぬめる表皮なんて関係なくサハギンを叩き潰しているラファエロに、俺は馬鹿馬鹿しさにも似たやるせなさを感じた。

まあそれは置いておいて、サハギンの注目がラファエロに向いている今がチャンスだ。

俺は戦闘しているカツパと半魚人を尻目に、木を降り、黒霧号の元へと辿り着く。

……ひどい傷ではあるが、まだ息はある。俺が近づいたのが分かったのか、黒霧号は薄目を開け俺を見た。

ヒヒン。

弱々しく鳴く黒霧号の姿に、いたたまれなくなってきた俺は堪え切れずに黒霧号の頭を撫でる。

少しでも痛みが和らぐように。

そこでようやくサハギンたちも動き始めた。

仲間が2匹も瞬殺されたのを目の当たりにしたからだろう、サハギンたちが一斉に怒色に染まった。

「ギューウウウウウウウー!!!」

1匹が鳴き声を上げてラファエロに襲いかかったのを皮切りに、その場にいたサハギンたちがラファエロへと殺意をむき出しに向かっていく。

単独ではラファエロに勝てないと判断したためかどうかは分からない

いが。

いずれにせよ1匹1匹の体躯がさほど大きくもないサハギンでも、こうして群れが一気に動くと結構なモノである。何がって迫力が。瞬く間にサハギンたちにラファエロは取り囲まれた。サハギンたちは血に飢えたピラニアみたいな感じで絶え間なくラファエロへ飛び掛っていく。

そんなサハギンたちの一斉攻撃を前に、当のラファエロは非常に楽しそうな様子でニヤリと笑った。

「いいねいいねえ。燃える取り組みだ！」

そう言うやいなや足を広げたまま、ラファエロの身体が深く沈む。その状態で、ラファエロは襲いかかってくるサハギンの目の前で腕を伸ばし、両の手のひらを胸の前で打ち鳴らす。

「河童流決まり手がひとつ……『猫騙し』」

パーンとラファエロの手のひらが破裂音を生み出す。それを鼻先で食らったサハギンは白目を向いて崩れ落ちた。有るのかどうかいまいち不明だが、どうやら鼓膜に類する器官聴覚を音波で直接ぶん殴ったっぽい。

猫騙しを打ったラファエロは、残心のまま右腕を真横へと伸ばし、

「河童流決まり手がひとつ……『四股踏み』」

掛け声と共に上へとゆっくりと挙げていく。

同時に腕に合わせて右足も頭上へと伸ばされていき、ラファエロの上半身が左側へと傾いでいく。

洗練された足を持ち上げる動きは綺麗に半円を描き、最終的には広げられた両足が地面に対して垂直になるに至った。



その高く掲げられた右足を、ラファエロは勢い良く振り下ろす。

「ドスコオオオオオオオイ!!!」

唸りを上げてラファエロの右足が地面へと落とされる。

そこを起点として地面がたわんだ。

たわみは瞬きをする間に大きくなり、地面をひっくり返し、円状に広がる。

やがて耐え切れなくなった地面がめくれ上がり、勢いはそのままに土砂によって形成された津波となった。

「ギユウエエエ!!!?」

サハギンたちは突如として発生した土石流じみた土の壁から必死に逃れようと試みるが、如何せんラファエロを取り囲む格好だったのが災いした。

サハギンの走る速度よりも土の壁が迫る速度のほうが圧倒的に速い。

「ギユ……ギユエエ……」

哀れ。断末魔の悲鳴をあげながら、為す術も無くサハギンたちが土に飲まれていく。……飲まれていくのはいいんだけど、サハギンとはいえ可哀想過ぎるんですがこの光景。

単に上から土を被せられて埋められるのではなく、土砂の中で錐揉み状に回転してから埋まっていくのである。

ミキサーのようだと思ったが、ちょっとグロ要素入るのでそれ以上の想像を打ち切った。

「っておいおい、こっち来るじゃないですかああああ!!!」

土津波はラファエロを中心にして円状に発生している。

それがどういふ事かというのと、サハギンに襲われて倒れていた黒霧号、そして黒霧号を撫でていた俺にも等しく土津波は襲いかかるということだ。

前を見れば、今にもこちらまで土津波が辿り着こうとしている。

やばい。あの阿呆カップ、見境がねえ。サハギンを倒せても俺らがピンチじゃ意味ないじゃないですか！

逃げてもサハギンと同様に土津波に追いつかれて飲まれてしまうだろうし、かと言ってこのまま立ち尽くしていても末路は同じだ。

やばいやばいやばい、助けて【自問自答】さん！

Q・この場を切り抜ける手段をオー！！

A・疑問に対する回答を検索完了。

・水精霊ラファエロと契約したことにより、ラファエロを介して精霊術の使用が可能。下位詠唱であれば速度的にも問題ないと思われる。

つまりアレか、ラファエロに力を貸して貰えば……！！

だけど俺、あのカップパの能力なんていまいち分からんよ！

Q・そこんとどうすればいいの！

A・疑問に対する回答を検索完了。

・土石流に対し、正面から『四股踏み』を発動させることで相殺が可能。

ただし、詳細な情報は未入力のため完全な発動は不可能。

また、ラファエロが顕現済みのためラファエロからの発動では相殺不可。あくまで天原冬弥が能力を行使する必要がある。そのためラ

ファエロを通じての擬似行使となる。  
構成式は……

そこで【自問自答】がフル回転を始める。  
知識が折り重なる。蓄積された情報から現状の打破方法を導き出す。

・擬似行使に関しての知識を精霊術より解析。  
発動は理論上可能。擬似行使についての項目を作成する。

>> 精霊術・擬似行使

精霊術の知識によってクリエイトされた能力。  
契約精霊によつて発動されたスキルを、一時的に天原冬弥自身で発動できるようにコードを書き換える。  
構成式は……

俺は、この【自問自答】ファンタジーを、もう一段階理解した。

脳内に展開していく知識を掌握する。

『四股踏み』の技の一端を掴んだ確かな手応えを感じる。

いやまあ目の前の土津波をまともに喰らえば完全に覚えるんでしょ  
うが、あんな受け止めたら能力覚える以前にお陀仏ですって。

俺は迫りくる土津波に向かい、正面に構える。

そして【自問自答】によりもたらされる知識を行使してゆく。

精霊術、下位行使。そのいち。精霊への呼びかけ。

「ラファエロ」

ピン、と俺とラファエロの間に何かが繋がった。  
眼に見えないソレは精霊術師と精霊とを結ぶ呪力の糸だ。

《どうした召喚主。 しまった、『四股踏み』の攻撃範囲に巻き込まれたか！すまん！》

呪力によって結ばれたラファエロは、すぐに俺と黒霧号の置かれた状況を把握する。

精霊術、下位行使。そのに。キーワードスペルの詠唱。

「ラファエロ。『四股踏み』」

《しかし！》

《いいからやってください！》

ラファエロから飛んでくる戸惑いの声に精霊交信で応える。  
そりゃそうだ、ラファエロがこの状況で『四股踏み』を発動しても土津波がもう一波発生するだけだ 通常なら。  
そこで【自問自答】の弾きだした答えが擬似行使だ。

《急いで！》

《どうなっても知らないからな！ 『四股踏み』》

呪力の糸が繋がっている影響で、ラファエロが技を発動する感覚が直に伝わってくる。

やはり直接的に俺に『四股踏み』が当たっているわけではないので知識の流入は起こらない。

ここで【自問自答】の出番である。

Q・やっちゃってください！

A・『四股踏み』の発動を確認。呪力によるパスを通じてのリンクを確認。

擬似行使、起動。

瞬間、俺は自分自身の意志とは無関係に腰を低く落とし、右腕を真一文字に横へと伸ばす。

先程見ていたラファエロの『四股踏み』と寸分違わぬ動作だ。身体に何か熱いものが巡る。ドロドロと濃い液体が四肢に渡って駆け抜けていくようだ。

熱い、と漏らしそうになる口を閉じ、俺は土津波に視線をやる。どう考えてももう回避不能な位置まで土津波は迫っていた。

(やるしかないじゃないですかあああああ！)

逃げられないならやるしか無い、土津波ミキサーで惨たらしい最期を迎えるなんてまっぴらゴメンだ！

ヤケクソ気味に俺は右腕と右足を天高く上げていく。

ギシ、ギシと体が悲鳴を上げる。

あつたりまえですよ！力士の四股踏みみたいな動作を一般人がしたらヤベーですもん！

「どおおおらああああああああ！！！」

雄叫びを上げ、右足を一気に振り下ろす。

ズドム！

俺と黒霧号を中心にして円状に地面が歪んだ。  
そしてそれはラファエロの見せたもののように地面を巻き上げる土  
津波となった。

だが、俺が産み出した土津波の方が随分規模が小さい。  
俺の正面で土津波同士がぶつかり合う。

刹那、せめぎ合った土津波だが、ラファエロの土津波の勢いに押し  
負けて再び此方へと向かってくる。

勢いはやや弱まった程度である。

後ろからはラファエロが第2波を打ち出したのが見える。

このままであれば絶体絶命に変わりはない。

だからこそ。

「まだまだあああああああ！！！」

俺は今度は左足を振り上げ、一気に落とす。

ズドム！

再び土津波が発生する。それを待たずに、俺は両足を交互に何度も  
何度も振り上げては落とす。

ズドム！ズドム！ズドム！ズドム！

知らず掛け声を俺は発する。

「どすこい！どすこい！どすこい！どすこい！どすこい！」

いや相撲と言えば確かにこれなんですよね。

地面が連続して隆起する。その波は一波では小さいが、何度も生み  
出された土津波同士が重なりあい、規模を増して行く。

A . 擬似行使、終了。

数回『四股踏み』を連続で発動したところで、【自問自答】が擬似行使の使用をやめた。

やがて土津波同士が激しく衝突し、今度は俺の土津波が第一波を飲み込んだ。

俺の土津波は若干弱ったが、それでいい。

そこにラファエロの第2波が押し寄せてきて 計ったように完全に相殺して、土津波は動くのを止めた。

俺は極度の緊張から解放され、その場に尻餅を付いた。

「た、助かった……」

安堵感に身を包まれ、全身を疲労が襲ってくる。

地べたに座りながらも辺りを見回せば、サハギンの群れが1匹残らず生き埋めになっていた。

生き残ったサハギンもどうやらないようだ。

黒霧号は血を流しつつ倒れているものの、土津波からは守り切るこ  
とが出来た。

ほっと息をつく。

ともあれ。危機的状況は切り抜けた。

カップによって死ぬような目には遭ったものの、助かったのも確かだ。

っていうかラファエロ。水精霊の筈なのにちっとも水使ってない……。

あのカップ、水属性じゃなくて相撲属性のほうがしっくり来てるんじゃないでしょうか。

ラファエロは立ち向かってくるサハギンが居なくなり、俺達の無事を確認すると、なんかこう、得も言われぬ珍妙なポーズを取った。拳を前に突き出し、中腰で両足を大きく開く謎のポーズ。そして何かキメ顔ちっくな感じで顔を歪め、

「カワバンガ！いい夢見るよ！」

キメ台詞っぽいことを叫んだ。

その後、何々大笑し始めたカップパを見て、俺はハアと疲れ切った溜息を吐いた。

どうでもいいですが、それはミケランジェロの台詞です。

「黒霧号……なんて酷い……」

「大丈夫だ、この程度ボクにかかればすぐに治せる」

黒霧号はだいぶ酷い傷を負ってはいたが、命に別状は無さそうだった。

カコカコと皿を押しこんで水を放出するラファエロ。

水を掛けられた部分から、どんどん傷口の癒着が始まっていく。

シユールな光景だ。

さっきも一度ツツコミは入れたが、何なんでしょうこの意味の分からない仕掛け。

カップパの生態マジ謎。



だいたいの治療を終えたところで、ラファエロがカコカコするのをやめた。

「まっ、これで平気だろう。一晩ゆっくり休めば体力も回復するはずさ」

「あー……良かったな黒霧号」

なでりなでり。黒霧号のたてがみを指で梳くように撫でてやる。

気持よさそうにヒヒンと一鳴きした黒霧号は、確かにもう心配なさそうだ。

「今日はいい相撲が取れた。ボクは帰るが、また良い取り組みがあつたら喚んで欲しい」

ラファエロが手をこちらに差し出してくる。

なんだこれ、握手求められてますか俺。

無駄に尖った爪とか水かきとかがちよつと怖いんですが。

けれど握手を断るのも失礼なので、恐る恐るラファエロの手を取る。

力強いぬめつとした感覚に手のひらが包まれる。

体温も低いようで、俺の背中にぶるりと震えが走った。

ザ・未知との遭遇、達成……！

「こちらこそ助かったよ、ってちよつと待て、帰れるんですか君」

そこで俺はラファエロの台詞に気になる部分があつたことに気が付いた。

ボクは帰るが、ですと……？



取り残された俺はぽつねんと夜の空のもと、立ち尽くすばかり。

ここで俺は大きな疑問にぶち当たったわけですよ。

この旅路は俺が帰る手段を見つげるためにカナさんに会いに行くためのものだったんですが。

え、なに。そんなことしなくても、俺って帰れるの？

異世界二日目の夜。

俺は初めてモンスターと戦闘して、初めてカップと遭遇し、初めて自分の置かれている状況の不自然さに気付くことになったのです。

13話 俺とボクとサカナ面、そして違和感と。(後書き)

読んで下さりありがとうございます。

主人公がようやく能力つばい何かを思い切り発動しました。

ただ、あくまで自衛とかのために受動的に戦闘に挑んだ程度ではありませんが。

カツパが意外にも好評で、

なんなんでしょう、この気持ち……。カツパタグでも入れておけばいいでしょうか。

次回もよろしくお願いします。

14話 おはようございます、疑念さん。

「……起き……じゃ」

誰かが俺をユサユサと揺さぶっている。

ついでに頬を軽く叩かれている。

つられて意識が眠りの底から徐々に浮上していくが、瞼は相変わらず重い。

意識も未だ微睡みの中である。

「起きるのじゃ、トーヤ！」

声と共に、頬を叩く力がやや強くなる。

「うーん……あと10分寝かせて……」

モニヨモニヨと口を動かす。

この心地良い睡眠時間をもう少し味わっていたい。

ベタな台詞って意外と素直に出てくるもんですね。

そんなことをぼんやりと考えながら俺の意識は再び眠りに落ちていこうとする。

「寝言をほざいておらんで、いい加減目を覚さんか！」

誰ぞの怒声が浴びせられ、パシーンと軽快な音を立てて、俺の頬が叩かれ いや、平手打ちされた。

「アウチ!？」

意識が一気に覚醒する。なんか妙に外人じみた悲鳴が漏れた。痛みに驚き眼を開くと、至近距離から俺を睨みつけていた金髪紅目の少女と目が合った。その整った美貌を直視して、まだうつすらと残っていた眠気が拡散する。

「ようやっと起きおったか」

「あー……おはよう、シア」

俺が目を覚ましたのを確認した少女　シアはフンと鼻を鳴らして此方から離れた。見れば日は既に昇り、辺りは明るい。

草木が朝露に濡れ、しっとりとしたところから見るに時刻は早朝といったところだろうか。

俺はもたれかけていた身をゆっくりと起こす。背に感じていた温もりが離れていく。

あれ、なんだっけこの温かいの？と思い背後を振り返ると、そこには黒霧号が地べたに座り込んでいる姿があった。

ああ、そういえば昨日の夜は結局、ログハウスに入れなくて黒霧号にもたれて寝たんだったと思いついた。

思いの外、黒霧号の毛艶が気持ちよくてすっかり熟睡してしまった。冷たい夜風から逃れるように黒霧号に引っ付いて寝たのも熟睡できた要因のひとつだろう。

ありがと黒霧号、と声を掛けると、己が呼ばれたのを理解したらしい黒霧号が首を伸ばして鼻先を擦りつけてきた。

仕草がまんまじゃれつくペットみたいで可愛いとか考えていると、

「トーヤ、……昨晚、何があったんじゃ？」

シアが戸惑い全開で尋ねてきた。

「何がって、……ああ」

一瞬なんのことが本気で分からなかった俺だが、シアの視線を追ってみれば彼女が何を聞きたいのかは一目瞭然であった。

「こいつは酷い」

昨日は夜だから余り気にしなかったが、俺が寝ていた周囲の地面は無残にもめくれ上がり、明らかに尋常ではない様相を挺している。さらには、そこら中にサハギンの死骸がゴロゴロと転がっており、地面の荒れようと合わせて凄惨の一言に尽きる。

っていうかよくこんな状況でしっかり寝れましたね俺。日の下で見ると吐き気もおおしかなない光景なんです。

昨日の晩は何か変に高揚してたのと、ラファエロが帰る間際に言っていた言葉によって生じた疑問のせいでそれどころではなかったはいえ、俺は結構動揺していたらしい。

普段ならこんな場所で一夜過ごそうなんて思いもしないでしょうし。意識してしまうと妙に生臭い匂いもしてくる。これはきっとサハギンから漂ってくるサカナ臭さだろう。

シアが顔を顰めているのは間違いなくこの異臭のせいだ。

「昨日の晩、寝てたら襲われてさ」

カップを召喚して撃退したよ、と続けようとして俺は思いとどまった。

これを説明しようと思うと、俺の【自問自答】という能力についても話すことになる。

昨日までの俺であれば特に何も考えずシアに【自問自答】のことを

話し、これが何なのかと尋ねてもいた。

だが、今は少々事情が異なる。

俺と同じように日本から呼ばれてきた（と、思っんですよねあの力ツパ。相撲とかター ルズとか言っただので疑問を挟み込む余地が無い気がします）ラファエロが、サハギンを撃退後に何事もなく帰っただけの様子を見るに、召喚された者は本来であればすぐに帰れるのではないかという疑問が生じている。

では、それをシアが説明すらないのは何故かというところに俺は行き着いたのだ。

シアが俺を返そうとしてくれるのは本当なのか？

そもそも、シアを信用していいのか？

そういえば彼女、俺がこちらの世界に来たとき下僕とか何とか言っただし、加えて俺を焼き殺そうとかしてだし、思い返せば思い返すほど信用度の度合いは下がってゆく。

完全に疑うところまではいかないにせよ、僅かばかりの疑念を抱いているのは確かだ。

ここで【自問自答】のことまで知られてしまっただけは、シアが良からぬことを企てていたとき対抗する手段が無くなってしまっただけ。

迂闊に手の内を晒す真似は避けるべきだと思っただけ。【自問自答】のことを訊くのはこの疑念を晴らしてからでも遅くない。

とはいえ襲われた俺がどうやって助かったかを伝えることにはシアの質問には答えられないだろう。

ひとまず真相をぼやかして伝えかなあ、などと考えていると、シアが静かに俺の手を取った。

「へ？な、なに？」

間抜けな声を漏らす俺に構わず、シアは手から始まって腕、肩と俺の体をぺたぺたと触って行く。



突然のことにされるがままにシアに触れられていく。その手つきは慎重で、労るような触れ方だった。

……すつごくこそばゆいんですけど。あとシアの顔が近い。真顔ですよ真顔。何やってんのかと訊ける表情じゃないですってこれ！美少女に触れられるとかどどういう状況なんですかこれ！あつそこはダメ、くすぐりたい……！

変な声が喉元まで出かかったのを辛うじて堪える。

「……うむ、大事なさそうじゃの」

ひと通り触り終えたのか、シアが安堵したように溜息を漏らした。そして改めて周囲へと目をやり、近場に転がっていたサハギンを見ると再び表情を曇らせた。

「こいつらはサハギンじゃの……よもやこんな所に出没するとは思わなんだ。あちらの湖から来たんじゃないやろ。いや、そうではなくてだの」

そこでシアは一端言葉を切り、言い難そうにしながらも心底申し訳なさそうに頭を下げた。

「……すまぬ。トーヤを放り出したばかりに危険な目に合わせてしまった。見たところ怪我は無いようじゃが、その……大丈夫じゃったか？」

「え、と」

「私が迂闊じゃった。街道は安全だと思っていたとはいえ寝所に忍び込んだ程度で、モンスターが出現するかもしれない野外へ放置するなど……本当にすまなかった。トーヤが無事だったのは本当に良

かったが、それは結果論じやろ。私は一時の怒りでおぬしを危険に晒した。謝っても謝りきれぬ……」

シアは俺に本気で頭を下げていた。

言葉の節々に申し訳なさが込められているのが分かる。

そんな謝罪を受けて、俺は戸惑った。

どうやら俺の体を触っていたのは怪我がないか確かめるためだったらしい。

「トーヤが私の寝込みを襲おうとする理性皆無の馬鹿者だったとしても、魔術の発動の片鱗も見せぬ愚鈍だとしても、言動がときどき気違いじみている変態だったとしても、本当にすまんかった……」

「オイコラ謝りたいのか悪口言いたいのかどっちなんですか！」

「本当にすまんかったのじゃ、変態」

「謝る気ないよねシア!？」

とはいえ俺自身、シアに家を追い出されたことに対して特に何も思うところはなかった。

だって自業自得なんですもん……。女の子なら寝顔を見られるのは良い気持ちがないだろうし。

たとえ俺が紳士だったとしても！紳士だったとしてもだ！繰り返します、紳士だったとしてもです！

そもそもがサハギンに襲われたときは、その後に出現したカップパに色々意識もがれすぎてそこまで考えが至らなかったし。

「……トーヤの気が収まらぬのなら、私を殴ってくれて良いのじゃ」

さあ、とシアがぎゅっと目をつぶって顔の前に出してくる。え、なんですかこれ……。

「いやあの、シア？」

声をかけてもシアは頑なに目を閉じたまま動かない。

形の良い唇も何かを待ち構えるように嚙まれているし、体も強ばっている。

その割に手足はプルプルと震えているし、顔色も緊張に紅潮している。

「……………」

「……………」

殴れ、と？

いやいやちよつと待ってください。突然、自分を殴れと言われても困りますって！

身体の小ささも相まって小リスみたいに震えてる女の子に暴力振るえってのは無理な話ですよ！

そんな覚悟完了ってな感じに頬を差し出されてもどうしようと。

シアのせいで死にかけたのは、まあ間違いないけど。ここで殴りかるのは中々に難易度高いですよ。というか難易度高いとかそういう次元の話では無い気がする。

責任感がそうさせているのかもしれないが、この異世界には自身がミスったら相手に殴らせる習慣でもあるんでしょうか。それどこの蛮族。

「私は」

いつまで経っても飛んでこない俺からの制裁パンチ（飛ばす予定は今のところなし）に痺れを切らしたのか、シアが目を閉じたまま話しかけてくる。

「おぬしを元の世界に返せず死なせてしまつところじゃった。これは私自身への罰じゃし、戒めじゃ」

だから構わずやらんかとシアは言った。

「……………」

昨日の道中で抱いた疑念がまた首をもたげる。

シアは、どうしてここまでして俺を元の世界に返そうとしてくれるのだろう……？

昨日は結局、訊けなかった。

けど、今なら何となくシアは答えてくれる気がする。

弱みに付け込むようで少し気が引けるが、ここを逃せば俺は悶々と続けるだろう。

それに、だ。

こうして真摯に謝ってくれるシアを疑い、隠し事をしようとすることが本当に正しいのか？

「なあ、シア。どうして君は、そんなにも真剣に俺のことを元の世界に返そうとしてくれるんだ？」

だから俺は尋ねた。この胸のモヤモヤを絶ち切るために。

14話 おはようございます、疑念さん。(後書き)

読んで下さりありがとうございます。

ストーリーが進展しない……！

次回で色々綺麗になる予定です。なお、投稿予定は10日の0時を目標としております。

更新できなかつたらごめんなさい……。

そしてそろそろチュートリアル的な連れ去られて異世界編が終わりになり、新章に突入していきます。

今後とも宜しくお願いします。

## 15話 安心と信頼の拉致犯。

「なあ、シア。どうして君は、そんなにも真剣に俺のことを元の世界に返そうとしてくれるんだ？」

未だに目を瞑り続けるシアに、俺は続ける。

「俺には分からないよ。確かに君は俺をこっちの世界に引きずり込んださ。けど、返すまで面倒を見る必要は無いはずだよね」

シアの表情は変わらない。けれど、俺の話をきちんと聞いてくれていたのは分かった。

俺に殴れと言ったときのまま、じっと俺の言葉を待っている。

途中で口を挟んでこないシアに俺は感謝した。彼女は二日間という短い時間ではあるが、俺の質問にはきちんと答えてくれていた。

なら、と俺は思う。今回のこの質問にだって、彼女はしっかり応えてくれるだろう。そこまで思い至り、俺は疑問を投げかけつつもシアに抱いている自分自身の感情に気が付いた。

俺はきつと、シアを信頼していたのだ。

異世界拉致の犯人でもある彼女を信頼したいなんて、本来であれば逆に恨んでも良いような相手であるのにも関わらずだ。

きつとそれは、シアには世話になっていいると思っっている部分があるからだろうし、少なくともシアが俺を蔑ろにすることがなかったためだろう。

シアがそうしてくれていたらこそ俺は異世界なんて突拍子も無いところに連れてこられても平常通りの精神状態でいられる。冗談だつて言えている。

シアが俺を気遣ってくれていたから、なのだ。

この胸のモヤモヤとした気持ちは、シアに対して疑念を覚えたことに対する苛立ち。それを払拭したいという気持ちの現われだと思う。だから、シアから受けた気遣いに応える為、少しだけ、彼女に手の内を明かそうと思った。

「俺、精霊を召喚したんだ。そいつは多分、俺と同じ世界の生き物だった。そいつにサハギンを退治してもらったよ」

そこで初めて、シアが眉根を寄せた。

俺が精霊を召喚した。そして今、その精霊は此処にいない。これが何を意味するのか悟ったのだろう。

「そいつはサハギンを退治したら 帰っていったよ。こう、消える感じでね」

すう、と息を小さく吸い込む。

次の質問が、その答えが、俺の状況を説明することになる。

「俺はなんで、そいつと同じように帰れないの？」

俺とラファエロには種族という大きな違いこそあれど、出身世界は同じなのだ。

実はこの辺りの知識は、昨晚眠りに付く前に【自問自答】より引きずりだしてある。

ストックされている知識を解析してみても、実質的に俺とラファエロは『精霊として召喚された者』という同じ立場でしかないことが

判明している。

なら俺もラファエロと同じく、元の世界に帰れてもおかしくはないんじゃないだろうか？

……まあ、【自問自答】に蓄積されている精霊術の知識は完全なものではないので、勿論綻びはあるんだろうけど。

【自問自答】はあくまでも俺自身が経験した情報を統括する能力で、そこからの知識の応用も限られた範囲でしか答えを導き出せないのだ。

俺はシアの答えを待つ。

質問が終わったのを察したシアが、ゆっくりと瞼を開いていく。視線は揺れず、まっすぐに俺を見ている。そこにはこちらを誤魔化そうとする気配は微塵もなかった。

ただ、諦めにも似た表情を隠しもしていなかったが。

「質問された順番とは異なるが……まずはトーヤが帰れない理由じやがの」

言いつつ、彼女は胸元に手を伸ばした。

そこには『血の石』がぶら下がっており、シアは朝日に煌くそれを手のひらで転がす。

「トーヤを喚んだのは確かに私じゃ。じゃが、そのときに血の石が媒体となってしまったの。血の石とおぬしの間にはパスが複雑に絡み合ったところに私との契約が上書きされた形となっておるのじゃ」

……………。  
理解が出来ないですよ……！ここまでシリアスで来といてからに、

「分かりやすく3行で頼む」とか言えた空気じゃないでしょう……。



「簡単に言うんじゃな、血の石がトーヤとこの世界を結びつけておるのじゃよ。そのためにおぬしは元の世界に帰れなくなっておるのじゃ」

気まずさに百面相を始めた俺を、気の毒に思ったらしいシアが簡単に説明してくれた。

「えっと……だったらその石を壊せば俺は帰れるのかな？」

「そもいかんのじゃよ。おぬしの言うとおり、本来であれば媒体を破壊すれば結びつきはなくなるのじゃがのう。しかし、血の石を壊すわけにはいかんのじゃ。これはカナの作品であるし、何より

カナが元の世界に戻るために使っている魔道具なのじゃ」

「……は？それは、どういう」

「言ったままの意味じゃ。血の石が無くなればカナが元の世界に帰れなくなってしまうのじゃ」

「なん……だと……」

思わずテンプレ驚き台詞が口を衝いて出た。

まじまじとシアの手元で転がされる赤い宝石を見る。

このやたら高そうな宝石が元の世界に戻るための重要なアイテムで、すと言われても、いまいちピンとこない。

なにせ見た目は基本的に普通の宝石だ。

元の世界に戻るために必要なモノって、てっきり神殿とか、その奥の部屋とかにある魔方陣が敷き詰められた怪しげな部屋とか、そういった大規模な装置かと想像していた。ゲームや漫画だとそんな感

じが一般的だったから、ついそつち方面へイメージーションが爆走してました。

ササキの森とかいう場所へ向かうのも、そこに聖域じみた神秘的な場所があつて、そこで世界を渡る術を……などと考えていた。

まあ元の世界の常識に当てはめて考えるのが間違いなんでしょうが。

「私がトーヤを喚び出せてしまつたのも血の石の影響じゃろう。恐らくじゃが、私は血の石を通してトーヤの気配を掴んだのじゃろう。で、そのままおぬしを此方に引きずり込んだ際に、私との間に精霊契約が確立して、トーヤはこちらの世界に縛り付けられた。これが事の顛末じゃろうなあ……」

「じゃあ、カナさんのトコに向かつてるのって……」

「血の石は壊すわけにはいかぬが、これはそもそもが世界を渡るための道具じゃ。ならば製作者であるカナなら上手いことおぬしを元の世界に返せるかも知れんじゃろう？」

どのみちコレ無しにはカナも帰れんことじゃし、とシアは嘆息した。

「その血の石って、スピアあつたりしないの……？」

シアの口ぶりからしてなんとなく返答は予想できたが、一応訊いてみる。

「ないのう。血の石は様々な偶然が重なって創りだされたと聞いておる。もし壊れれば二度と作れなくなるじゃろう、ともな」

そんなことだと思つたよ！

むしろそんな大事なもん盗賊とかに易々と盗まれていいんですか

カナさん！

落ち着け俺。……話をまとめてみよう。

俺が帰れない理由。血の石が俺をこの世界に定着させているから。血の石を壊せない理由。これが壊せば俺は帰れるかも知れないが、変わりにカナさんが元の世界に帰れなくなるから。

両方を解決する手段。製作者のカナさんに方法がないか伺うしかない。

OH……実に他力本願……！

しかしながら確かに考えられる問題解決方法としては最も確実に無難だ。

これ以上の良策は無さそうに思う。ていうか俺よりも状況をしっかりと把握しているだろうシアが導き出したこの解決方法より良いものを俺が思いつくわけがない。

「事故のような召喚じゃったんじゃ、本当にすまん……」

改めて、ペこりとシアが俺に頭を下げた。

こうして美少女に何度も謝罪させてるのって妙な背徳感……否、罪悪感が刺激されるよなあ。

兎にも角にも疑問の一つが氷解した。別にシアは俺を返す気がなかったわけではないと分かって、胸のつかえが取れた気分だ。あとはもう片方の疑問が残るのみだ。

「おーけーおーけー……よく分かったよ、理解した……」

「桶？なんじゃ、水でも汲みに行きたいのか」

「桶じゃないよ！オーケーってのは了解って意味なんだ」

「カナから聞いたことがある。知っておったよ」

「なら何故ボケた!」

「そろそろトーヤが知恵熱出す頃かと思つての。息抜きにと」

「俺、どんだけ馬鹿だと思われてるの!？」

「私がおぬしを元の世界に返そうとする理由じゃが」

「あつれ無視されてる?無視されてますか俺?」

気を取り直してシアを見据える。シアにはもう気後れする様子はない。か。

シアの方も言い難かつたことを言ってしまったようで、先程までの重い口調はもう無い。

あれ?この様子から見ると、もう一つの質問って、シアに取ってそれほど重要でもなかつたのだろうか。

シアは胸を張って宣言する。

「私は王族じゃ。自分が引き起こした事の責任すら取れずに何が王族か。自らの誇りと血に誓つて、トーヤを元の世界に返してやるから!」

「……ははっ」

その理由を聞いて、思わず笑い声が漏れる。

何ですかその自分中心の理由。別に俺をどうしようと思つてたわけじゃなくて……。

ああ、最ッ高に分かりやすく、単純な理由じゃないか！

こんなことでシアに疑いを持ってしまった俺が馬鹿みたいじゃないか！

俺は王族っていうものがどんなものなのかは想像以外では知りようもないけど、それでも彼女らが『自らの誇りと血に誓って』というのは軽い言葉ではないくらいは分かるつもりだ。

シアが俺を見捨てることをしなかったのは、自らのプライドがそれを許さなかったからなのだ。

誰だよシアを信用していいものかとか考えたのは。

シアが疑わしいか思ったのは、単純に俺自身がシアをよく見ていなかったからじゃないか！

美貌にばかり目がいつて、内面に目が向いていなかった阿呆がここにいる。

ここが異世界でも、人を信用することには何ら元の世界と変りないというのに。

異世界だ異世界だと変に緊張して疑心暗鬼に捕らわれかけていたんだ。

結局、全部が全部、俺自身の一人相撲だったということだ。相撲好きなあのカツパがこの場にいたら、つまらない取り組みだったと愚痴をこぼしそうな滑稽さだ。

「あははははっ、なんだよもう、バツカじゃねえの俺……！」

「お、おい？どうしたのじゃトーヤ？」

突然笑い出した俺をオロオロと見つめながら、シアが声をかけてくる。

やだもう、動作ひとつひとつがすっげー萌えるなあこいつ。

これで乳があつたら……いや内面見るべきだとほんの一瞬前に思った筈なんです、やっぱり美少女は外見も大事です。

それに、と思う。

シアには裏表があまりない。思い返せばシアの表情で機嫌が読み取れなかったことはほとんどなかったし、思ったことがすぐに顔に出るタイプだった。

そんな彼女が俺をどうこうする？考えるだに馬鹿馬鹿しい。どうして俺はこんなことで悶々としていたのか。

目の前で俺にどう声を掛けたものかと困惑している彼女は、俺を何かに利用しようとする異世界人でもなければ、魔族と聞いて想像する悪逆非道のモンスターでもない。シアという一人の美少女だ。

疑問なんて紐解いてみれば至極くだらないものだった。

そんなら。

胸にわだかまっていた気持ちの悪い思いなんて、笑い飛ばしてなんぼだろう！

「ははははっ……いや、うん、ごめん。自分の馬鹿さ加減が笑えてきてね」

「そ、そうなのか……」

シアが何か哀れな生き物を見る視線を送ってくる。

ああ、此方の世界に来てから何度か味わった視線だが、やっぱりシアは自分の感情を隠そうなんてしていない。

よし、だったら俺だってシアに隠し事はナシだ。信用しよう。そして話そう。

「シア、ごめん。君を疑ってた」

「ぬ？」

「俺、異世界になんて連れてこられて動揺してたっばい。シアのことも美少女とかナイチチとしてしか見てなかった。んで、自分が分からないことがあったから、それすら君のせいにして疑いかけてた。謝るのは俺の方だよ」

俺は立ち上がり、腰から折って深く頭を下げた。

この頭は、シアから許して貰えるまで上げるまい。シアにしてみれば謝っていた相手が逆に謝ってきているのだから、意味不明だろうが関係ない。

これは俺のケジメなんだ！

「や、やめるのじゃ！なぜトーヤが謝るんじゃ。元はといえば私がおぬしを喚んだから」

「それでもだよ。俺は君に対してあまりに不義理だった」

「いいから頭を上げんか！」

「俺の気がおさまらない！」

「じゃから悪いのは」

「いやいや、シアを疑った俺が」

互いに謝ろうとする俺たちの言葉はいまいち噛み合わない。埒があかないなとは思うが、どうにも止めどころが見つからないので非常に困る。

「……なあ、不毛じゃと思わんか」

「……だね。お相手ってことにしようか」

「トーヤがそれで良いのなら」

「うん、まったく問題ないよ!」

じゃあ、と俺は手を差し出す。

「和解の握手で締めにしようぜ!」

シアは俺の手を見、ニヤリと笑うとガシッと手を握ってくる。

「これで良いかの?」

「おう!」

ああ、シアの手のひらのぷにぷにとした柔らかい質感がたまらない。朝の空気に晒され、少し冷えている細い指が俺の手を包む感覚。逃すまいと俺は力を強めてニギニギした。美少女の手を掴んでいるんだからニギニギせざるを得ないでしょう。肌は極上の弾力を保ち、瑞々しい潤いを

「……トーヤ、嫌らしいことを考えておらぬか」

「いえ!まったく!全然!」

白々しいことこの上ない。

けれど、そんな白々しい応酬を気兼ねなく出来ることが、なんだかとても嬉しかった。



「自分の身体に影響を与えたモノを、解析して知識とする能力……  
【自問自答】、のう……」

「【自問自答】ってのは俺が付けた名前だけだね」

その後、仲良く（俺主観）朝食を取った俺達は、昨日に引き続きササキの森への旅路を往きつつ【自問自答】について話し合っていた。ちなみに黒霧号も元気にパツカパツカ荷物を背負って歩いています。良かった良かった。

疑念が無くなったからにはシアに相談することに躊躇いはなく、俺は昨夜の出来事や身についていた【自問自答】のことを彼女に打ち明けていた。

最初は半信半疑だったシアだが、俺の話を知っているうちに出鱈目を言っていないと分かり、今は信じられないといった表情をしつつも熱心に【自問自答】のことを考えてくれていた。

尤も、信じてくれるようになる課程で、話だけでは到底分かってもらえなかったため、

「  
『シャイン・アロー  
光の矢』！』」

『うおーッ！？そんな真面目に当てようとしなくても良いって！肌

をかすめる感じで十分だから！死んじやいますから！」

>> 魔術・光の矢  
シャイン・アロー

魔力により矢を形成し、対象に向かって射撃を行う。

構成式は……

といった感じでシャイン・アローを覚えるという実演的一幕もあったが。

魔力によって矢を生み出して放つというまんまファンタジーなことが出来たのにちよつと感動したのは秘密です。

シアにしてみればシャイン・アローより簡単なはずの『輝き』シャインを使える様子もなかった俺が、すつとばしてシャイン・アローを行使出来るようになったのが驚きだったらしい。

何でも魔術構成式がウンタラカンタラ。説明されても右から左へ抜けていきました。要するにシャインが出来ないのにシャイン・アローが使えるのは有り得ないと言いたかったらしいです。

「【自問自答】のう……。異質……。いや、異常と言い換えても良かったが……」

「やっぱりこれって特殊なのかな」

「特殊どころか類似する能力すら見当もつかぬわ。トーヤが思っておるよりずっと、【自問自答】は異常な能力じゃぞ。この世界には魔術が溢れており、奇跡じみた所業も確かに存在する」

しかしの、とシアは難しい顔をする。

「それでも、魔術によって引き起こされるのは、その魔術がそういうモノとして構成されているからに過ぎぬのじゃ。当然、そういった魔術は使える者が限られてくる。常人には扱えぬ難度の高い魔術であればこそ、奇跡じみたなどと言われるのじゃからな。それすら一瞬にして解析し、行使できるとするならば異常という他あるまいよ」

「そりゃあ、そうなんだろうなあ……。どんな魔術とかその他諸々まで【自問自答】が解析してくれるかはいまいち分からないけど、今んとこ何でもありな感じで解析してるしなあ」

「魔術だけでなく、その他諸々まで解析しているというのが最も異常な部分なのじゃ。おぬしが精霊術を使えるのも【自問自答】によるものなのじゃろう？」

「だねー。サラマンドラ氏に話しかけられたときに色々覚えたから」

「昨日話したがの。精霊術は生まれ持った才能によって使えるものとそうでないものが明確に分かれるのじゃ。つまり、【自問自答】はそんな常識すら覆す能力ということになる」

それを人はなんと呼ぶか？

正真正銘の奇跡、じゃよ。

「うっわあ……」

奇跡とか言われましても……。

そんな大仰なモノだとは思っても見なかったので、実に反応に困る。手放してヒヤハア！チート能力だァー！とか騒ぐべきでしょうか。いやまあ何やら俯き気味で神妙な顔をしてるシアに殴り倒されそう

なのでやめておこう、うん。

「……………クク……………」

シアが小さく笑い声を漏らした。

……………神妙な、顔？

神妙なつて形容される表情つて、そんなに周りから見ても不安になるような顔だったでしょうか。

俯いているから表情ははっきり確認出来ないんですが、横顔見るだけでなんか凄く欲望ダダ漏れですよこの人。

こういう顔、なんかどっかで見たことあるような気がするんですが。

「……………これは面白くなりそうじゃ……………！」

たぶん、独り言なんでしょうがしっかり聞こえました。

そうだ、この顔　時代劇で良く見かける悪代官の顔だ……………！

おいちよつと待って、せっかく疑惑っぽいのが無くなったと思った矢先にそれですか！マジやめて！人間不信になっちゃうじゃないですか！

シアがガバリと勢い良く顔を上げた。

すっげえいい笑顔です、本当にありがとうございました。

「トーヤ！」

「は、ハイ!？」

俺の返事に、シアは増々笑みを強めた。  
無性に嫌な予感がするんですがこれ。笑顔は笑顔だけでも方向性が  
純粋なソレじゃないですし。

「目的地を変更じゃ！まずはドミトリスの王城に寄って行くぞ！」

「……は？」

ガッ！

首根っこを引っつかまれる。

「え、シアさん、なんですかこれ」

「善は急げじゃ」

そのままシアは俺を掴んで歩き出す。  
シアは俺より身長が低い。自然と服が締め付けられ、喉が圧迫され  
て、

「づぐっ、づいづいづいづい！首、くびっ！」

首に絡んだ衣服で呼吸困難になります。  
必死にタップしてもシアは意に介した素振りもない。ああ！タップ  
ってこつちの世界じゃ通用しない文化ですか！異世界このやろっ！  
しかも何ですかこの馬鹿力！その細腕のどこからこんなゴリラパワ  
ー湧いてきてるんですか！

「クハハハハハ！楽しみじゃ、楽しみじゃのうー！」

「ウユユユユユユユユ」

こうして俺はドミトリスの王都、リュグノーへと向かうことになったのだった。

なお、俺の意志とかそんなもんは考慮されませんでした。

すこぶるいい天気の中、俺はリュグノーへの道を引きずられてゆく。酸欠で掠れてきた視界の中、俺は元の世界へ想いを馳せる。

父さん母さん、それと妹よ。天原冬弥は、これから魔王城へと拉致されます。

15話 安心と信頼の拉致犯。(後書き)

読んで下さりありがとうございます。

あまはらとつやは シャイン・アロー を おぼえた !

これにてこの章は終わりとなります。  
次回からは新章へと……。。

## 16話 王都に到着しました。

時刻は早朝。

夜の帳もその役目を終え、空は白み、静かに夜が明けようとしている。

夜間に冷え切った空気は澄み切り、深呼吸でもすれば清浄な空気が臍腑に行き渡るだろう。

とはいえ、まだまだ街が活気を持つには早過ぎる時間だ。鶏ですら朝の訪れを知らせていない。

人々は未だ各々の寢所で夢の中にいて当然 夜でもないが朝でもない。そんな曖昧な時刻である。

「はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……」

その静謐な空気を押しよけるが如く、人気のない街路を往く影がある。

両手で金色の柄の先に円をいくつも重ねあわせた装飾を持つ杖、俗に錫杖と呼ばれる祭具を抱え、金具の擦れるシャンシャンという高い音を奏でながら影は一心に走ってゆく。

影は汚れ一つ付いていなかったらう白い長衣を地面から立つ埃に塗れさせながらも、気にする素振りすら見せず駆けていく。

その格好から推測するだに、影は神職に属する者と見て間違いない。

けれど、気にする素振りが無いというのは間違いだ。

「はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……」



ひたすらに前へ前へと進む影の横顔は、誰の目にも焦っていることが明らかだ。

服の汚れなどに気を払っている余裕もないというのが正しいだろう。長衣が絡むのだろう。時折、足をもつれさせ転びそうになりつつも、影は決して速度を落とさず走る。

ヒュー、ヒューと聞こえるのは呼吸音だ。

酷使された体が酸素を求め、懸命に呼吸をしようとしている。

そんな状態で走り続ければ当然、呼吸器は生命を維持するためのエラーを吐き出す。

「はあっ……げほっ……げほっげほっ！」

激しく咳き込みながら、それでも人影は速度を緩めようとしなない。

身体の異常など些事とでも言わんがばかりだ。

ただ、表情までは誤魔化せないようで、その顔は苦しそうに歪んでいる。

夜の明けきらない薄暗い街を往くのは、顔つきに幼さを残した少女だ。

豊かに伸ばした霞色の髪が無残にも風に乱れ、微かに赤色の重なる瞳は開けているのも精一杯という風情である。

普段は穏やかさを感じさせるであろう風貌ではあるのだが、今は少女の浮かべる決死の形相がそれを打ち消している。

走るといった運動に慣れていないらしい彼女の膝は哀れにも疲労に震えているのだが、彼女はふらつく体を意志でもって引きずるように動かしている。

そんな彼女の現状を一言で表すのなら、必死だとか懸命というものが相応しい。

酸欠に喘ぎながらも、彼女は走る。

彼女自身が先程気付いた、とある異変　それが何を意味するもの

かを伝えんが為、彼女はかの人への元へと急ぐ。

「は……やく……シア様とオリカ様に……これを伝えないと……！」

彼女の行く先には、大きな門が見えている。

その先には地平線から顔を覗かせてきた太陽に照らされる白亜の建物　ドミトリス城が悠然と建っていた。

「見えてきたぞ、あれが王都リュグノーじゃ」

「やっと着いたんだ……長かった……現代っ子の薄っぺらい体力の前には果てしない道程だった……」

サンボの町を出発してからおよそ一週間、俺達はようやく王都リュグノーに辿り着いていた。

サハギンに襲われるというハプニングが有りはしたが、それ以降の道中は至って平和だった。

平和だったんですが途中で町の一つも無かったのは何なんですか。

シア曰くりュグノーまでの最短距離を突っ切ったらしい。

慣れない長旅で俺は疲労困憊だったが、シアは意外と健脚だつようであり疲れている様子もない。

聞けば魔族は人間よりも体力が有るとかなんとか。種族差つてやつを痛感した旅路でした。まあ夜間は例のノーム製口グハウスでしつかり休めたのも大きいんでしょうけども。

遠くから見るリュグノーの街は一目でその規模の大きさが分かった。サンボの町とは格段に大きさが違う。街道を行き交う人の流れもかなり多い。

街全体を包むようにして高い城壁が立てられており、それよりも高い建造物がいくつも見えている。

遠目でも分かる一際高い尖塔がドミトリス王城とのこと。

今からあそこへ行くのか、と思うと若干げんなりした気持ちになる。何せこちとら一般ピープルですよ！王城とかそんな畏まらなきやいけない場なんて身分違いもいいとこだと思います。

つていうかどうして俺を王城に連れて行くのかをシアに尋ねても「会わせたい者がある」としか言ってくれないので非常に不安なんです。

詳しく訊こうとしてもものりくらりと躲されてしまつて追求出来ない。とはいえ俺はカナさんの住んでるといふササキの森までの道筋やら、この世界の常識も分からないのでシアに着いて行かざるを得ない。要するにシアに言われるがまま行動するしか今のところの選択肢は無いわけで。

そもそもシアは見た目に似合わずかなり力が強いので、首根っこ掴まれて引きずられれば物理的に逆らいようもない。

これが男相手だったら苛立つだろうが、シアのような美少女にニコリと微笑まされると許せる気になるのは青少年の悲しい性だと俺は思います。

それからしばらく歩き街へ近づけば近づくほど街を囲う城壁の広大

さに圧倒された。

流石にこれ程の規模の大きさの街を全て囲う訳にはいかないらしく、壁が立てられているのは主要な門のあるに留まるようではあったが、それでも街全体をぐるっと一周するという堀が外敵への備えを磐石なものにしていた。

街に入るには必ず堀に架けられた橋を通り、その先にある門をくぐる必要がある。

そこでは門番が街へ入る者たちを一人一人チェックしており、審査待ちの人々が列を成していた。

「ぐえ、あそこに並ぶのか……。時間かかりそうだね」

「あそこは南門じゃの。初めてリユグノーに入る者たちや、商人たちが荷物の検査を受けるところじゃ。じゃから一際混んでおる。私たちは別のところから街へ入るからの、時間なんぞ掛からぬよ」

「あ、そうなんだ。ってあれ、俺もそつちからでいいの？」

リユグノーに入るの初めてなんですが、と訊くとシアは苦笑した。

「おぬし、私が誰だか忘れておらんか？ドミトリスの王女じゃぞ。トーヤー人くらいどうとでもなるわ」

「それもそうか……。しかしお供の一人も付けないで出歩く王女ってどうなんだよ……」

「半ば抜け出す形で城から出てきたからのう、供なぞ付けている暇なんぞなかったのじゃ」

「……え、それってまずいんじゃないですか」

「大丈夫じゃ。置き手紙も残してきたしの。私が城を抜け出すなんて日常茶飯事じゃし、城の者も心配しておらんじゃろつて」

すっげえ破天荒だこのお姫様……！

何々と笑うシアとは対照的に俺の頬は引き攣る。王族というからにはやんごとなき身の上だろうに、それがこんな軽い調子でいいのだろうか。

振り回されているであろう城のお歴々には心から同情する。

俺達はそのまま南門を迂回し、街の東門へと向かった。

確かにこちらの門は然程混んではない。門番は立つてはいるが、通り過ぎる人物をいちいち審査したりはしていない。

ただ、人が門を潜るたびに門の上に取り付けられた水晶玉のような球体が淡く光を漏らしている。

「あの人が通ると光る玉……あれは何なの？」

「あれは門を通る者が入都審査を受けておる者かどうかを確認する魔道具じゃ。正式に入都審査を通ったものはリユグノーを守護する結界への入場許可が登録されての。一度それを済ませてしまえば入都審査をしなくても出入りが可能になるのじゃ」

「へえ、便利なもんだね」

「入都する目的によって滞在を許される期間は異なるがの。それを過ぎる場合は役所に行って更新手続が必要となるのじゃよ」

入国ビザみたいなものかなー、と思う。

この辺はすっかりしている辺りドミトリスの行政機能には感嘆する。科学が発展していないからといって文明レベルが一概に低いというわけでもないらしい。正直舐めていましたごめんなさい。

魔術という文化が存在している以上、此方の世界が俺の世界と違うベクトルでの進歩を遂げるのは正統と言えるだろう。

そんなことにも考えが及ばなかったのはひとえにサンボの町しか今まで見たことがなかったからだ。

あちらの町と王都ではやはり発展具合に大きな隔たりがある。

門の向こうに見える街並みからしていかにも都会という雰囲気醸し出しているし、出入りしている人々も多種多様だ。

ここまでの旅路で多少見慣れたとはいえ、角が生えてたり、肌が真っ青だったり、羽が生えてたりする人間以外の種族が行き交う光景には圧倒される。それを見るたびに異世界に居るんだなと思いつくのは仕方ないことだろう。

「色々物珍しかろうが、ここからはあまりキョロキョロするでないぞ。仮にもおぬしはこの私の客人として城に向かうのじゃからの。堂々としておれ」

「りよ、了解」

慌てて背筋を伸ばして前を見つつ歩く。背筋伸ばす必要は有るのかどうか分からないですが、王族の客人云々と言われたからにはある程度の礼儀正しさを心掛けたほうがいいんじゃないでしょうか。どうでしょうか。分かりませんね、知らんがな。

俺を先導するシアの後に付いて、俺は黒霧号を連れて門番へと近づいていった。

ちなみに、シアは王都が見えてきたところで黒霧号に積んでいた荷

物からフード付きの真紅のローブを引っ張り出して着込んでいる。フードを目深に被り、傍目からはシアの人相は伺えない。なんでも身分を隠すためだとか。そりゃあまあ、王女が普通にトコトコ歩いて門に行ったら大騒ぎになるしね……。ついでに俺も灰色ローブ付属のフードを同様に深く被っている。万が一騒ぎになったときに顔が割れるのを防ぐためだとか。

自分に歩み寄ってくる赤色ローブと灰色ローブに気づいたらしい門番が、こちらに胡乱な眼差しを送ってくる。

腰に指していた剣の柄に手をかけているあたり、なんか妙に警戒されている気がする。

そりゃそうですよね！誰だってフード被って近づいてくる二人組見たら警戒しますよね！不審者丸出しだもの！

これって逆効果だったんじゃない？と思わざるをえない。いきなり斬りかからないことを祈りつつ、俺は更に門番へと近づいていくシアを見守る。

シアは門番の正面に立つと、微かにフードを押し上げながら門番に話しかけ始めた。

最初は訝しげな眼差しだった門番が、驚きに目を見張ったかと思うと、次の瞬間には可哀想なくらい緊張した様子で背筋をピンと伸ばして敬礼をしようとした。

シアはそんな門番を睨めて敬礼を止めさせ、さらに2、3言指示を申し伝えているようだ。

……うん。いきなり自分が仕えてる国の姫様が現れて話しかけてきたらビビるよね……。

「よし、では頼んだのじゃ」

「ハッ！！」

シアは最後にそう門番に言い渡し、何事かの命令を受けたつばい哀れな門番は慌てて何処かへ全力疾走していった。その速度が滅茶苦茶速かったのが余計に哀れさを誘う。お仕事お疲れ様です。

門番を見送り、フードを深く下ろし直したシアが戻ってくる。

「城へ帰還報告と迎えを頼んだ。じきに迎えの者が来るじゃろつて

「可哀想な門番さん……」

それからしばらくボーツと人（とか魔族の方々）の流れを眺めっていると、何処からか騒々しい音が聞こえてきた。

「なんだ……？」

音のする方を見ると、馬に跨った黒と金に縁どられた軍服風な服を着込んだ人が此方へと猛然と走ってきていた。

人の流れをかき分けるように突き進む黒金軍服さんに、通りがかつた人は慌てて道を譲っている。

避けきれなかったら轢死するでしょうあれ。

「む？あれは……」

同じくそちらに視線を向けていたシアが何かに気づいたように漏ら



す。

「シア、あれ知ってる人？」

「恐らくの。あの色合いの軍装束から見ると、あやつは……」

シアが言いかけたとき、黒金軍服さんが大声を上げた。

「シ〜〜〜〜ア〜〜〜〜さ〜〜〜〜ま〜〜〜〜！」

「あつ」

シアに尋ねようと視線を逸らしたのがいけなかった。

すぐ近くでシアを呼ぶ声がかと思つた刹那、ドゴス！とおかしな音を立てて俺の体が横合いに吹っ飛んでいた。

チラリと見えた視線の先では、シアと黒金軍服さんが呆然と吹き飛んでいく俺を見送っており

続けて響いたバガス！という後頭部を地面に打ち付ける音と共に、俺の意識は黒く塗り潰されていった。

16話 王都に到着しました。(後書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。  
誤字脱字などがあつた際にはご連絡いただけると幸いです。

## 17話 シチュエーション・シナジー。

「痛い……まだ頭の奥のほうがズッキンズッキン響きやがりますよ……」

「ごめんねえ。シア様がお帰りになられたって聞いて慌ててたの〜」どこか間延びした口調で謝りつつ、俺とシアを先導していた黒金軍服さんが申し訳なさに頭を掻く。

その頭の上には獣人の証である猫耳……虎耳と言ったほうが正しいだろうが、獣耳がピコピコと揺れていた。

黒金軍服さん イルヴァ・パルソンと名乗った彼女が、東門で俺と衝突事故を起こした張本人である。

イルヴァさんは所々だらしなく着崩れした軍服から覗く肌は褐色で、柿色の髪色と相俟って全体的に野性味溢れる容貌をしている。

けれども喋り方が天然系なので、親しみやすそうなお姉さんという感想を俺は持った。

いいじゃないですか年上天然。素晴らしいじゃないですか年上天然。衝突事故から意識不明へのコンボ程度なら許せますよ俺は！

ちなみに俺は気絶からすぐに意識を回復させました。尾を引く鈍痛以外に怪我はないのは【自問自答】さんによる回答で検査済みです。俺が意識を取り戻してすぐに、俺とシアはイルヴァさんに連れられて王城に辿り着いた。

普段であれば王城のあまりの荘厳さに恐縮しきりだったろうが、如何せん頭痛が酷くてそれどころではなかった。

始終頭を抱えるようにして入城したもんだから、辺りを見回してい

る余裕もありませんでした。ようやく会話できるくらいに回復したのは、つい先程のことである。

今は王城の中のやたら長い廊下をイルヴァさんに先導されて歩いている。

廊下の所々に飾られている壺やら絵画やら、奇怪な生物の剥製やらを眺めつつ、俺は何事かを話し合うシアとイルヴァさんの後ろについていく。

「イルヴァはもう少し周りに注意することを覚えてほしいのう

して、イルヴァよ。伝えたいこととは何なのじゃ？ 危急の要件のようじゃが」

「それはアタシじゃなくて、テルミナちゃんから聞いてください。アタシは大急ぎでシア様連れてくるように言われただけです」

「テルミナ？ テルミナが城に来ておるのか？」

「はい。今朝、真っ青な顔で城に駆けこんできて、それからずっとオリカ様と話してるみたいです。アタシはさつき、オリカ様から直々にシア様を何としてでも早急に探して連れ戻すようにとの命令を頂きました」

「ふうむ……。テルミナがオリカとのう……。私を探しておったということは精霊関係で何か起こったと見るべきかの」

「シア様はちゃんと皆にお許し貰ってから出かけるようにしたほうがいいですよ？ いつも突然お出かけなさるので、その度に魔王様とかオリカ様が大騒ぎするんですから」

「皆から許しなぞ貰おうと思ったたら1年有っても足りぬじゃろって」

「仕方ないですよ、お姫様なんですから。それにしても……」  
そこでイルヴァさんがチラリと俺に意味ありげな視線を送ってくる。  
なんだろう、俺を見る目が若干面白がっているソレなんです。

「シア様がおムコさん連れて帰ってくるなんてビックリですよ」

「「なっ!?!?」「」

俺とシアの声が八毛る。

「ばば馬鹿者！私とトーヤはそのような関係ではないのじゃ!」

ちよつともつてるところにキュンとききました!

突然のイルヴァさんの勘違い発言にどう反応していいか分からず黙  
りこむ俺とは対照的に、シアは顔を真っ赤にしてすぐさま反論した。  
だが、イルヴァさんは相変わらず微笑みながら俺とシアとを交互に  
見るばかりだ。

「え〜?だつてさっき、トーヤちゃんが気絶したときのシア様の動  
揺振りは凄かつたですよ?」

「誰だつて目の前で知り合いが馬に轢かれれば心配するじゃろうが  
!」

「倒れ伏すトーヤちゃんに駆け寄つて、『トーヤ、死ぬでない!私  
はまだおぬしを……』つて言いながら涙目で」

「白目剥いて泡吹いてたから死んだかと思つたのじゃ!」

「まるで物語でよくあるラブロマンスの最後みたいでした」

「どこにゴボゴボと気色の悪い音を立てて泡吹きつつ死んでゆく男を看取る物語があるというのじゃ！」

初めて明かされた事故直後の状態に、ドツと冷たい汗が吹き出した。イルヴァさんの発言よりも気にかかる単語を発したシアに焦って尋ねる。

「えっ、なんですかそれ！俺ってそんなにヤバげな状態だったの！？」

「ビクンビクンしておった。陸に打ち上げられた魚のようじゃった」

「怖ッ、良く生きてましたね俺！？」

「イルヴァに轢かれたとき、あまりにも綺麗に飛んでいったしこのう、何というか、きりもみ回転で」

「何で衝突事故で回転加えられてるんですか俺！？フツー横からぶつかったら吹き飛ぶだけだよ！何処に回る要素あったの！？」

「芸術点をやっても良いのじゃ」

「評価された！衝突事故なのに！」

「着地に成功しておれば満点じゃったのに、勿体無いのう」

「減点されてた！？」

「あの体勢からであれば地面に突き刺さることも可能じゃったろうに……」

「頭から刺されと仰られますか！」

一転して心底残念そうな眼差しになるシア。

「いったい、あの事故に対してシアは何を求めていたのか俺には分からないよ……」。

「つていうかきりもみ回転で飛んでいって頭から地面に突き刺さって生きてるのって漫画だけですからね！」

「現実そんな離れ業やらかしたら首の骨がポツキリ逝ってお陀仏ですよ！」

「不毛な思考に捕らわれていると、ニコニコしているイルヴァさんと目が合った。」

「うふふ、やっぱりラブラブじゃないですか」

「どどどがじゃー！」「どどどら辺がー！」

「息までぴったりですね。この調子ならシア様のお子を見れるのも近そうですね。やっぱり最初は女の子がいいのかなあ。あつ、でも男の子でドミトリスの王位継承してもらつのもいいかも？ 臣下も国民も大喜びするし……」

「じ、どどど……！？ ふふふ不敬じゃぞー！」

「だってシア様ももう18歳ですよ？ そろそろ結婚されてもいいお年じゃないですか」

「25歳で独身のおぬしには言われたくないのじゃ！」

イルヴァさんって25歳なんだ……。

豊富な体つきといい、年上だと思ってたけど年齢が分かると何か嬉しいですね！

年上属性確定バンザイですよ、うん！

「ふふっ。照れてるシア様も可愛いですよ。ねえ、そう思うよね  
トーヤちゃん」

「そこで話を振りますか！」

思わず俺はシアを見つめてしまう。

羞恥に染まった整った顔立ち。動揺してわななく唇。反論しろとばかりに健気に訴えてくる眼差しは、自分より長身な俺と視線を合わせるための上目遣い。

握りこまれた小さな手のひら。

乳は皆無だが、そこに目を瞑れば完璧な容姿。

いつも何処か超然としているところのあるシアが、イルヴァさんに良いように弄ばれているというシチュエーション。

うん。

「はい、可愛いです！」

「ぐふっ……！」

本音が口を衝いて出る。だって可愛いものに可愛いと言って何が悪



いというんですか！

美少女なら尚更、躊躇することなんて在り得ません。思いはちゃんと伝えないといけないと思います！

俺からの予想外の追撃に、美少女にあるまじき声を上げてシアが俯く。

髪の間から垣間見える雪花石膏の如き透き通った肌は、耳まで赤く染まっている。

恥ずかしさがゲージを振り切ったようだ。

「あらあら、シア様ったら真っ赤っか」

「ええ。でも恥じらう姿も可愛いですよね！」

「そうだね」

相槌を打つイルヴァさんは物凄く生き生きとしていた。また、この短い遣り取りで俺はイルヴァさんとは仲良くできそうな気がしてきていた。

やはり価値観が通じ合うというのは素晴らしいことだ。

ビバ可愛い物！最高ですよ美少女！

いやまあ、厳密にはイルヴァさんのは違う気がしますが、そんな瑣末な事なんて関係ないですよ！

テンションの上がった俺はイルヴァさんに握手を求めた。

向こうもニッコリと一際強く笑うと、握手に応じてくれた。

「イルヴァさん、貴女とは仲良く出来そうです」

「はい、私もトーヤちゃんの今後の活躍に期待してるよ」

「おぬしら……今に見ておれよ……」

笑顔で握手を交わす俺たちを恨めし気に睨むシアも、この時ばかりは全く怖くなかった。

17話 シチュエーション・シナジー。(後書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

今回は主に会話パートでした。伏線の未来はどっちだ。

追記 アルファポリスに登録してみました。クリックしていただけると小躍りします。

## 18話 魔王の娘達。

イルヴァさんと打ち解け、和やかに談笑しながら俺達は王城の廊下を進んでゆく。

なにやらシアだけは暗いオーラを纏わせつつだんまりを決め込んでいるので、イルヴァさんと俺だけが会話しているわけですが。

先程イルヴァさんにからかわれたのが尾を引いているようで、損ねた機嫌が回復しないご様子。

下手に会話に混ぜられてまた弄られるのを警戒しているらしく、シアは俺とイルヴァさんの話には無関心を装う心づもりを決め込んだようだ。

それでも時折イルヴァさんがシアを釣ろうと話題に「おムコ」やら「お子」などを挙げる度、物言いたげに此方を睨むものの、目を合わせるとツンとそっぽを向いてしまうシアの仕草が実に新鮮です。その反応がイルヴァさんを萌えさせ、さらに良い反応を引き出すとちよつかいを出す悪循環が生まれていた。

シアがそれに気付くのはいつだろうか。現状を見るだに兆候すらありません。

まあ、見ている分には非常に楽しいので俺は一向に構いませんが！美少女がムスツとしていいるのも中々オツだと思います！

「トーヤちゃん、あの離れにオリカ様のお部屋が有るんだよ〜」

「おおー、……白い」

イルヴァさんの指差す方には、言葉通り白い館が建っていた。王城の中庭に建てられた離れのような館だ。

館の周りには色とりどりの花が咲いており、丁寧に手入れのされた生垣に囲まれている佇まいは花園の館と形容しても間違いいではない。建物の外観もどことなく可愛らしい作りをしており、そこだけが城という仰々しい場にそぐわない雰囲気醸し出している。

中庭とはいえ、城自体の規模がかなり大きいため結構な広さがあるのだが、その館はその中庭の中央に鎮座するように建てられている。その周囲はフラワーガーデン。見ればやたら凝った意匠の施された噴水もある。なんというか全体的な印象としては実にメルヘンチック。

何故あんなところに館がとは思わずにはいられない。

つていうかお姫様のお部屋が離れとか普通なんでしょう。よく分からないのだが、お姫様つていうのは一般的に城の中でも最も高い塔とかに部屋を持つてるイメージがある。それはもっぱら数有る冒険小説やゲームからの知識ではあるが、お姫様というのが万が一にも危険な目に遭わせる訳にはいかない身の上である以上、防犯という観点から見て中庭の館つていうのは論外な気がします。

いやまあ城自体が防犯レベル高めなのだろうから、この心配は杞憂なのかもしれないが。

「あの建物は『精霊宮』つて言つてね。シア様とオリカ様が精霊術にお目覚めになられたとき、魔王様と国の重鎮たちが大盛り上がりしてノリノリで建てたものなの。だから精霊宮だけはドミトリス城のなかでも一番新しい建物で、掃除も行き届いてるからいつつも綺麗だね。眺めてると癒されるよね」

「へえ……。じゃあ、あそこはお姫様のために建てられた館つてこ

「となんですネ」

通りで何かメルヘンな感じがするわけだと納得する。  
魔王とか国の重鎮さん方のシア達に対する愛情というか暴走っぷりも伺えるところではあるが。

と、そこで懽然としながらもシアが久々に口を開いた。若干イラついている様子なのはからかわれすぎたせいだろう。

「ふん。あのような花に囲まれた白い家のような少女趣味丸出しなモノを建てられてもいい迷惑じゃがの」

「あれ、シアの部屋もあそこにあるんじゃないの？」

「誰があんな恥ずかしい建物に部屋なぞ持つか。あそこに部屋を持つてるのはオリ力だけじゃ。私の部屋は普通に城内じゃよ」

「恥ずかしい建物……」

酷い言いようではあるが、確かにあそこに住めと言われてもなあ……。

「ふふつ。建築が終わったあと、シア様もミリイ様も精霊宮に住むのは絶対に嫌だって引かなくなつてね。しょんぼりしちゃった魔王様と国の重鎮たちが一時期、ぜんぜん仕事しなくなつて大事になりかけたことがあったのよ。通称『しょんぼり精霊宮事件』」

「それで大丈夫なんですかドミトリス!？」

「今でも『精霊宮』ではなく『しょんぼり宮』などと皮肉られるし

の。主に私から父上が」

「父親の尊厳が危ない！」

顔を合わせたことはないが、魔王様には同情を禁じ得ない。

娘によかれと思ってプレゼントしたものを全力で拒否される父親の心境は推して知るべしだろう。

それを未だに引きずられ、事あるごとに娘から嫌味を言われる父親のなんと哀れなことが。

「って、そういえばミリイって誰？」

精霊宮に住むことを嫌がったのはシアとミリイという人物という話だが、ミリイって誰だろうか。

「……あ、トーヤちゃんはミリイ様のこと知らないんだ？」

「ええ。初めて聞く名前です」

イルヴァさんがここにきて初めて表情を笑顔から困ったような顔に切り替えた。

なんだか何処から説明したものかと考えあぐねているようだ。ミリイという人はそんな説明に困るような人なのだろうかと内心で首をひねる。

「ミリイ様はね……」

「よい。私から説明しよう」

俺の質問に返えてくれようとしたイルヴァさんの言葉にシアが割っ

て入った。

「ミリイは私の下の妹じゃよ。ミリイレ・ドミトリス・メイロウがフルネームじゃ。私、オリカ、ミリイで三姉妹なのじゃよ。私からするとオリカが1歳下で、ミリイは3歳下じゃ」

「ああ、オリカさんの他にも姉妹いたんだ……。てつきり二人姉妹なのかと思ってたよ」

「うむ。特に話してなかったしの……。それでの、実を言うとおぬしに会わせたい者というのがミリイのことなのじゃ」

「へ……？」

思いがけないところから、俺が王城に引き連れられてきた目的を明かされた。

同時になんでまたシアの妹に俺を合わせたいのかが気になった。

実のところ俺を此処まで連れてくる気になったときのシアの問答無用さにはうすら寒いものを感じていたわけで、厄介な事情があるのではないかと勘ぐっていたところがある。

誰だって「楽しみじゃククク」とか含み笑いしている人物に引きずられれば我が身の危険を感じるのは当然だと思えます。

「ミリイはちよいと訳ありでの。数ヶ月前よりずっと自分の部屋に閉じこもりきりなのじゃが、その解決のためトーヤに一役買ってもらいたくてのう」

シアがそう言うと、何故かイルヴァさんが硬直した。

口元がひくつき、褐色の肌が何処と無く血色を薄くしているように見える。



イルヴァさんの反応に嫌な予感がして、俺はシアに尋ねる。

「……俺に、何をさせる気なんです？」

「難しいことはない。ただトーヤはミリイを手伝ってくれればそれでいいのじゃ」

「具体的にはどんなことを手伝うのか教えて貰っても？」

「……………」

「え、何でそこで黙るんですか!？」

「……ふん」

あつ、駄目だこれ。シアさんのまなじりの眦が釣り上がってますよ! イラついてて俺の質問に答える気ないですよ!

教えてなんぞやらんという気迫がひしひしと伝わってくる。ついでに、状況から察するにミリイさんの手伝いとやらは恐らく面倒事に違いなさそうだ。

「さてと、此処までお連れしたことですし、私は職務に戻りますね」

俺とシアの醸し出す面倒事オーラを敏感に感知したイルヴァさんがそう口にする。

シアと俺との間に取り交わされている何かを聞いては申し訳ないと思ったのか、単に巻き込まれるのを嫌ったのかは定かではないが、どちらにせよこの場から逃げ出そうとしている事には違いない。

「……………！」

俺は無言で必死にイルヴァさんに助けを求めろ。今まで散々シアをからかっておいて危なくなったら逃げるなんて冗談じゃないですよ！この場に一人取り残されれば不機嫌になったシアさんにどんな倍返しされるか分かったもんじゃない！

機嫌を損ねた美少女を和やかに観察できるのは手綱を握れる人物が傍にいるからであって、ひとたび鎖から解き放たれたご機嫌ナメなナイチチを抑えきれぬスキルなんて持ち合わせていない俺にとつて、ここでイルヴァさんが居なくなればシアが俺に逆襲の矛先を向けるのは想像に難くない。

そんな俺の無言の訴えに微笑を浮かべながらも、イルヴァさんはじりじりと下がっていく。

「待つんじゃない、イルヴァ。おぬしはトーヤの身なりを整える手配を頼むのじゃ」

「え、私も仕事が」

「馬鹿を申すでない。おぬしの仕事は私を連れ戻すことじゃったろ。うが。たまたま私は帰ってきていたが、そうでなければ長くて数週間かかる仕事じゃ。他の仕事なんぞ既に都合をつけておるじゃろうに」

「ですから、仕事の完遂の報告とかが」……………」

「大丈夫じゃ。オリカの部屋の衛兵にでも私の帰城報告をするように申し伝えておこう」

「……………私はミリイ様のところへは行かなくてもいいんですよ

「？」

恐る恐る、といった様子でイルヴァさんが尋ねた。  
のほほんとしているイルヴァさんにそぐわない躊躇いがちな口調だ。  
どうにもミリイさんの所へは行きたくないらしい。そんな人のところ  
に手伝いに行かされるという俺。嫌な汗がダラダラと流れてくる  
気がする。

「勿論」

「……ほっ」

イルヴァさんが心底安心したように息を吐く。が、シアはそれを  
確認してからクククと意地悪げに笑い、さも当然と言い放った。

「勿論、一緒に行くのじゃぞ？」

「……え、ええ〜!？」

絶望に彩られたイルヴァさんの表情を見て、「ああ、俺はロクでも  
ない手伝いをさせられるんだな」と諦観を抱いた俺だった。

「では私はオリカのところへ行つてくるのじゃ。後は任せたぞ、イルヴァ。……くれぐれも、逃げるでないぞ?」

「はあい〜……」

気の毒なくらい肩を落としたイルヴァさんと、これから我が身にふりかかる多難を想像してげんなりする俺を残して、シアはトコトコと精霊宮へと歩き去っていった。

その姿を見送つてから、イルヴァさんが重い溜息を吐いた。

「じゃあ、トーヤちゃん……お風呂とか着替えとかしちやあつか〜

……」

「は、はい……」

イルヴァさんに先導されて、俺は城の廊下を進んでゆく。

やがて先程歩いてきた廊下よりも装飾の少ない 恐らくは行政スペースだろう ところを抜け、来客用と見受けられる部屋に辿り着いていた。

城に務めていると思しき人とすれ違つたび、やたらジロジロと見られていたのは気のせいだろうか。

案内された部屋は、一言で言えば豪奢という表現に尽きた。

毛の長い絨毯が敷き詰められ、並べられた家具の一つ一つも、さも自身が値打ちものだと言張するように存在感を持っている。

どれか一つとっても生半可な値段ではないだろう。正直、こんな部屋に案内されても困るんですが……！

そんな俺の迷惑を知らず「少し待っててね」と言い残し、イルヴァさんが部屋を後にしてしばらく。

やたらフカフカする傍目から見ても高級と分かるソファーに肩身の狭い思いで座って待っていた俺のところへ、イルヴァさんが数人の侍女らしき方々を引き連れて帰ってきた。

侍女と分かるのは、ここまで来る間に見かけた幾人かと服装が同じだからだ。

いや、迂遠な表現は避けよう。

メイド服だったから分かりました！何処からどう見てもメイドさんです！

流石に萌え文化はないようで、極端なミニスカやら露出を良しとする作りではなく、きちんと実用向きの範疇に留まる作りをしているものの、パツと見ただけでメイドと分かる衣装である。

異世界とのささやかな接点を見つけて、俺のテンションはダダ上がりです。

さらにメイド服を身にまとうのが、コスプレではなく本物の羽やら尻尾やらをお持ちの魔族の方だというから素晴らしい。

コスプレも悪くはないと思うが、やはり実物の前には霞む……！異世界バンザイ！

だが、やってきたメイドさん方を見回して、俺はあることに気づいた。

「おまたせ。トーヤちゃん、今から服のサイズ計っちゃうから、ローブ脱いでくれる？」

「残念なのは獣耳メイドさんがいないことです！」

「……トーヤちゃん？なに意味のわからないこと言ってるの〜？」

「残念なのは獣耳メイドさんがいないことなんですよ！」

「何で二回言ったの〜……？」

ああ、どうやら異世界では浪漫は分かってもらえないらしいです。ちなみに俺の新しい服とやらは夕方には出来上がるそうです。なんだその早さ。

その後、メイドさんに囲まれながらの採寸を終え、浴場へと案内された俺は久々のバスタイムを楽しませてもらった。

浴場とはいうものの当然のことながら日本式のような浴槽に湯を張ったものではなく、サウナ式で汗を流す形式のものではあったが。それでも汗を流して体を擦り、水掛場で水を浴びるとさっぱりした。サンボの町から王城に辿り着くまでも、シアの用意したノームハウスに備え付けのシャワールームを使ってはいたが、こうしてしっかりとしたサウナに入って汗を流すのはひと味違う。

これまでに蓄積された疲れが癒される思いだ。久々に爽快とした気持ちになりサウナから出ると、脱衣場のカゴにはいつのまにやら綺麗に洗濯された俺の衣服が畳んであった。

「仕事が、すげえ速い……」

風呂に入っていたのはせいぜいが20分前後だろうに、その間に服

を洗い、乾かし、なんかやたらきつちりとシワ一つ無い仕上がりとなった我が衣服。

どんなトリックを使ったらこんな所業が可能なんだろう。恐るべきは異世界メイド……！

服の仕立てといい、洗濯の早さといい、異世界のメイドは化物かつ！いやまあ服の仕立てはメイドさんがやるわけでなく専門の人がやるんでしょうし、洗濯がやたら早いのは魔術の恩恵によるものとかそういうアレなんだろう。

ともあれ、と脱衣所から出ながら俺は外を見る。

すぐ傍に備え付けられた窓から見える空に浮かぶ太陽は高い位置にある。夕方までにはまだまだ時間があるようだ。

服が出来た頃にシアがやってくるらしいので、それまでどう時間を潰したのかと考えを巡らせる。

「って言っても、部屋で待つしかないよなあ……」

客人扱いの俺がブラブラとその辺を歩きまわるわけにもいかないだろう。

件のミリィさんのところへ出向くまでの心の準備だとか、イルヴァさんからの情報収集に勤めようと決め、俺は客室へと戻ることにしたのだ。





18話 魔王の娘達。(後書き)

読んで下さりありがとうございます。

シア以外の魔王の娘の登場フラグでした。

## 19話 見え隠れする暗雲とか趣味とか。

「では私はオリカのところへ行つてくるのじゃ。後は任せたぞ、イルヴァ。……くれぐれも、逃げるでないぞ?」

「はあい……」

肩を落として頂垂れるイルヴァに念押しし、私は妹の待つ精霊宮へと歩を進める。

別れ際、トーヤが疲れきった表情をしていたが、あれは恐らく「ミリーの手伝い」が凡そ容易いものではないと見当がついた故だろう。手伝いの内容は置いておくとして、何を手伝うかを尋ねても私から教えてもらえなかったのだから余計に不安に思うのは当然だ。

良いザマだ。あれだけ人を弄り回したのだから仕返しをされても文句はあるまい。いや、有ったとしても関係ない。捻り潰す。

そも、と私は考える。

私が男を連れて帰ってきたからと言って、それをすぐに恋愛に絡めて考えるイルヴァの脳髓は桃色に染まりきっている。

というか仮にも魔王の娘に対して不敬ではなかるうか。

まあ別にそれはいい。あの脳天気な虎獣人イルヴァに期待することが間違っている。

トーヤ、か。

私が誤って喚んでしまった異世界の人間。

出会ってから此処までの旅路で感じた彼の印象は、一言で言つと「お人好し」。

自分が異世界に引きずり込まれた言わば被害者だというのに、加害者である私を責めたりせず……あれ、責められたか?あれはどうな

んだ？

まあいい。

ともあれ彼は私を憎むこともせず、どころか私の意図を理解してくれようと努めてくれた。

その上、「私を疑った」と謝りさえする。私を疑うなぞ自分を取り巻く状況を考えれば当然だろうに。

不思議な男だと思う。

二言目を付け加えるならば「エロ坊主」なところが玉にキズだが。

あやつは隙さえあればエロ目的に向かってひた走る部分がある。思考が煩惱に引きずられて奔走しているくらいがあるのは私の気のせいなのかどうか。

総じて言えば、善人であることは疑いようがない。

だからこそ、私はトーヤを元の世界に戻すべく手段を講じることに躊躇いはないのだが、人を小馬鹿にした報いだ。その前に色々働いてもらおう。

精霊宮の本館の入り口に小さく設けられた白い門を潜り、私は精霊宮に足を踏み入れた。

周りを花々に包まれたこの場所は何時も花弁から漏れ出す甘い匂いが漂っている。

季節に左右されず花が咲き続けるように魔術によって整えられたこの場は、まるでお伽噺のように現実感を伴わない。

お姫様の家、ね。

こんな所に自分の部屋を持つなど信じられない。此方がこんなものを本気で喜ぶと思っていいたらしい父上の感性はずれているとしか言いようがない。

そしてそのずれた感性を同じく持っているらしい妹。

「オリカは昔から夢見がちだったしのう……」

「何かにつけて城を飛び出していく、破天荒なシア姉様よりはマシですわ」

「……オリカ」

漏らした言葉を思いがけず返され、声のした方を見やれば 浅葱と白に彩られた柔らかなドレスに身を包んだ我が妹、オリカが此方を不機嫌そうに見つめていた。

オリカの隣には神官であることを現す白いローブを着込んだ小柄な少女が控えている。少女は私が見たことに気づくと、慌てた様子で頭を下げた。

「あつ、えつと……！シア様、ご無沙汰しております！」

「うむ。久しぶりじゃの、テルミナ」

肩口で揃えた淡い萌黄色の髪を揺らし      ロープの厚い生地の上からでも分かる胸元の豊満な双丘をも揺らし      若干緊張した様子のテルミナの様子に微笑む。

この小動物然とした少女は愛いのう、などと考えつつも、私は本題を切り出す。

「して、オリカ、テルミナ。私に用が有ったようじゃが……どうしたのじゃ？」

「そ、それがですねシア様！」

「待ちなさいなテルミナ。この話はわたくしの部屋でしましょう」

「あ、はい……」

がばりと顔を跳ね上げテルミナが必死な様子で話そうとしたのを遮り、オリカが自分の部屋へと身を翻す。

オリカの部屋に入り、中央に置かれたソファに身を沈める。

対面にはオリカとテルミナが並んで座った。

久々に訪れたオリカの部屋は、なんというか、やはり。

「相変わらずの少女趣味じゃのう……」

「別に良いじゃないですよ！」

全体的に桃色と白色系で統一された部屋の雰囲気は、見ただけで甘やかな空気に満ちている。

加えて、家具に施された装飾の数々までもが可愛らしいもので揃えられており、部屋のあちこちにはぬいぐるみまで見え隠れしている。本人の性格はなんというか若干キツめなのだが、その趣味嗜好とのギャップが酷いのではないかと私は思う。

それ以上、自分の嗜好の話が続けられるのを嫌がったオリカが、こぼんと咳払いをする。

私が自分に注目したのを確認してから、オリカは眉根を寄せてこう切り出した。

「……さて、改めまして。お帰りなさいませシア姉様。帰って来られて早々ですが、面倒事が起こりそうなのですわ」



19話 見え隠れする暗雲とか趣味とか。(後書き)

お久しぶりです。

短めですが復活の狼煙を上げに参りました。ギャグ無しですみませ  
ん…。

さて、更新していなかった理由なんですが……。

言い訳をさせて頂きますと、この2ヶ月はまさに怒涛の勢いでイベ  
ントが巻き起こったんですよ。

? 例の地震の影響で、今頃になって家が壊れる

? 必死に家を直すべく金策に走る

? 融資してくれる銀行見つけた!

? 勤め先の会社が倒産

? 銀行が貸し渋りをし始める

? ぐおおおおおおお

とまあ色々有ったわけですが、ようやく落ち着き始めたのでゆるゆ  
ると更新を再開したいと思います。ペースは落ちますが、どうかよ  
ろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1801u/>

---

魔王の娘と異世界拉致された俺

2011年10月6日22時10分発行